

# 菅 生 館 跡

平成18年3月

村田町教育委員会

すごうたてあと  
菅生館跡

# 序 文

村田町教育委員会

教育長 吉野 薫

藏王連峰の麓、柴田郡のほぼ中央部に位置する村田町は、旧石器時代から中世にかけて180箇所もの多くの遺跡が見つかっています。菅生地区は、村田町でも北東部に位置しており、自動車やバイクなどのレーシングコースがあるSUGOとして国際的に有名なところです。

菅生地区にも多くの遺跡があり、その中心的な存在として菅生助八郎が城主であったと伝えられる菅生館跡があります。館跡のある山を、地元の人々は親しみをこめて館山とか城山と呼んでいます。昔は、小学校の遠足で登ったというところでしたが、近年は訪れる人々も少なくなったと聞き及んでいます。

このような菅生館跡を、県営中山間地域総合整備事業は場整備事業の一環で地域住民の憩いの場としての農村公園に整備するという事業が計画され、それに伴って発掘調査を行いました。

その結果、本丸の周辺などから掘立柱建物跡や、大規模な堀切や土塁などの遺構が見つかりました。また、中世に使用された陶器や磁器の破片、石臼、石鉢などが出土しました。これらの遺物から、菅生館跡は鎌倉時代後半に造られ、戦国時代に再び使われたものと考えられます。

さらに、菅生館を造る以前の縄文時代の土器や石器も出土し、この館跡のある山において縄文時代の人々が生活を営んでいた場所であったことが判明するなど、数々の貴重な成果がありました。

ここに、そのような成果を広く紹介するために、村田町文化財調査報告書第22集として、菅生館跡の発掘調査報告書を刊行することになりました。

最後になりましたが、夏の暑い最中の発掘作業に当られた方々、発掘調査のご指導や調査報告書の作成にご協力をいただきました、機関や個人の皆様に感謝申し上げます。

平成18年3月

## 例　　言

1. 本書は村田町文化財調査報告書第22集で、県営中山間地域総合整備事業は場整備事業皆生地区交流施設皆生館整備工事に伴う皆生館跡の遺構確認調査の報告書である。本書の内容は、「平成17年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」(宮城県考古学会・平成17年12月18日)に優先するものである。
2. 本書は、石黒伸一郎が執筆・編集した。
3. 本書の図版および注記表・観察表などは下記の者が作成した。  
只野宗一・渡邊香織・秋葉泰徳・小原豊
4. 本書に掲載した写真は、石黒が撮影した。
5. 石器の石材については蟹澤聰史氏、中世陶磁器については佐藤洋氏に鑑定していただいた。
6. 発掘調査および本書の作成については、次の機関および方々よりご指導・ご協力をいただいた。記して感謝するものである。(敬称略・順不同)

宮城県教育庁文化財保護課・宮城県大河原地方振興事務所・村田町農林振興課

佐々木安彦・柳田俊雄・佐川正敏・吉井 宏・小荒井太一・佐藤則之・須田良平・菊地逸夫・相原淳一  
山田晃弘・吉岡恭平・主浜光郎・高橋健寿・口下和寿

7. 調査に当たっては、皆生下区長の佐藤英勝氏をはじめとして、地元の方々の多くなるご協力をいただいた。
8. 出土遺物および調査・報告書作成に関する資料・記録類は、村田町教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 本報告書の土色については、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』(日本色研事業)を使用した。
2. 本文中および図中の標高は海拔高である。
3. 図中の北は真北である。
4. 第1図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「仙台西南部」「岩沼」「陸前川崎」「村田」を使用した。
5. 第2図は、村田町発行の2,500分の1国土基本図(X-QD・78-3, X-QD・78-4)を50%縮小して使用した。
6. 第3図は、村田町発行の2,500分の1国土基本図(X-QD・78-4)を250%拡大再トレースしたものに、村田町教育委員会が作成した皆生館跡の概要図を組み合わせたものである。
7. 付図は、皆生館跡中央部の測量図で、宮城県大河原地方振興事務所が作成したものである。
8. 平面基準は、平面直角座標系第X系を使用している。
9. 遺構図は、調査時に20分の1で作成したものと、適宜縮小して掲載し、スケールは各図版に示した。
10. 遺物図は実寸で作成したものを、陶磁器・土器は厚寸または3分の1か3分の2、石器は3分の2、石製品は3分の2または4分の1、木製品は3分の2で掲載し、スケールは各図版に示した。
11. 遺物写真は、原則として3分の2にしたが、原寸または3分の1で掲載したものもある。
12. 引用・参考文献については、本文中では(文献1)などとし、リストは巻末に掲載した。

## 目 次

(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査要項	1
(3) 位置と歴史的環境	1
(4) 菅生館跡の概要と館主	4
①菅生館跡の概要	4
②菅生館の館主	9
(5) 調査の方法	10
(6) 菅生館跡の地層	10
(7) 調査結果	15
①第1トレンチ	15
②第2トレンチ	15
③第3トレンチ	15
④第4トレンチ	15
⑤第5トレンチ	19
⑥第6トレンチ	19
⑦第7トレンチ	19
⑧第8トレンチ	19
⑨第9トレンチ	29
⑩第10トレンチ	29
⑪第11トレンチ	29
⑫第12トレンチ	29
⑬第13トレンチ	29
⑭第14トレンチ	35
⑮第15トレンチ	35
⑯第16トレンチ	35
⑰第17トレンチ	39
⑱第18トレンチ	39
⑲第19トレンチ	39
⑳第20トレンチ	39
㉑第21トレンチ	39
㉒A区	48
(8) まとめ	54
①中世	54
②縄文時代～古代	55
付編 菅生館跡南郭土壘下出土遺物の年代に関する自然科学分析	58
写真図版	63
報告書抄録	116

## 図 版 目 次

第1図	菅生館跡位置図	2
第2図	菅生館跡周辺地形図	3
第3図	菅生館跡概要図	5
第4図	調査区配置図	11
第5図	層序模式図	13
第6図	第1トレンチ	16
第7図	第2トレンチ	17
第8図	第3トレンチ	18
第9図	第4トレンチ	18
第10図	第5トレンチ	20
第11図	第6トレンチ	21
第12図	第6トレンチ断面	22
第13図	第6トレンチ出土遺物・槽状遺構表採遺物	23
第14図	第7トレンチ	24
第15図	第7トレンチ断面	25
第16図	第8トレンチ	26
第17図	第8トレンチ断面	27
第18図	第8トレンチ出土遺物	28
第19図	第9トレンチ	30
第20図	第9トレンチ出土遺物	30
第21図	第11トレンチ	31
第22図	第13トレンチ	32
第23図	第13トレンチ出土遺物①	33
第24図	第13トレンチ出土遺物②	34
第25図	第14トレンチ	36
第26図	第16トレンチ	37
第27図	第16トレンチ断面	37
第28図	第19トレンチ	40
第29図	第20トレンチ	40
第30図	第21トレンチ	41
第31図	第21トレンチ愛島蛭石層上面	41
第32図	第21トレンチ断面	41
第33図	副郭土塁下8層遺物出土分布図	44
第34図	副郭土塁下8層灰化物出土分布図	44
第35図	副郭土塁下出土遺物①	45
第36図	副郭土塁下出土遺物②	46

第37図 副郭土墨下出土遺物③	47
第38図 A区上墳・深掘トレンチ配置図	48
第39図 A区土墳	49
第40図 A区十塙川土遺物	49
第41図 A区深掘トレンチ	49
第42図 A区深掘トレンチ断面	50
第43図 A区深掘トレンチ出土遺物	51
第44図 A区表探遺物①	52
第45図 A区表探遺物②	53

## 写真図版目次

第46図 考生館跡遠景	65
第47図 考生館跡遠景	65
第48図 主郭	65
第49図 主郭	65
第50図 主郭西側の土壘	65
第51図 主郭西側の土壘	65
第52図 主郭南側の土壘	65
第53図 主郭南側の土壘	65
第54図 主郭東南角の土壘	66
第55図 主郭の段状遺構	66
第56図 主郭の段状遺構	66
第57図 副郭	66
第58図 副郭	66
第59図 副郭の土壘	66
第60図 副郭の土壘	66
第61図 楔状遺構	66
第62図 �edge状遺構	67
第63図 楔状遺構	67
第64図 楔状遺構の土壘	67
第65図 第1堀切	67
第66図 第1堀切	67
第67図 第1堀切	67
第68図 第1堀切の西斜面	67
第69図 第2堀切	67
第70図 第2堀切	68
第71図 第2堀切の北端	68

第72図 第2堀切	68
第73図 第3堀切	68
第74図 第3堀切北部・両側の土壘	68
第75図 第3堀切	68
第76図 第4堀切	68
第77図 第4堀切	68
第78図 第1土壘	69
第79図 第2土壘	69
第80図 通路状遺構	69
第81図 溝状遺構	69
第82図 第1腰郭北部	69
第83図 第1腰郭中部	69
第84図 第1腰郭東部・角柱は三角点	69
第85図 第2腰郭西部	69
第86図 第2腰郭東部	70
第87図 第3腰郭西端	70
第88図 第3腰郭中央部	70
第89図 第3腰郭南端	70
第90図 第4腰郭	70
第91図 第5腰郭	70
第92図 第5腰郭	70
第93図 第6腰郭	70
第94図 第7腰郭	71
第95図 第8腰郭北端	71
第96図 第8腰郭中央部	71
第97図 第9腰郭	71
第98図 第10腰郭北端	71
第99図 第10腰郭東部	71
第100図 第10腰郭中部	71
第101図 第10腰郭西部	71
第102図 第10腰郭西部	72
第103図 第10腰郭西端	72
第104図 第11腰郭	72
第105図 第11腰郭	72
第106図 第12腰郭	72
第107図 第12腰郭	72
第108図 第13・14腰郭	72
第109図 第13・14腰郭	72
第110図 第15腰郭	73

第111図	第16腰郭	73
第112図	第17腰郭	73
第113図	第18腰郭	73
第114図	第19腰郭	73
第115図	第20腰郭	73
第116図	第21腰郭	73
第117図	第22腰郭	73
第118図	第1トレンチ調査前状況	74
第119図	第1トレンチ遺構確認状況	74
第120図	第2トレンチ調査前状況	74
第121図	第2トレンチ遺構確認状況	75
第122図	第2トレンチ西南壁断面	75
第123図	第3トレンチ調査前状況	75
第124図	第3トレンチ遺構確認状況	76
第125図	第4トレンチ調査前状況	76
第126図	第4トレンチ遺構確認状況	76
第127図	第5トレンチ調査前状況	77
第128図	第5トレンチ遺構確認状況	77
第129図	第5トレンチ北壁断面	77
第130図	第6トレンチ調査前状況	78
第131図	第6トレンチ調査前状況	78
第132図	第6トレンチ遺構確認状況	78
第133図	第6トレンチ遺構確認状況	79
第134図	第6トレンチ・溝状遺構確認状況	79
第135図	第7トレンチ調査前状況	79
第136図	第7トレンチ遺構確認状況	80
第137図	第7トレンチ・ピット確認状況	80
第138図	第8トレンチ調査前状況	80
第139図	第8トレンチ遺構確認状況	81
第140図	第8トレンチ・掘立柱建物跡確認状況	81
第141図	第8トレンチ・整地層確認状況	81
第142図	第8トレンチ・整地層断ち割り部分断面	82
第143図	第8トレンチ・石核SG44出土状況	82
第144図	第9トレンチ調査前状況	82
第145図	第9トレンチ・遺構確認状況	83
第146図	第9トレンチ・中世陶器SG128出土状況	83
第147図	第10トレンチ調査前状況	83
第148図	第10トレンチ確認状況	84
第149図	第11トレンチ調査前状況	84

第150図 第11トレンチ遺構確認状況	84
第151図 第11トレンチ遺構確認状況	85
第152図 第12トレンチ調査前状況	85
第153図 第12トレンチ確認状況	85
第154図 第13トレンチ調査前状況	86
第155図 第13トレンチ調査前状況	86
第156図 第13トレンチ遺構確認状況・土塁部分	86
第157図 第13トレンチ遺構確認状況	87
第158図 第13トレンチ・土塁部分断面	87
第159図 第13トレンチ・中世陶器SG120・SG121出土状況	87
第160図 第13トレンチ・中世陶器SG118出土状況	88
第161図 第13トレンチ・中世陶器SG129出土状況	88
第162図 第13トレンチ・刹片SG37出土状況	88
第163図 第14トレンチ調査前状況	89
第164図 第14トレンチ遺構確認状況	89
第165図 第15トレンチ調査前状況	89
第166図 第15トレンチ確認状況	90
第167図 第16トレンチ調査前状況・主郭西側上墨	90
第168図 第16トレンチ調査前状況・第1堀切部分	90
第169図 第16トレンチ調査前状況・第1堀切部分	91
第170図 第16トレンチ遺構確認状況・主郭部分	91
第171図 第16トレンチ遺構確認状況・第1堀切東斜面	91
第172図 第16トレンチ遺構確認状況・第1堀切底部	92
第173図 第16トレンチ遺構確認状況・第1堀切西斜面	92
第174図 第16トレンチ遺構確認状況・第1堀切西斜面の土墨	92
第175図 第16トレンチ遺構確認状況・廓郭部分	93
第176図 第16トレンチ・第1堀切底部断面	93
第177図 第16トレンチ・第1堀切西斜面と中間部断面	93
第178図 第17トレンチ調査前状況	94
第179図 第17トレンチ確認状況	94
第180図 第18トレンチ調査前状況	94
第181図 第18トレンチ確認状況	95
第182図 第19トレンチ調査前状況	95
第183図 第19トレンチ遺構確認状況	95
第184図 第20トレンチ調査前状況	96
第185図 第20トレンチ遺構確認状況	96
第186図 第21トレンチ調査前状況・第2堀切東斜面	96
第187図 第21トレンチ調査前状況・第3堀切西斜面	97
第188図 第21トレンチ遺構確認状況・廓郭土塁部分	97

第189図	第21トレンチ造構確認状況・第2堀切西斜面	97
第190図	第21トレンチ造構確認状況・第1土塁部分	98
第191図	第21トレンチ造構確認状況・第2土塁部分	98
第192図	第21トレンチ造構確認状況・第3堀切東斜面	98
第193図	第21トレンチ造構確認状況・第3堀切西斜面	99
第194図	第21トレンチ・第2堀切断面	99
第195図	第21トレンチ・第2堀切底部断面	99
第196図	第21トレンチ・第3堀切底部断面	100
第197図	第21トレンチ・副郭上塁断ち割り状況	100
第198図	第21トレンチ・副郭土塁下の砥石SG135出土状況	100
第199図	第21トレンチ・第1土塁と第2土塁の断ち割り状況	101
第200図	第21トレンチ・副郭土塁下の炭化物出土状況	101
第201図	第21トレンチ・副郭土塁下の石器出土状況	101
第202図	第21トレンチ・副郭上塁下の石器出土状況	102
第203図	第21トレンチ・副郭上塁下の石器出土状況	102
第204図	第21トレンチ・副郭土塁下のスクレイパー SG19出土状況	102
第205図	第21トレンチ・副郭土塁下のスクレイパー SG27出土状況	103
第206図	第21トレンチ・副郭土塁の断ち割り断面	103
第207図	第21トレンチ・第1土塁の断ち割り断面	103
第208図	第21トレンチ・第2土塁の断ち割り断面	104
第209図	第21トレンチ・副郭上塁下の愛島軽石層上面	104
第210図	第21トレンチ・第1土塁と第2土塁下の愛島軽石層上面	104
第211図	A区の調査前状況	105
第212図	A区・土壤	105
第213図	A区・土壤断面	105
第214図	A区深掘トレンチ・4層からの縄文上器SG91-1出土状況	106
第215図	A区深掘トレンチ・4層からの剥片SG54出土状況	106
第216図	A区深掘トレンチ・川崎スコリア層上面	106
第217図	A区深掘トレンチの最終状況	107
第218図	A区深掘トレンチ・南壁断面	107
第219図	A区深掘トレンチ・西壁断面	107
第220図	第6トレンチ・第8トレンチ・櫛状造構遺物	108
第221図	第9トレンチ・第13トレンチ遺物	109
第222図	第13トレンチ遺物	110
第223図	第21トレンチの副郭土塁下遺物	111
第224図	第21トレンチの副郭上塁下・第1土塁遺物	112
第225図	A区遺物	113
第226図	A区表探遺物	114
第227図	発掘調査風景	115

## (1) 調査に至る経過

平成5年9月、柴田郡旧富岡村（現、村田町菅生地区・川崎町支倉地区）が特定農山村法による指定を受け、これに伴って平成7年12月に菅生地区農林業等活性化推進連絡会議が発足した。その連絡会議により、菅生地区の県営中山間地域総合整備事業は場整備事業菅生地区交流施設菅生館整備工事計画が平成9年6月に策定され、菅生館跡の中央部を公園にするという事業が計画された（文献1）。これにより、農村公園の概要設計図が作成された。この画面により、宮城県大河原地方振興事務所・宮城県教育局文化財保護課・村田町教育委員会の三者間で、平成10年4月8日と平成15年7月9日に現地協議を行った。この結果、館跡の遺構を保存するように計画が変更され、実施設計図が作成された。平成16年9月2日、実施設計図に基づき3回目の現地協議を行い、農村公園内の管理用道路・遊歩道の階段部分・四阿・駐車場部分について遺構の確認調査を行うこととなった。

## (2) 調査要項

遺跡名：菅生館跡（遺跡登録番号07025）

調査場所：宮城県柴田郡村田町大字菅生字館

遺跡略号：SG

調査原因：県営中山間地域総合整備事業は場整備事業菅生地区交流施設菅生館整備工事

調査面積：445m<sup>2</sup>

調査期間：平成17年8月8日～平成17年10月21日

調査主体：村田町教育委員会

調査担当：村田町教育委員会

調査員：石黒伸一郎

## (3) 位置と歴史的環境

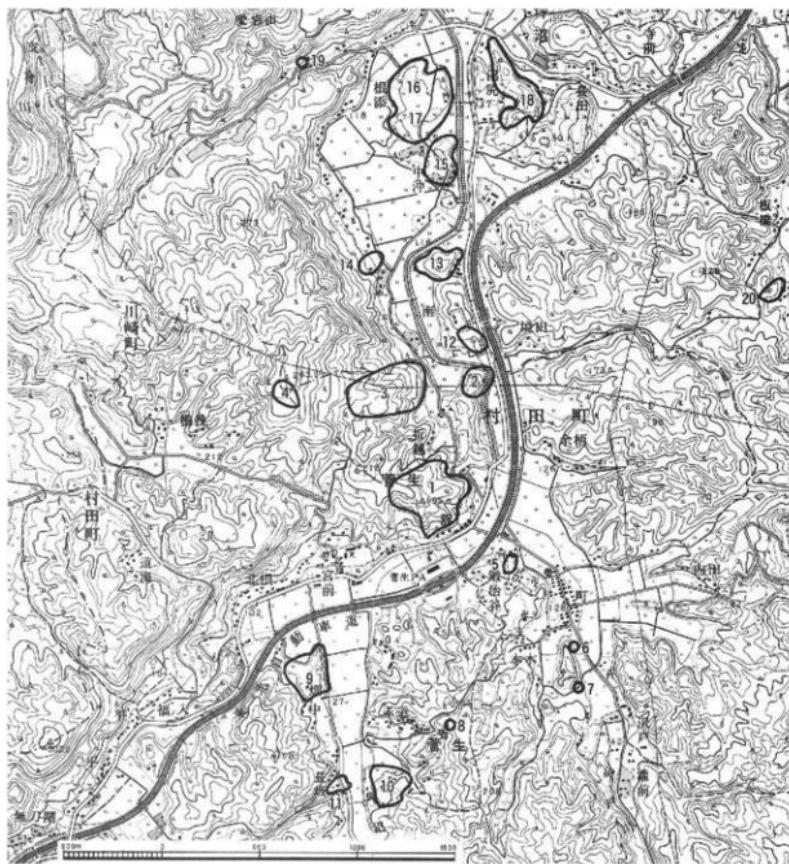
菅生館跡は、村田町の最北部、仙台市太白区との境界近くにあり、東北自動車道菅生パーキングエリアの西北西約500mに位置している。この付近は、高齢丘陵から派生した低い丘陵が連なる地形で、ちょうど仙台市・村田町・川崎町の市町界がある標高321mの低い山から、東南方向へ延びた狭い尾根上に築城されている。菅生館跡の下には坪沼川が流れおり、この川は北方へ流れ仙台市太白区坪沼字赤石において名取川に合流するので、この地城は名取川水系に属している。

菅生館跡の周辺からは旧石器の出土は確認されていない。しかし、村田町小泉付近にある旧石器時代後期の新川流域遺跡群において、石器の素材に用いられている玉髓と同様の原石が数箇所で見つかっており、川崎スコリア層などのテフラも確認されているので、将来的に旧石器時代の遺跡が発見されることも十分予想される。

縄文時代の遺跡は比較的多く、高寺下遺跡（早期）、鍛冶屋遺跡、宮前遺跡、樽火遺跡、長坂遺跡（後期～晚期）、境田遺跡、中沖遺跡、館前東遺跡（早期）がある。弥生時代の遺跡としては、高寺下遺跡、樽火遺跡の2箇所がある。古墳時代の遺跡や古墳は確認されていない。

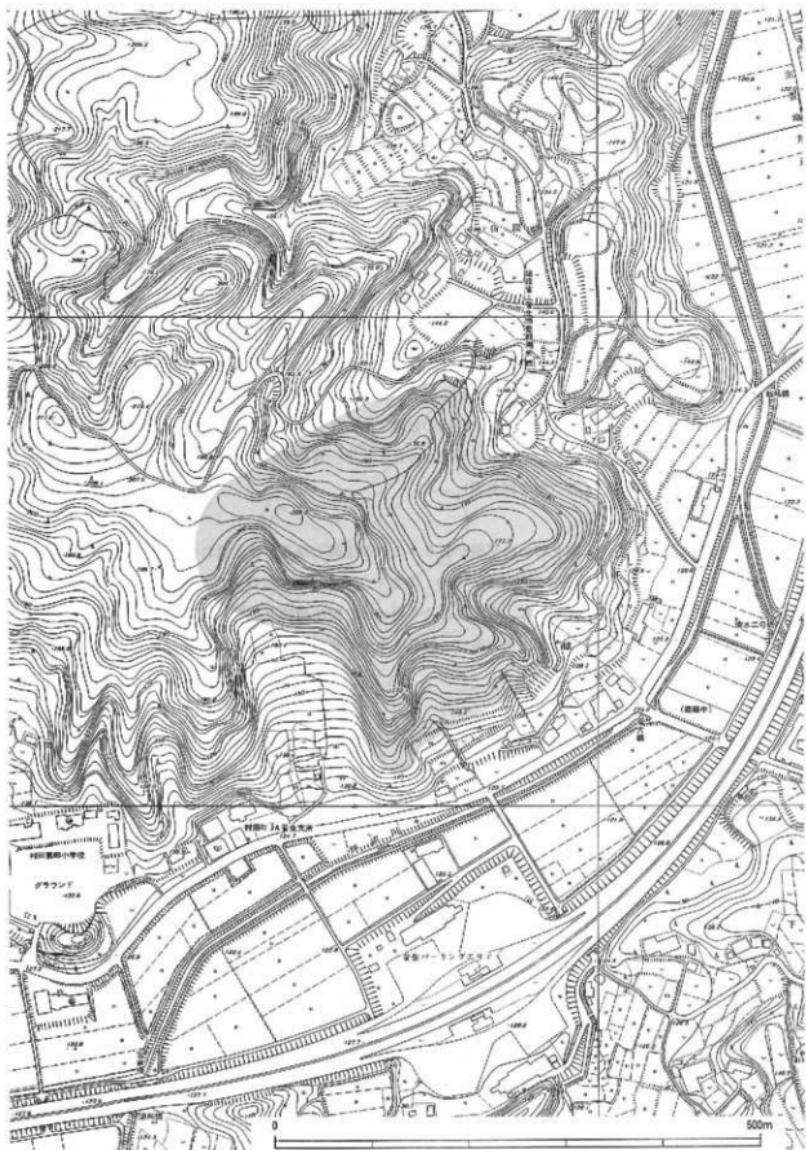
古代または平安時代の遺跡としては、高寺山遺跡、鍛冶屋遺跡、宮前遺跡、樽火遺跡、右京内遺跡、南沖東遺跡、中沖遺跡、館前東遺跡、沼尻遺跡がある。高寺山遺跡は、標高263mの高寺山の山頂付近にあり、山岳寺院の跡と思われる大きな段状の遺構が確認されており、山頂には観音堂がある（文献2）。

中世の館跡としては、巻渦館跡と根添館跡がある。巻渦館跡は、菅生館跡の東北方約650mにあるが、明確な館跡の遺構は確認できない。根添館跡は、巻渦館跡の北方約1500mに位置し、高さ約20mの丘陵上に築造された平



No.	遺跡名	種類	年代	No.	遺跡名	種類	年代
1	青牛望跡	城壁跡	中世	11	長坂道跡	散布塗	縦文後・既
2	卷雲壁跡	城壁跡	中世	12	境川道跡	散布塗	縦文
3	高今下道跡	散布塗	縦文早・弥生	13	右内道跡	散布塗	平安
4	高寺山道跡	寺院船	平安	14	南津北道跡	散布塗	平安
5	賀治行道跡	散布塗	縦文・古代	15	中沢道跡	散布塗	縦文・平安
6	藤原御坂跡	板塙	中世	16	鶴前東造跡	散布塗	縦文早・平安
7	藤原浜道路	假塙	中近世	17	板添創跡	城館塗	中世
8	大門岬塚	原	不明	18	羽尾道跡	散布塗	平安
9	宮前道跡	散布塗	縦文後・平安	19	愛宕神社登口新塙	假塙	中世
10	猪火道跡	散布塗	縦文・弥生・古代	20	上崩十三塙	原	不明

第1図 菅生館跡位置図（縮尺1/25,000）



第2図 菅生館跡周辺地形図（縮尺1/5,000）

山城である。北方に東西・南北とも80mの主郭が、その南側に副郭がある。主郭と副郭の間には、幅5m、深さ3mの大きな堀切がみられる。主郭の周囲には、数段の腰郭が巡っている。館主は不明である（文献3）。中世から近世の製鉄遺跡としては、源藏沢遺跡がある。板碑は、源藏沢板碑と愛宕神社登口板碑の二基がある。塚は、大門峠塚と上前十三塚の2箇所がある。

#### （4）菅生館跡の概要と館主

##### ①菅生館跡の概要

菅生館跡は連郭式の山城で、その大きさは東西220m、南北210mある。最も高い地点の標高は206m、館跡から東南方向の東北自動車道付近にある水田面との比高差は88mである。館跡の現状は、雜木林や杉の楓林、畑跡などとなっており保存状態は非常に良く、各遺構がはっきりと残っている。主郭の西南側から東側および東北側にかけての斜面には、22箇所の腰郭が確認された。これらの腰郭には、任意に第1腰郭から第22腰郭と名称を付した。主郭と最も下にある第14腰郭との比高差は33mである。この館跡へ登るには、以前は県道仙台村田線沿いの、旧J.A.村田町菅生支所の建物から東北方向にある民家の近くを通って登る小道があったといわれるが、現在は雜木や藪に覆われて登ることは難しい。今回の公園工事に伴って、館跡の北方を迂回し館跡西側へと登る舗装道路が造られ、簡単に登ることが出来るようになった。以下、各遺構の調査前の状況について、現地での観察と概要図をもとに説明する（第3図参照）。

##### 【主郭】（写真図版第48～56図）

館跡の中央部に、東西62m、南北27mの平場があり、これが主郭となるものと思われる。主郭中央部の標高は201mで、やや東側に斜めに走る低い段状遺構があり、大きく二つの区画に分けられる。西側の平場には、南から西側にかけて低い土塁が巡らされている。東側にある平場には、段状遺構と接続するように南側に低い土塁がある。主郭の西側は大きな堀切であるが、その他は一段低くなっている。腰郭から主郭に登る道は、確認できない。

##### 【副郭】（写真図版第57～60図）

主郭の西方、第1堀切で隔てられた位置にある。平面形は不整形な台形を呈しており、大きさは東西21m、南北23mあり、ほぼ平坦な平場となっている。西側のみに長さ22m、幅5m、高さ1.2mの土塁がある。標高は、主郭よりも若干高く206mある。

##### 【櫛状遺構】（写真図版第61～64図）

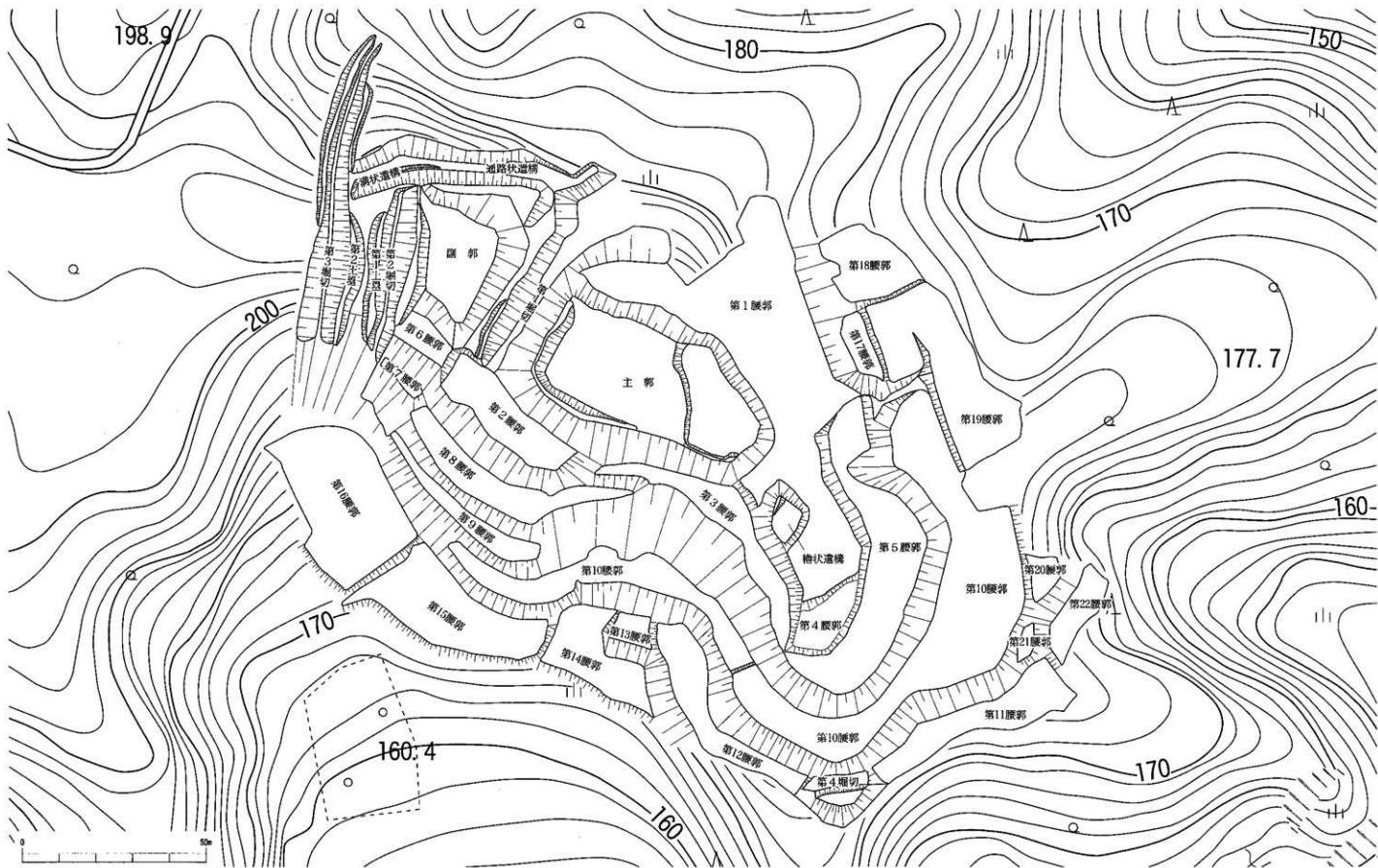
主郭の東側に、平面および立面ともに台形の遺構がある。この大きさは、底辺は東西13m、南北19m、上辺は東西8m、南北11mある。高さは2mあり、小さな平場がみられるが、この平場は南側に傾斜している。西側のみに低い土塁がある。土塁は南北6m、幅1mある。この小規模な土塁は、主郭の東南角の土塁と対置しているよう見える。

##### 【第1堀切】（写真図版第65～68図）

主郭と副郭との間には、長さ45m、幅22m、深さ3.5mの大きな堀切があり、これを第1堀切とする。この第1堀切の副郭側には中間に段があり、小規模な堀切と部分的に小さな土塁が設けられている。第1堀切の南端は、第2腰郭と接続する。北側は、自然の傾斜面に続き堀切の北端は明瞭ではない。

##### 【第2堀切・第3堀切】（写真図版第69～75図）

副郭の西側には、南北方向に二本の堀切があり東側のものを第2堀切、西側のものを第3堀切とする。第2堀切は、長さ43m、幅7.3m、深さ2.6mある。第3堀切は、長さ82m、幅9.5m、深さ3.1mあり、中央付近から北



第3図 菩生館跡概要図 (縮尺1/1,000)

方にかけては両側に低い土塁がみられる。第3堀切の西方は、尾根上の緩やかな自然斜面で、館跡に関する遺構などは確認できない。

#### 【第4堀切】(写真図版第76・77図)

館跡の東南端に、小さな尾根を分断した堀切が造られている。この堀切の規模は、東西18m、南北5mあり、第10腰郭から堀切底部までの比高差は3.4mである。底部の幅は3mで、ほぼ平坦である。東西にある腰郭との間には段がみられる。

#### 【第1土塁・第2土塁】(写真図版第78・79図)

第2堀切と第3堀切の間には、平行する二本の低い土塁があり、東側の土塁を第1土塁、西側の土塁を第2土塁とする。第1土塁は、長さ35m、幅4.6m、高さ0.4mある。北端は、第2堀切の角から6mほど南で無くなり、南端は自然の急斜面へと続いている。第2土塁は、長さ36m、幅4.2m、高さ0.5mある。北端は、第3堀切の中央付近で無くなり、南端は第1土塁と同様に自然の急斜面へと続いている。

#### 【通路状遺構】(写真図版第80図)

墜郭の北側から第3堀切にかけては、東西方向に長さ48m、幅1.2~2.8mの通路状遺構がある。西端は第3堀切と接続するが、東端は自然斜面へと続いている。北側には幅3.2~5.7mの人工的な法面があり、それは自然斜面へと続いている。

#### 【溝状遺構】(写真図版第81図)

通路状遺構の西半分に平行する溝状遺構がみられる。東西23m、幅2.5m、深さ0.4mある。南側は、幅2.8mの人工的な法面がある。

#### 【第1腰郭】(写真図版第82~84図)

主郭の北側から東南側を取り囲むような腰郭で、菅生館跡の中では第10腰郭に次いで大きく、平面形は鉤状を呈しており、東西75m、南北108m、最大幅は41mある。主郭の北側から東側にかけては、東北方へやや傾斜しているが、東側はほぼ平坦である。槍状遺構の中心部から東南方9mに、館山三等三角点(X=-202966.230・Y=-6020.685)が設置されている。

#### 【第2腰郭】(写真図版第85・86図)

主郭の西南側に位置している。平面形は長方形で、東西37m、南北18m、最大幅は12mある。西北側はやや傾斜しているが、中央部から東南にかけてはほぼ平坦である。東端には安山岩の大きな角礫が並んでおり、その角礫の中には矢穴の痕跡が認められるものが数個ある。現在は杉が植えられているが、以前は焼であったといわれており、この角礫は耕作の邪魔になるので、動かすために矢穴を開けて割り、現在の場所に寄せ集められたものと思われる。

#### 【第3腰郭】(写真図版第87~89図)

主郭と槍状遺構の南側に位置している。平面形は弧状を呈しており、東西49m、南北50m、最大幅は11mある。東南方へやや傾斜しているが、全体的にはほぼ平坦である。安山岩の大きな角礫が数個ある。

#### 【第4腰郭】(写真図版第90図)

第1腰郭の南端、一段低いところに位置している。平面形は台形を呈しており、東西18m、南北13m、最大幅は11mある。南方へやや傾斜している。

#### 【第5腰郭】(写真図版第91・92図)

第1腰郭と第4腰郭の東に位置している。平面形はS字状を呈しており、東西37m、南北81m、最大幅は15mある。中央部がやや高く、北部は東北方へ南部は東南方へやや傾斜している。

#### 【第6腰郭】(写真図版第93図)

腰郭南側の斜面下に位置する小さい腰郭である。平面形は長方形で、東西16m、南北10m、最大幅は8mある。杉が植林されており、第2堀切から第2腰郭へ向かう山道が通っている。

#### 【第7腰郭】(写真図版第94図)

第6腰郭の南側、斜面下に位置している小さい腰郭である。平面形は長方形で、東西12m、南北10m、最大幅は4mある。南方へやや傾斜している。

#### 【第8腰郭】(写真図版第95・96図)

第2腰郭の南側、斜面下に位置している。平面形は弧状を呈しており、東西60m、南北30m。最大幅は10mあるが、東部は幅が4~5mと狭くなる。東南方へやや傾斜しているが、ほぼ平坦である。

#### 【第9腰郭】(写真図版第97図)

第8腰郭の南側、斜面下に位置している。平面形は細長い弧状を呈しており、東西38m、南北34m、最大幅は東部にあり7mを割るが、西端へ行くにしたがって次第に狭くなる。東南方へやや傾斜しているが、全体的に見るとほぼ平坦である。

#### 【第10腰郭】(写真図版第98~103図)

菅生船跡の中でも最大的腰郭である。第3腰郭・第5腰郭・第9腰郭の一級下に位置しており、上にある腰郭との間は急斜面となっている。平面形は不正なS字状を呈しており、東西156m、南北101mある。最大幅は、東部にあり23mを測る。中央部の幅は12m、西部の幅は7mである。東部は東方へ、中央部と西部は南方へ、それぞれやや傾斜しているが、全体的に見るとほぼ平坦である。中央部から西側に小さな段が一箇所認められるが、これは後世のものと思われる。

#### 【第11腰郭】(写真図版第104・105図)

第10腰郭東部の一級下に位置している。平面形は細長い長方形で、東西54m、南北32m、最大幅は15mある。東南方へやや傾斜している。東部は小さい尾根へと続いている。

#### 【第12腰郭】(写真図版第106・107図)

第10腰郭中部の西南側、急斜面下に位置している。平面形は弧状を呈しており、東西37m、南北46m、最大幅は11mある。全体的にほぼ平坦である。中ほどに低い段が見られるが、これは後世のものと思われる。

#### 【第13腰郭】(写真図版第108・109図)

第12腰郭の西側、一段下に位置している。非常に小さい腰郭で、平面形は長方形を呈しており、東西11m、南北8mある。

#### 【第14腰郭】(写真図版第108・109図)

第10腰郭西部および第13腰郭の南側、斜面下に位置している。平面形はL字形を呈しており、東西30m、南北29m、最大幅は22mある。南方へやや傾斜している。

#### 【第15腰郭】(写真図版第110図)

第10腰郭西端の南側、斜面下に位置している。平面形は不正形で、東西55m、南北30m、最大幅は19mある。西南方へ傾斜している。

#### 【第16腰郭】(写真図版第111図)

第9腰郭の西南側、急斜面下に位置している。平面形は、隅丸の長方形を呈しており、東西41m、南北43m、最大幅は28mある。南方へやや傾斜している。この腰郭の西南側にも、東西25m、南北28mの、三角形を呈する平場が認められるが、腰郭かどうかは不明である。

#### 【第17腰郭】(写真図版第112図)

第1腰郭中央部の東側、急斜面下に位置している。平面形は長方形に近く、東西10m、南北18m、最大幅は7mある。東方へやや傾斜している。

#### 【第18腰郭】(写真図版第113図)

第1腰郭中央部の東側、急斜面下に位置している。平面形は正方形に近く、東西27m、南北21m、最大幅は21mある。東方へやや傾斜している。

#### 【第19腰郭】(写真図版第114図)

第17腰郭および第10腰郭北端の斜面下に位置している。平面形は長方形に近いが、中ほどに段がある。東西42m、南北51m、最大幅は23mある。東方へやや傾斜している。この腰郭の東側に、東西20m、南北23mの平場が認められるが、腰郭かどうかは不明である。

#### 【第20腰郭】(写真図版第115図)

第20腰郭東部の斜面下に位置している。小さな腰郭で、平面形は台形を呈しており、東西8m、南北12m、最大幅は7mある。

#### 【第21腰郭】(写真図版第116図)

第20腰郭東部の斜面下に位置している。非常に小さな腰郭で、平面形は菱形を呈しており、東西4m、南北11mある。

#### 【第22腰郭】(写真図版第117図)

第20腰郭および第21腰郭の東側、急斜面下に位置している。平面形は菱形を呈しており、東西14m、南北27m、最大幅は8mある。この腰郭の東方へ、急な沢となっており地滑りが発生している。

## ②菅生館の館主

菅生館跡についての最も古い記録は、延宝年間(1673～1681)の『仙台領古城書上』である(文献4)。これには、「山 菅生城 同 四十間 三十間 城主菅生助八郎」と記されている。同様の記述は、「仙台領古城書立之覚」にもみられ、「山 菅生城 東西四十間 南北三十間 右城主菅生助八郎中者御座候此子孫家中ニ有之候ノ名駄ト相知不申菅生古城ト中伝候」とある(文献5)。また、安永6年(1777)の『柴田郡菅生村風上記御用書出』には、「古内館 竪九拾間 横七拾間 右御城主菅生助八郎様之山御座候得共何歳之頃御住居候或申伝ニ茂年月相知不申候」と記されている(文献6)。これらによると、菅生館の館主は菅生助八郎である。『仙台領古城書立之覚』には「菅生助八」と記されているが、これは書き間違いと思われる。菅生館のことを、「仙台領古城書上」と「仙台領古城書立之覚」はともに「菅生城」としているが、『柴田郡菅生村風土記御用書出』は「古内館」と書かれており、前の大きさにも違いがみられる。

菅生氏は平士で、「伊達世臣家譜」によると、下野国国主小山下野守高朝の後裔といい、小山氏が滅亡した後、柴田郡菅生村に移り住んで菅生を称したという(文献7)。菅生家の祖は伯耆で、伯耆の子の与作は相馬氏との戦いの際に宇多郡坂本で戦死した。その子の助八郎は、天正18年(1590)の宮崎の役で軍功をあげた。文禄4年(1595)に伊達政宗から菅生村に100石を給された。その後、栗原郡刈敷村(現在の栗原市志波姫刈敷)に改められた。助八郎の子の助六郎の跡は、常陸国筑波郡鹿島社の神主中島氏の子が継いで定朝と称し300石の禄となった(文献8)。菅生氏にかかる古文書は非常に少ないが、天文12年(1543)の大崎義宣起請文には「菅生ひこ三郎」(文献9)、元和9年(1623)の伊達政宗山道人數書には「菅生助八郎」の名が見えている(文献10)。

『柴田郡誌』には、菅生氏は維新前まで菅生村の領主であるとともに菅生館の館主で、菅生助八郎は安倍宗任の

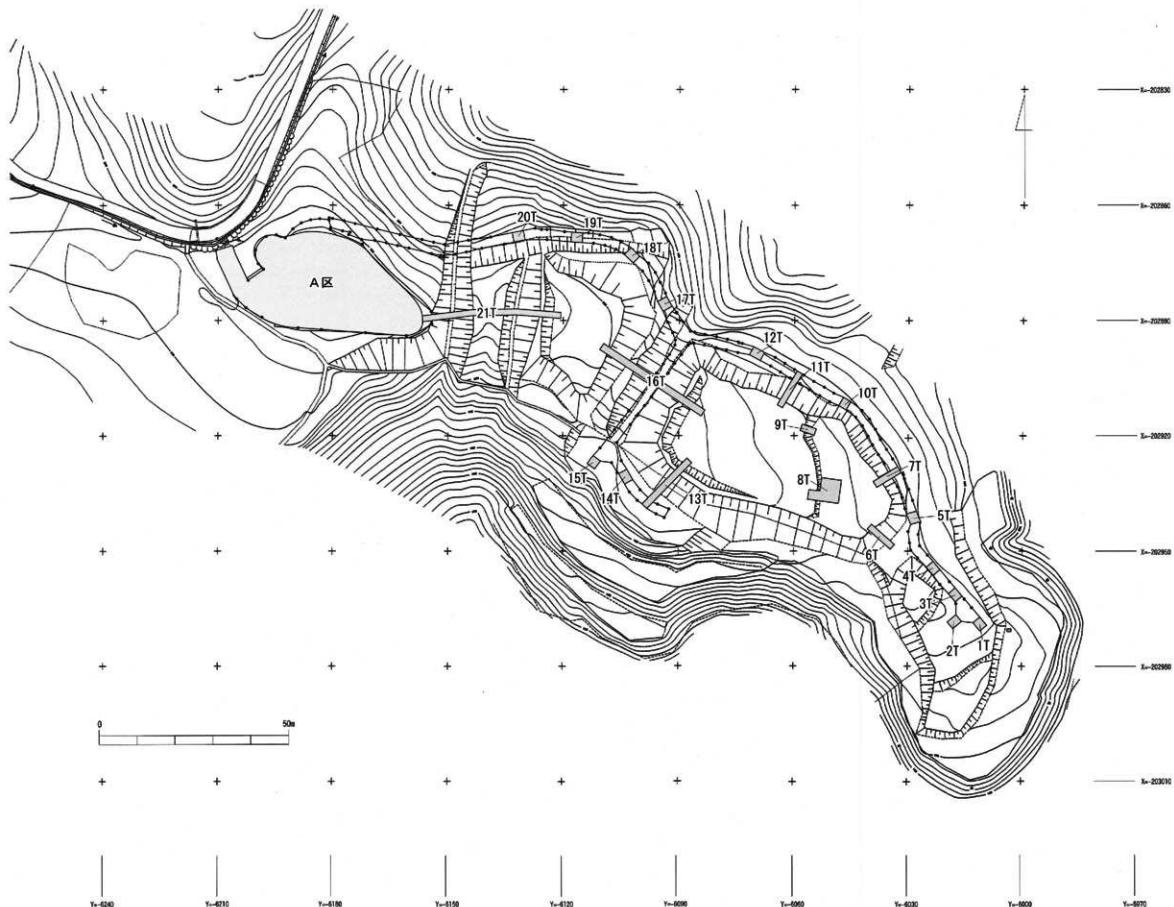
部下であったが八幡太郎に殺されたという言い伝えが載せられている（文献2）。安倍宗任は、平安時代中頃の奥州在地の武将であるが、この言い伝えが何の資料に拠るのかは示されていないので不明である。このことは、『村田町史』にも引き継がれ、菅生館跡を平安時代頃のものとしている（文献11）。菅生館跡を最初に詳しく調査したのは紫桃正隆氏と思われ、本丸・二の丸・東曲輪などが描かれた略図を公表された（文献3）。紫桃氏のいう本丸は、本報告書の主郭、二の丸は第1腰郭から格状造構にかけて、東曲輪は第10腰郭付近を指している。しかし、副郭や館跡西端にある第2・3堀切などについては、踏査されなかったのか略図には入っていない。

## （5）調査の方法

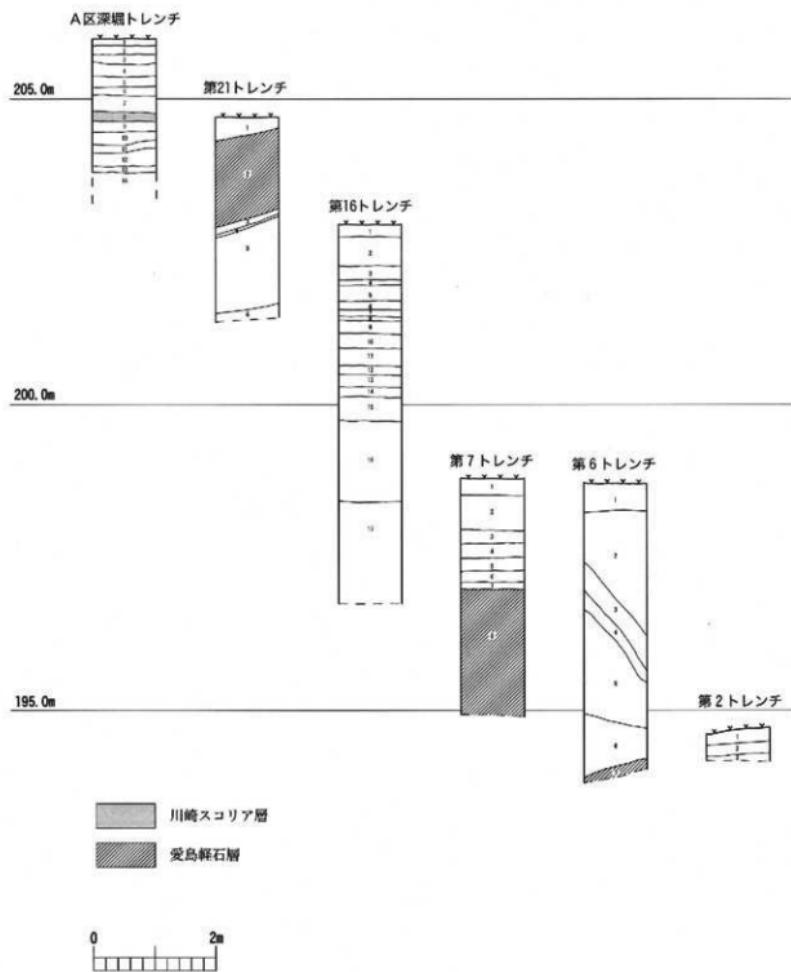
今回の調査目的は、館跡の中央部を公園として整備するために工事が行われる、遊歩道の階段部分・管理用道路・四阿・駐車場について、遺構の有無を確認することである。調査区名は、駐車場部分の範囲が広いのでA区とし、そのほかは東から西へ第1トレンチから第21トレンチとした。遊歩道の階段部分・作業用道路・四阿は、人力で表土を剥いで遺構の確認を行った。A区のみは、重機を用いて表土を剥いで遺構確認を行った。基本的に各調査区では、表土を剥ぎ造構が確認された時点で、記録を取って埋め戻した。しかし、調査区内に堀切があった場合には、堆積土をすべて除去し底面まで検出した。土壌の中で、副郭西側の土壌、第1土壌、第2土壌については、断ち割りを行い積み土の状況などを観察した。遊歩道の階段は、堀切や土壌、郭の斜面に設置され、全部で13箇所ある。階段の上下に郭があるので、郭の方へ任意に調査区を延長し、管理用道路と接する階段については管理用道路の端まで延ばした。四つの階段が接続して作られるところは一つの調査区としたので、調査区は全部で7箇所となった。調査区名は、第6・7・9・11・13・16・21トレンチとした。第16トレンチおよび第21トレンチは、四つの階段が作られるところなので、長細い調査区になった。第21トレンチからは、副郭西側にある土壌下から石器類が出土したので、記録を取った後に遺物を取り上げた。その出土層の下層にも、石器類が含まれているかどうかを確認するために、愛鳥軽石層の上面まで掘り下げた。また、石器類が出土した地層はテフラと思われたので、自然科学分析用に土壤と炭化物を試料として採取した。管理用道路は、全長が303mあるので、任意に13箇所の調査区を設定した。これらの調査区名は、第1・2・3・4・5・10・12・14・15・17・18・19・20トレンチとした。調査区の大きさは、2.5m四方を基本としたが、部分的に拡張したところもある。四阿は、主郭中央部のやや東側を斜めに走る段状造構の隣に建てられるため、段状造構の上にも一部を拡張しL字形の調査区で第8トレンチとした。調査により、段状造構は整地層があったので、一部を断ち割って断面の観察を行った。駐車場部分のA区では、西端で土壌が1基確認されたが、ここは公園の駐車場へ出入りする場所に当たり、削平される範囲に入っていたため、通常の調査を行った。また、A区の南端に深掘トレンチを1箇所設定し、地山の構序を観察した。主郭を取り巻くように配置されている腰郭の中で、工事が行われない腰郭については公園工事が行われる腰郭は第1腰郭・第2腰郭・第4腰郭・第5腰郭の4箇所であるが、館跡の全容を知る必要があると思われたので、工事が行われない腰郭については土地所有者の許可を得て雑木や藪などの刈り払いを行い、300分の1で平面図を作成するとともに写真撮影を行った。測量原点は、A区の北側に設定されていたA10杭（X=-202859.253・Y=-6186.494）を使用した。各調査区の平面図および断面図は20分の1で作成した。写真は、35mmカラーリバーサルフィルム、35mmモノクロフィルムおよびデジタルカメラで随時撮影した。

## （6）菅生館跡の地層

菅生館跡では、すべての調査区に対して共通する層位は認められなかった。多くの調査区では、表土を剥いだ段階で遺構が確認されたが、第1トレンチと第2トレンチでは3層上面、第14トレンチでは2層上面で遺構が確



第4図 調査区配置図 (縮尺1/1,000)



第5図 層序模式図 (縮尺1/80)

第2トレント

層位	土 色	上 質	備 考
1	7.SYR3/4 暗褐色	シルト	粘土
2	7.SYR5/6 明褐色	シルト	炭化物を少量含む
3	SYR2/4 暗褐色	シルト	赤褐色・明褐色をブロック状に含む 遺構物(川面)

第5トレント

層位	土 色	土 質	備 考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	赤土
2	7.SYR5/6 明褐色	シルト	
3	10YR3/3 淡褐色	粘土質シルト	
4	10YR7/3 にぶい黄褐色	粘土	
5	2.SYR4/6 暗褐色	砂	風化した安山岩
6	2.SYR4/6 赤褐色	礫	上層よりも少し灰色が強い。風化した安山岩
7	10YR6/5 明褐色	鈍石	安山岩鈍石 (Ac-Md)

第6トレント

層位	土 色	土 質	備 考
1	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	赤土
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	暗褐色のブロックを多量に含む 風化層
3	10YR2/1 黑色	シルト	粘土質
4	7.SYR4/6 黄色	シルト	
5	7.SYR5/6 明褐色	シルト	
6	7.SYR6/6 緑色	シルト	
7	7.SYR6/6 緑色	シルト	輕石層を含む 川崎スコリア層を板状に含む
8	10YR7/5 黄褐色	鈍石	安山岩鈍石 (Ac-Md)

第8トレント(第1刷用紙裏面)

層位	土 色	土 質	備 考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	赤土
2	7.SYR4/4 黄色	シルト	
3	7.SYR4/6 緑色	シルト	
4	7.SYR5/6 緑色	シルト	マンガン鉱を多量に含む 全体的に白っぽい。砂礫を多く含む
5	7.SYR5/8 明褐色	粘土	
6	7.SYR6/4 淡褐色	シルト	砂礫を多く含む マンガン鉱を多く含む 全体的に白っぽい。4脚と頭部
7	7.SYR6/6 明褐色	粘土	
8	7.SYR6/6 布褐色	シルト	マンガン鉱を多く含む
9	7.SYR4/4 緑色	粘土	マンガン鉱を多く含む 砂礫を含む
10	7.SYR4/3 緑色	粘土	マンガン鉱を多く含む 砂礫を含む
11	7.SYR4/1 黄色	粘土	マンガン鉱を少量含む 黄褐色のブロックを少し含む 砂礫を含む
12	7.SYR4/6 黄色	粘土	マンガン鉱を少量含む 砂礫を含む
13	7.SYR5/3 淡褐色	粘土	マンガン鉱を結構に多量に含む
14	7.SYR5/6 明褐色	粘土	
15	2.SYR5/6 明褐色	シルト	白色の風化した岩片を多量に含む
16	10YR3/4 暗褐色	シルト	岩が風化した時 岩片の風化した岩片をブロック状に含む
17	10YR4/5 不色	シルト	7.SYR6/6明褐色シルトの互層 すじ状に悪い粒子の層を多く含む

第21トレント(第3刷用紙裏面)

層位	土 色	上 質	備 考
1	7.SYR3/4 暗褐色	シルト	赤土
2	7.SYR7/6 暗褐色	鈍石	黒褐色の塊を多く含む 川崎湖底堆積物を多く含む 安山岩鈍石 (Ac-Md)
3	7.SYR7/8 黄褐色	粗砂	上層よりも灰褐色
4	10YR7/1 黑白色	粗砂	
5	7.SYR5/6 明褐色	粘土	暗褐色のマンガンの砂礫を多く含む
6	7.SYR4/6 黄色	砂質シルト	

A区深掘りシレンジ

層位	土 色	土 質	備 考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	赤土
2	10YR3/3 増褐色	シルト	粘土土をブロック状に含む
3	7.SYR4/4 黄色	シルト	暗褐色土をブロック状に含む 調土葉片・洞片・碎片を含む
4	10YR4/6 緑色	粘土質シルト	粘土質シルト 調土葉片・洞片・碎片を含む
5	10YR4/5 緑色	粘土質シルト	上層よりやや黄色
6	10YR4/6 緑色	シルト	
7	10YR5/1 にぶい黄褐色	粘土質シルト	0.5cmの角閃石を少量含む 0.5cm~2.0cmのスコリアの塊を少量含む
8	SYR5/6 明褐色	スコリア	川崎スコリア層 (Ac-Kw)
9	10YR5/6 にぶい黄褐色	粘土	0.5cmの角閃石を少量含む 0.5cm~2.0cmのスコリアの塊を少量含む
10	10YR6/6 明褐色	粘土	0.5cm~1.5cmの青灰色角閃石を少量含む 0.1cm~0.3cmのマンガン鉱を少量含む
11	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	0.2cm~1.5cmの青灰色角閃石を少量に含む 0.1cmのマンガン鉱を多量に含む
12	10YR6/6 明褐色	粘土質シルト	0.3cm~1.5cmの青灰色角閃石を多量に含む 0.05cm以上のマンガン鉱を多量に含む
13	10YR7/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	0.1cm~0.5cmの青灰色角閃石を多量に含む
14	10YR7/4 にぶい黄褐色	砂質	0.2cm~0.5cmの青灰色角閃石を多量に含む

第1表 層序模式図土層記表

認された。第3図は、昔生館跡の層序模式図である。第6・7・16・21トレンチについては、遺構の壁面で観察した地山の地層と、A区深削トレンチの地層について説明する。第6トレンチは、主郭の東側斜面で観察した。2層から4層はテフラと思われる。5層と6層は、安山岩が風化した硬い層である。3層から6層にかけては北側に傾斜している。7層は愛島軽石層（A c-M d）で、層厚は20cm以上あり、上部の層とは逆に北側へ上がっている。第7トレンチは、主郭の東北側斜面で観察した。各層は水平な堆積層である。2層は整地層、3層は旧表土層で、4層から7層はテフラと思われる。8層は愛島軽石層で、層厚は198cm以上ある。第16トレンチは、第1堀切の東側斜面で観察した。各層は水平な堆積層である。2層から8層はテフラと思われる。16層と17層は、岩石が風化したような層で非常に硬い。ここでは愛島軽石層は確認できなかった。第21トレンチは、第3堀切の東側斜面で観察した。2層以下は北側にやや傾斜している。2層は愛島軽石層で、層厚は136cmである。第2堀切においても、厚い愛島軽石層が認められた。A区深掘トレンチの西壁断面は、各層がほぼ水平な堆積層で、ほとんどがテフラと思われる。3層と4層には、繩文土器や石器などが僅かに含まれていた。8層は川崎スコリア層（Z a-K w）で、層厚は13cmある。10層以下は、非常に締まりが強く、最下層の14層は砂礫層となる。

## （7）調査結果

### ①第1トレンチ（図版第6図：写真図版第118・119図）

樁状遺構の東側にある第1腰郭の平場に、3.0m×2.5mの調査区を設定した。地表面から約35cm掘り下げた、3層上面で遺構が確認された。3層は10YR5/8黄褐色シルトである。遺構はピットが7箇所で、直径は15～50cm、円形や梢円形を呈しており、一部重複しているものもあったが、柱痕が認められるものは無かった。遺物の出土は無かった。

### ②第2トレンチ（図版第7図：写真図版第120～122図）

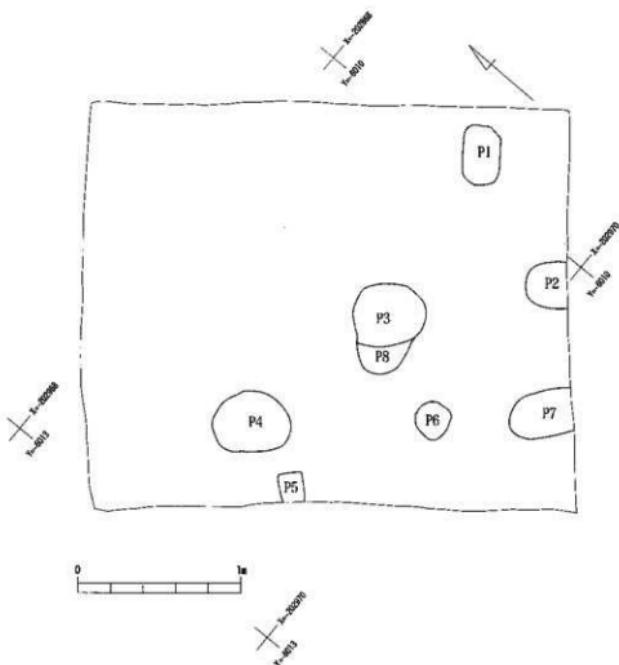
第1腰郭に設置されている三角点のすぐ傍の平場に、3.0m×2.5mの調査区を設定した。地表面から約40cm掘り下げた。3層上面から遺構が確認された。3層は5YR2/4極暗赤褐色シルトで、赤褐色と明黄褐色シルトをブロック状に含む層である。遺構はトレンチの全面で確認され、重複しているもの多かった。溝状遺構2箇所、土壤2箇所、ピット12箇所を確認した。溝状遺構1は、調査区のほぼ中央で確認され、長さ170cm、幅10～30cmあり、ピット3を切っている。溝状遺構2は、調査区の北端で確認され、長さ30cm以上、幅25cmあり、ピット2およびピット3に切られている。1号土壤は、梢円形を呈しており、長径95cm、短径42cm以上ある。2号土壤は梢円形を呈しているものと思われ、長径85cm、短径56cm以上ある。ピットは、直径25～60cmで、円形や梢円形を呈していたが、柱痕が認められるものは無かった。遺物の出土は無かった。

### ③第3トレンチ（図版第8図：写真図版第123・124図）

樁状遺構の東北にある第1腰郭の平場に、3.0m×2.5mの調査区を設定した。地表面から約40cm掘り下げた2層上面で遺構が確認された。2層は7.5YR5/8明褐色シルトである。中央より東南側に傾斜していたが、これが人工のかな自然の傾斜なのかははっきりしなかった。南北方向の溝状遺構が1箇所確認された。長さは140cm以上、幅は30cmあった。遺物の出土は無かった。

### ④第4トレンチ（図版第9図：写真図版第125・126図）

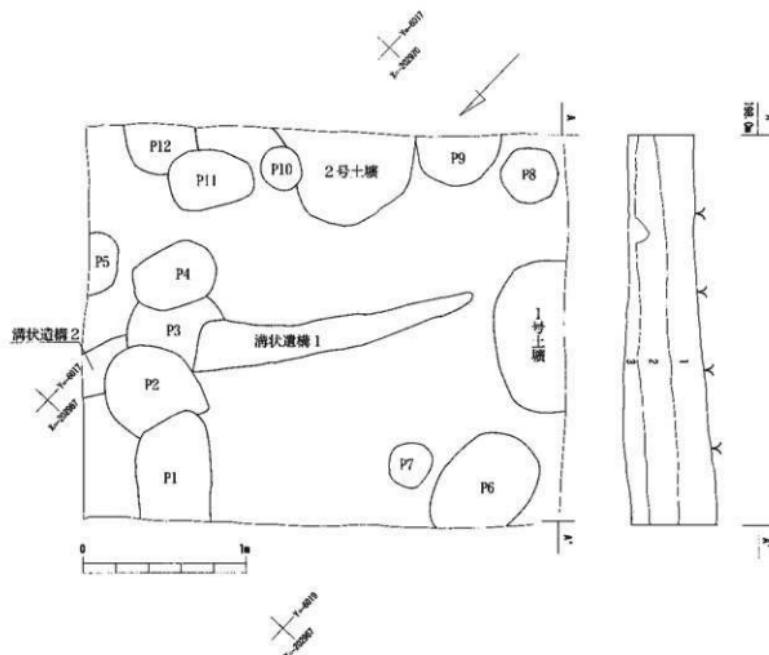
樁状遺構の北にある第1腰郭の平場に、2.5m×2.5mの調査区を設定した。地表面から約45cm掘り下げた面



第1トレンチ地質記表

選択名	土色	土質	備考
P1	10YR2/4 褐色	シルト	
P2	7.5YR3/4 黄褐色	シルト	褐色土を少量含む
P3	7.5YR3/4 黄褐色	シルト	黄褐色土を少量含む
P4	7.5YR3/4 黄褐色	シルト	明黄色土を含む
P5	7.5YR3/4 黄褐色	シルト	
P6	7.5YR3/4 黄褐色	シルト	黄褐色土を少量含む
P7	5YR3/4 明赤褐色	シルト	褐色土と炭化物を少量含む
P8	5YR3/3 増赤褐色	シルト	褐色土と炭化物を少量含む

第6図 第1トレンチ (縮尺1/30)



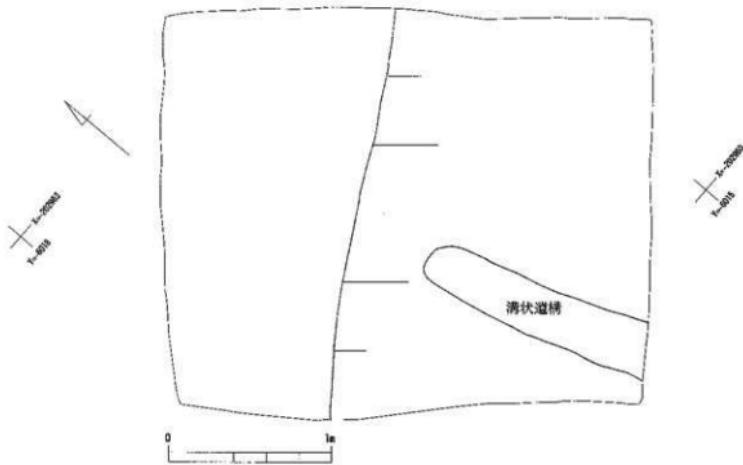
第2トレンチ土層柱記表

層位	上色	土質	備考
1層	7.SYR3/4 暗褐色	シルト	赤土
2層	SYR3/4 哈赤褐色	シルト	炭化物を少量含む
3層	SYR2/4 暗暗赤褐色	シルト	赤褐色・明黄褐色土をブロック状に含む

第2トレンチ遺構柱記表

遺構名	土色	土質	備考
1号土壁	7.SYR4/4 浅色	シルト	明黄褐色土・炭化物を少量含む・赤褐色土を含む
2号土壁	7.SYR3/4 暗褐色	シルト	明黄褐色土・炭化物を少量含む
溝状遺構1	7.SYR3/4 暗褐色	シルト	明黄褐色土・炭化物を少量含む
溝状遺構2	7.SYR3/4 暗褐色	シルト	明黄褐色土・炭化物を少量含む
P1	10YR3/3 黒褐色	シルト	炭化物・暗褐色土を多量に含む
P2	10YR3/4 暗褐色	シルト	明黄褐色土と炭化物を多量に含む
P3	7.SYR4/4 深色	シルト	明黄褐色土を含む
P4	7.SYR3/4 暗褐色	シルト	明黄褐色土を少量含む
P5	7.SYR2/4 深色	シルト	明黄褐色土と炭化物を少量含む
P6	7.SYR4/4 深色	砂質シルト	明黄褐色土
P7	7.SYR3/3 暗褐色	シルト	炭化物・明黄褐色土を少量含む
P8	7.SYR3/3 暗褐色	シルト	炭化物・明黄褐色土を少量含む
P9	7.SYR4/4 深色	シルト	炭化物・明黄褐色土を少量含む
P10	10YR2/4 暗褐色	シルト	炭化物・明黄褐色土を少量含む
P11	7.SYR3/4 暗褐色	砂質シルト	明黄褐色土を少量含む
P12	SYR3/4 哈赤褐色	砂質シルト	

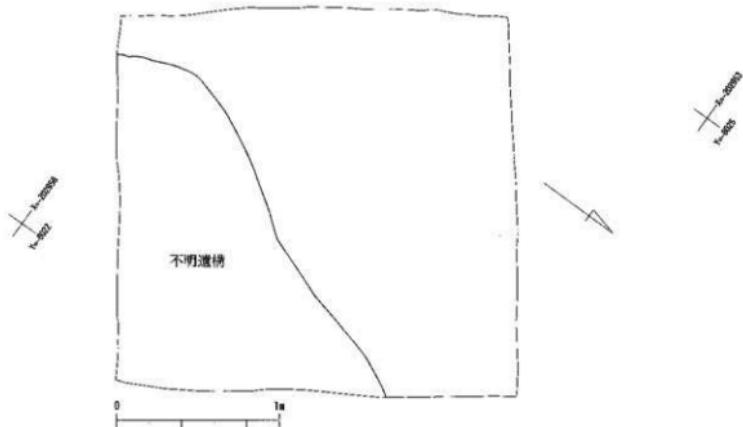
第7図 第2トレンチ (縮尺1/30)



第3トレンチ遺構剖面図

遺構名	土色	土質	備考
溝状遺構	10YR2/3 黒褐色	シルト	10Y3/4褐色色土をまだら状に含む

第8図 第3トレンチ (縮尺1/30)



第4トレンチ遺構剖面図

遺構名	土色	土質	備考
不明遺構	7.5YR2/4 褐褐色	シルト	灰化物・青褐色土・砂を含む

第9図 第4トレンチ (縮尺1/30)

で、不明遺構が1箇所確認された。遺構確認面は、7.5YR5/8明褐色シルトである。不明遺構は、幅140cm以上あり、溝状遺構の一部なのか自然の落ち込みなのか判別できなかった。

#### ⑤第5トレーナー（図版第10図：写真図版第127～129図）

主郭東端の斜面の下に位置する第1腰郭の平場に、2.8m×2.3mの調査区を設定した。地表面から約55cm掘り下げた2層上面で、溝状遺構とピット3箇所を確認した。2層は7.5YR5/8明褐色シルトである。溝状遺構は、調査区のほぼ全面で確認され、南北方向であるがやや湾曲しており、幅は3.1m以上ある。ピットは、すべて溝状遺構の堆積土に掘り込まれており、直径は20～90cm、円形か梢円形を呈しており、柱痕の認められるものは無かつた。ピット3は、やや大きいので土壤かもしれない。

#### ⑥第6トレーナー（図版第11～13図：写真図版第130～134図）

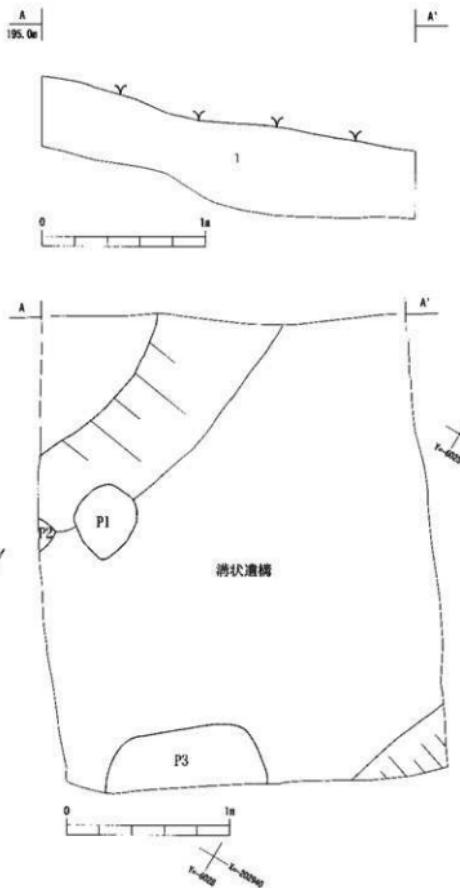
主郭の東南斜面に、8.8m×1.7mの調査区を設定した。地表面から20cm～50cm掘り下げた面で、遺構を確認した。堆積土は4層である。主郭の平場部分、斜面の近くから2箇所のピットを、斜面下の第1腰郭の平場からは3条の溝状遺構を確認した。ピットは、直径は20～35cm、円形か梢円形である。溝状遺構1は、西北から東南方に向で、幅は20cm以上あり、溝状遺構2は、東北から西南方向で、幅は50cm～65cmである。溝状遺構3は、南北方向で幅は25cm以上である。主郭および第1腰郭との間の斜面は、地山を削り出した人工的なものと思われ、その角度は約45度である。遺物は、斜面下方の2層から右白の上臼片1点が出土した（図版第13図1：写真図版第220図1）。また、調査区東側の楕状遺構の基部から、石鉢の口縁部片1点を表探した（図版第13図2：写真図版第220図2）。

#### ⑦第7トレーナー（図版第14・15図：写真図版第135～137図）

主郭の東北斜面に、8.3m×1.7mの調査区を設定した。主郭の平場部分は、地表面から約30cm掘り下げた整地面で、その他は15cm～40cm掘り下げた地山面で遺構を確認した。堆積土は3層である。主郭の平場部分は整地層で、斜面からの観察では層厚は54cmあり、整地層の下には薄い黒褐色の旧表土が認められた。平場の斜面近くからは、整地層に掘り込まれた5箇所のピットを確認した。ピットは、直径23～35cmの円形で、柱痕の認められるものは無かつた。主郭および第1腰郭との間の斜面は、地山を削り出した人工的なものと思われ、その角度は約45度である。遺物の出土は無かつた。

#### ⑧第8トレーナー（図版第16～18図：写真図版第138～143図）

主郭中央部よりやや東側にある段状遺構のすぐ下に、5.5m×6.0mの調査区を設定し、さらに段状遺構の上へ2.2m×3.5m拡張した。地表面から30cm掘り下げた面で遺構を確認した。遺構確認面は、10YR4/6褐色粘土質シルトである。遺構は、掘立柱建物跡1棟、溝状遺構3条、ピット3箇所が確認された。この遺構確認面は、ほぼ平坦に整地されているようである。堆積土は2層である。掘立柱建物跡は、トレーナーの中央から北側にかけて、南北方向の段状遺構と平行するように確認された。これは、桁行1間(1.7m)、梁行2間以上(3.3m)あり、その掘り方の直径は40～60cmの梢円形を呈しており、柱痕跡は見られなかった。溝状遺構は、すべて段状遺構の斜面下から確認された。溝状遺構1は、長さ2.8m、幅0.2mある。溝状遺構2は途中で切れているが、長さ5.9m以上、幅20～45cmあり、掘立柱建物跡に切られている。溝状遺構3は、長さ45cm、幅20cmある。ピットは、掘立柱建物跡の東側で確認され、直径30～40cmの円形を呈している。段状遺構の高さは90cmで、斜面の角度は約25度、



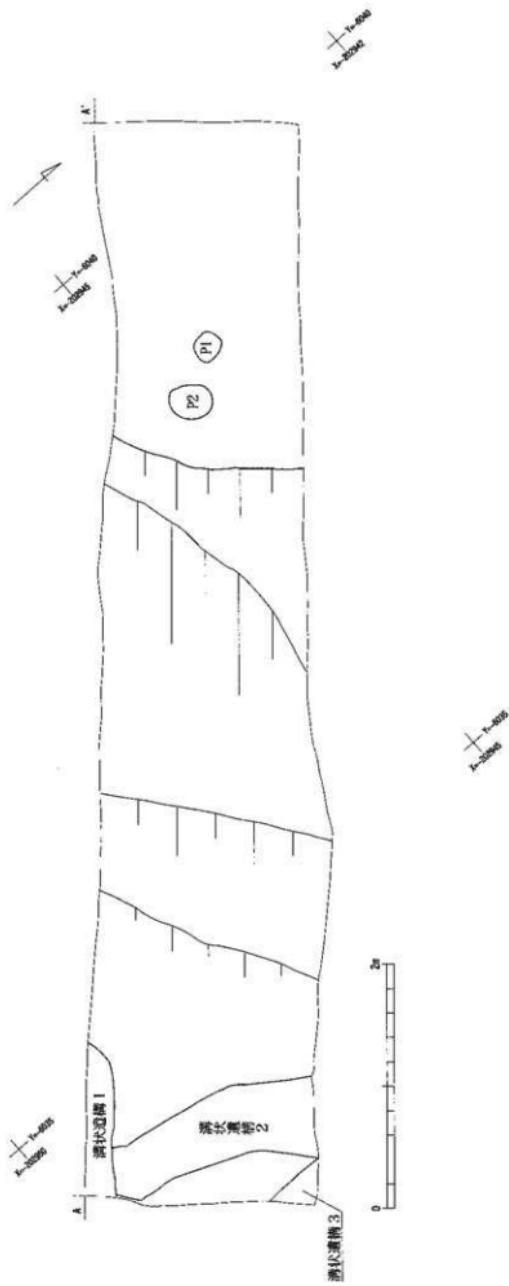
第5トレンチ十箇目記表

層位	上色	土質	備考
1層	10YR3/4 緑褐色	シルト	黄褐色土・炭化物を少量含む

第5トレンチ遺構記表

遺構名	土色	七質	備考
渦状堆积	10Y4/2 灰褐色	シルト	炭化物・黄褐色土・小繊を含む
P1	10YR3/4 緑褐色	砂質シルト	黄褐色土をブロック状に含む
P2	10YR3/4 緑褐色	シルト	黄褐色土をブロック状に含む
P3	10YR3/4 緑褐色	シルト	10YR3/4 緑褐色土を含む

第10図 第5トレンチ (縮尺1/30)



第6トレンチ地質剖面図				
透水性	土色	上質	地	層
透水性強1	7.5mE4 鮎褐色	明黄褐色を含む シルト	シルト	
透水性強2	10mD4 鮎褐色	褐色を含む 明黄褐色を含む	シルト	
透水性強3	10mB4 鮎褐色	褐色を含む 粘土質シルト	粘土質シルト	
P1	7.5mE4 鮎褐色	褐色を含む	シルト	
P2	7.5mE4 鮎褐色	褐色を含む	シルト	

第11圖 第6トレンチ (縮尺1/40)

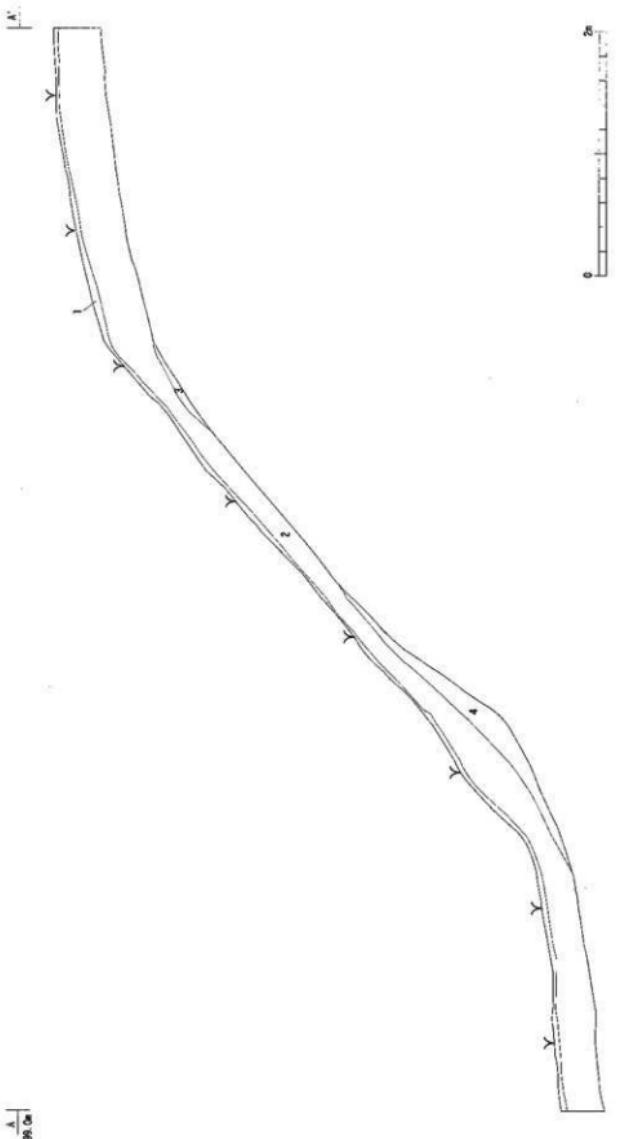
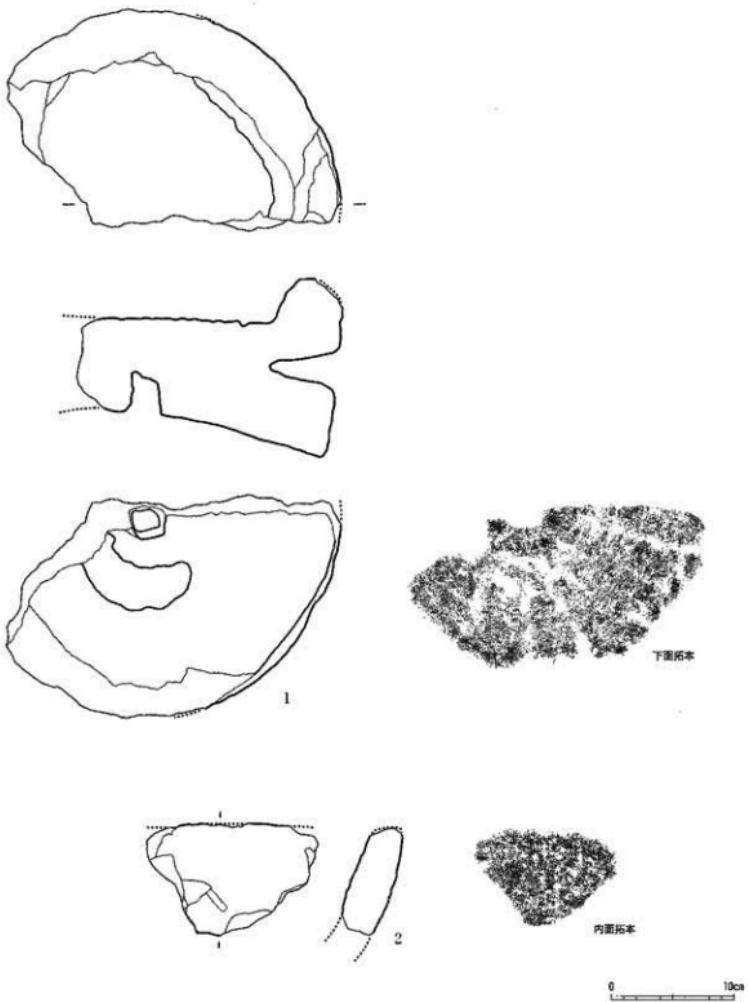


図6 トレンチ断面記載表				
部位	上色	下色	層	地
1層	1002/2 黒褐色		シルト	
2層	1008/4 褐色		シルト	
3層	7.376/3 灰褐色		粘土質シルト	
4層	2.3194/6 棕褐色		シルト	褐色土を多く含む

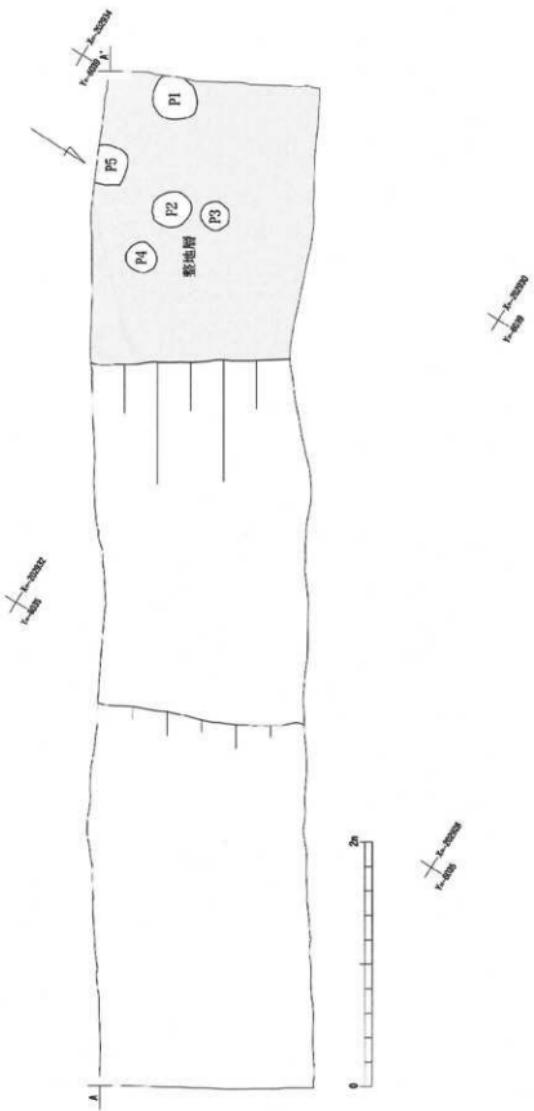
第12図 第6 トレンチ断面 (縮尺1/40)



第6トレンチ出土・椎状遺構表採 石製品複原表

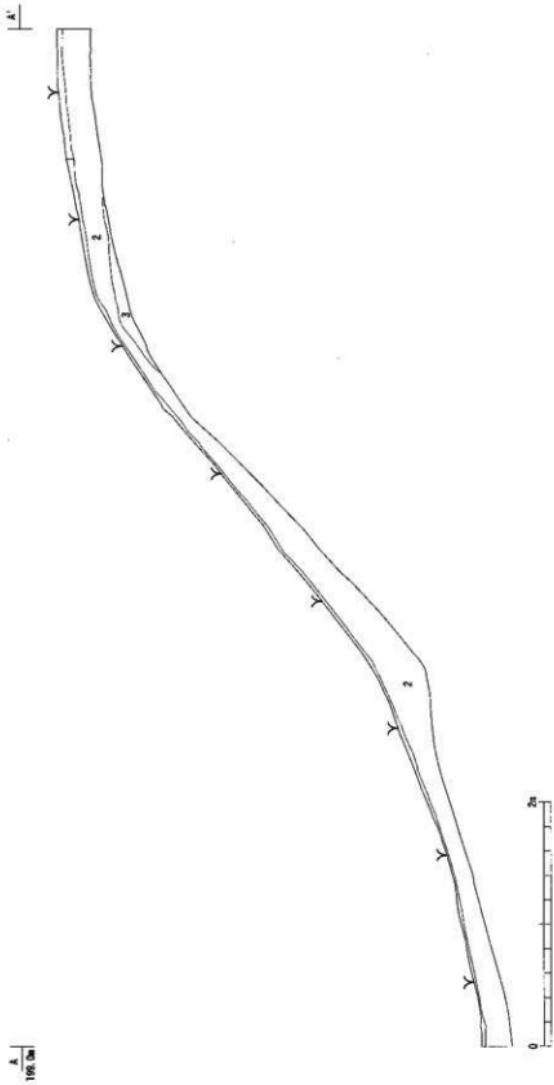
同種番号	登録番号	出土地点	年代	種類	基盤	部位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)・重量(kg)	石材	写真番号
第13回1	SC137	第6トレンチ	2層	石製品	石臼	上臼	17.1	24.5	14.3 5.85	安山岩	第220図1
第13回2	SG126	前状遺構	表紙	石製品	石臼	口縁部	9.1	13.7	3.4 6.35	ダイサイト	第220図2

第13図 第6トレンチ出土遺物・椎状遺構表採遺物(縮尺1/4)



第7トレンチ地質記述表			
地層名	土 色	土 質	備 考
P1	10RK/4 剥離色	シルト	粘土物・黒褐色土を多少含む
P2	10RK/4 剥離色	シルト	粘土物・黒褐色土を多少含む
P3	10RK/4 剥離色	シルト	粘土物・黒褐色土を多少含む
P4	10RK/4 剥離色	シルト	粘土物・黒褐色土を多少含む
P5	10RK/4 剥離色	シルト	粘土物・黒褐色土を多少含む
砂地盤	10RK/4 剥離色	シルト	黒褐色土・黒色土・コット状に多量に含む

第14図 第7トレンチ (縮尺1/40)

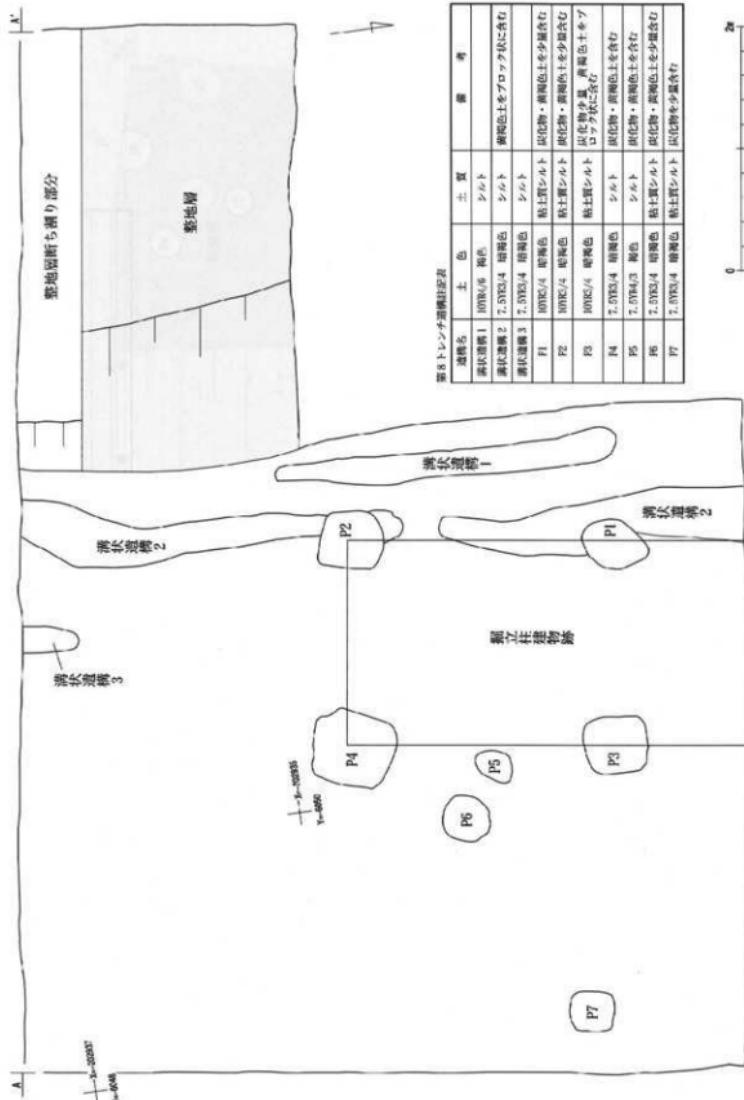


No. 7 Trench + 10m crest				
層位	土色	土質	地	地
1 層	10R2/3 黄褐色	稍上質シルト	砂土	
2 層	10R9/4 姑娘色	シルト	黄褐色土を少含む	
3 層	10B4/4 深赤	シルト	暗褐色土を少含む	

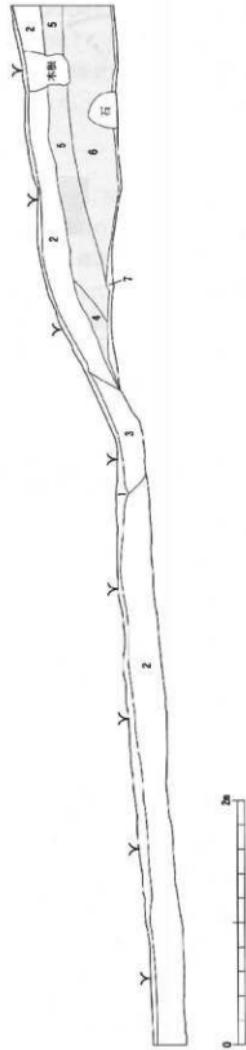
第15図 第7トレンチ断面 (縮尺1/40)

第16図 第8トレンチ (縮尺 1/40)

+ - 2020.7  
Y=400

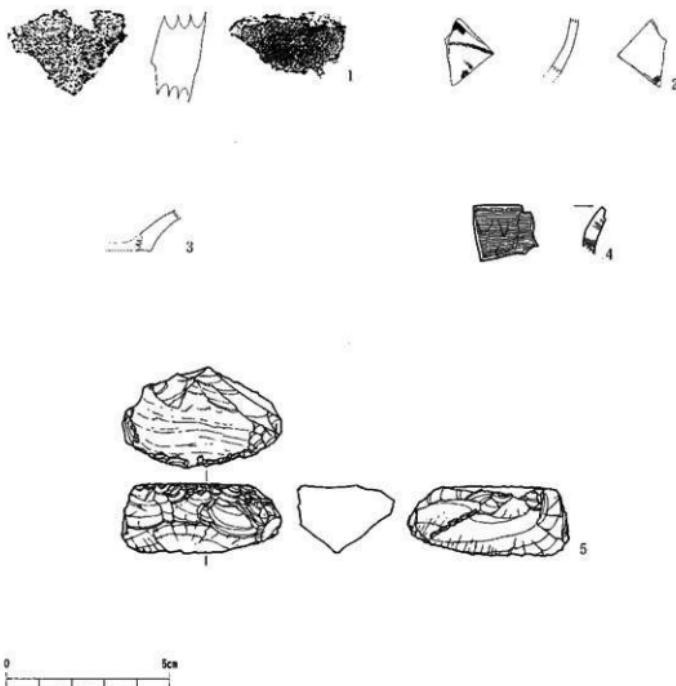


A  
201.2m



第8トレンチ断面記述			
層位	土色	土質	圖号
1層	7.5m/2.3 褐褐色	シルト	黄土
2層	7.5m/2.4 褐褐色	シルト	
3層	10m/3.4 褐褐色	シルト	底面に炭化物を含む
4層	10m/4.6 黄色	シルト	3756, 3906井孔上をアラック灰に含む 砂地層
5層	10m/5.6 黄色	シルト	薄シラカバ含む 砂地層
6層	10m/4.4 黄色	粘土質シルト	黄土
7層	10m/0.2 黄褐色	粘土質シルト	炭化物を含む

第17図 第8トレンチ断面 (縮尺1/40)



第8トレンチ出土 陶器部・土師質土器類表示

出取番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	外面	内面	時期	備考	写真番号
第8図1	SG125	8トレンチ	I層	陶器	盞	底	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地盤	第220図3
第8図2	SG133	8トレンチ	I層	陶器	碗	底	染付	染付	16世紀	中國産	第220図4
第8図3	SG117	8トレンチ	表段	土師質土器	皿	底	ロクロ調査	ナデ			第220図5

第8トレンチ出土 木製品概要表

出取番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	部位	時期	備考	写真番号
第8図4	SG134	8トレンチ	I層	木製品	椀	口縁部		炭化	第220図6

第8トレンチ出土 石器類概要表

出取番号	登録番号	出土地点	層位	種別	石材	長 (mm)	幅 (mm)	重畠 (g)	備考	写真番号
第8図5	SG44	8トレンチ	I層	石核	玉髓	49.7	30.6	21.4	36.6	第220図7

第18図 第8トレンチ出土遺物 (縮尺2/3)

上面は主郭中央へと続いている。段状遺構は土を積んで造られていたので、調査区の南端において一部断ち割りを行い、断面を観察した。その結果、整地層は3層あり、最も厚いところは56cmであった。整地層と地山との間には、2~5cmと非常に薄い、炭化物を含む黒褐色粘土質シルト層が堆積していた。遺物は、中世陶器の小破片（図版第18図1：写真図版第220図3）、中国製磁器の椀か皿の小破片（図版第18図2：写真図版第220図4）、木製椀の口縁部の炭化した小破片（図版第18図4：写真図版第220図6）、玉髓製の石核が各1点出土した（図版第18図5：写真図版第220図7）。また、土師質土器の皿の小破片1点を表探した（図版第18図3：写真図版第220図5）。

#### ⑨第9トレント（図版第19・20図：写真図版第144~146図）

主郭中央部より北側にある段状遺構の上に、4.8m×1.5mの調査区を設定した。地表面から30cm前後掘り下げた面で、溝状遺構とピット3箇所を確認した。遺構確認面は、7.5YR3/4暗褐色粘土質シルトである。堆積土は3層である。段状遺構は、地山を整地して造られており、段の高さは70cm、斜面の角度は18度である。この段状遺構の上辺に、溝状遺構が南北方向に1条確認された。長さは1.9m以上、幅は0.62~1.23mある。ピットの直径は45~70cmで、隅丸方形を呈しており、柱痕跡の認められるものは無かった。ピット2は、溝状遺構に切られていた。遺物は1層から、中世陶器の破片が3点出土した（図版第20図1~3：写真図版第221図1~3）。

#### ⑩第10トレント（写真図版第147・148図）

主郭の北側斜面下の第1腰郭に、3.0m×2.5mの調査区を設定した。地表面から約20cm掘り下げたが、遺構は確認されず、遺物の出土も無かった。確認面は、7.5YR4/4褐色シルトである。

#### ⑪第11トレント（図版第21図：写真図版第149~151図）

主郭北側の斜面から一段下にある第1腰郭に、11.7m×1.7mの調査区を設定した。主郭の平場部分は、地表面から40cm掘り下げた面で整地層を確認した。整地層の下には薄い黒褐色の旧表土が認められた。斜面から第1腰郭の平場にかけては地表面から30~45cm掘り下げた面で遺構を確認した。遺構確認面は、10YR6/8明褐色シルトである。遺構は土壌が1基で、大きさは長径1.1m、短径0.8mの隅丸方形を呈している。堆積土は5層で、4層は地滑りを起こしたような地山のブロックを多量に含んだ層で、斜面の角度は約30度である。遺物の出土は無かった。

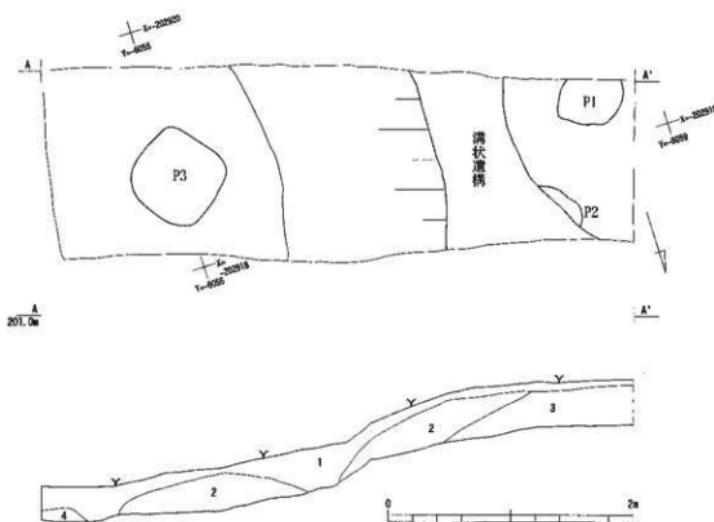
#### ⑫第12トレント（写真図版第152・153図）

主郭の北側斜面下の第1腰郭に、3.0m×2.5mの調査区を設定した。地表面から約15cm掘り下げたが、遺構は確認されず、遺物の出土も無かった。確認面は、10YR5/6黄褐色粘土である。

#### ⑬第13トレント（図版第22~24図：写真図版第154~162図）

主郭南側の土壌から一段下にある第2腰郭に、21.6m×1.8mの調査区を設定した。地表面から10~30cm掘り下げた面で遺構が確認された。遺構確認面は、7.7YR4/6褐色粘土質シルトで、粘性が非常に強い。主郭の平場部分からは、平坦に整地した面を5.3m確認した。この平坦面は、2.5YR5/8明黄褐色シルトで、暗褐色粘土質シルトのブロックを含んでいる。

土壌は、基底部の幅4.5m、上部の幅1.2m、高さは0.9mあるが、調査区から東側へ行くとさらに高くなる。構



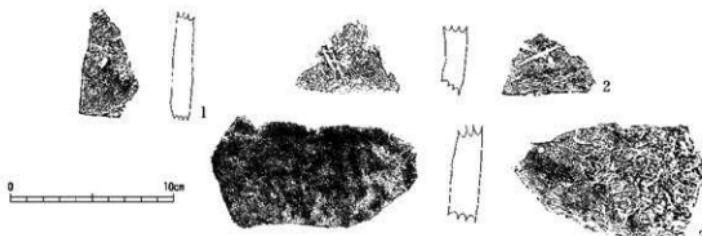
第9トレンチ土層記表

層位	上色	下色	備考
1層	10YR2/3 黄褐色	シルト	表土
2層	7.5YR2/3 棕褐色	シルト	
3層	7.5YR2/3 棕褐色	粘土シルト	黄褐色土を少含む
4層	7.5YR2/4 棕褐色	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に含む

第9トレンチ遺構記表

遺構名	土色	土質	備考
溝状遺構	7.5YR2/3 棕褐色	シルト	黄褐色土・炭化物を少含む
P1	10YR2/4 棕褐色	シルト	黄褐色土をブロック状に含む
P2	10YR2/4 棕褐色	シルト	黄褐色土をブロック状に含む
P3	7.5YR2/3 棕褐色	シルト	

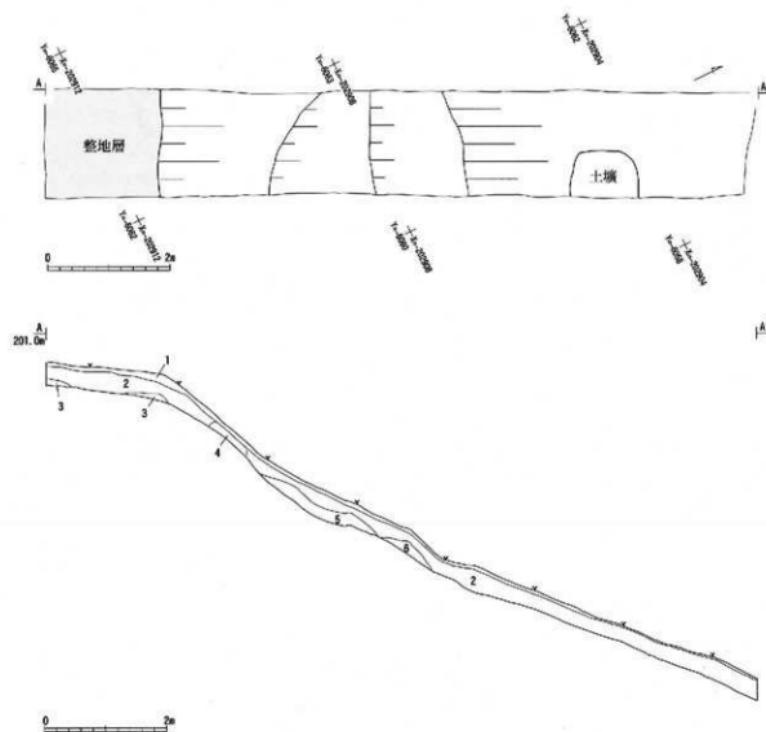
第19図 第9トレンチ (縮尺1/40)



第9トレンチ出土 陶器観察表

出土地点	層位	種別	縁部	部材	部位	外面	内面	時期	備考	参考図版
第20回1	S.G126	9トレンチ	I層	陶器	縁部	外縁	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地性、内面調査	第221回1
第20回2	S.G127	9トレンチ	I層	陶器	縁部	外縁	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地性	第221回3
第20回3	S.G128	9トレンチ	I層	陶器	縁部	外縁	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地性	第221回2

第20図 第9トレンチ出土遺物 (縮尺1/3)



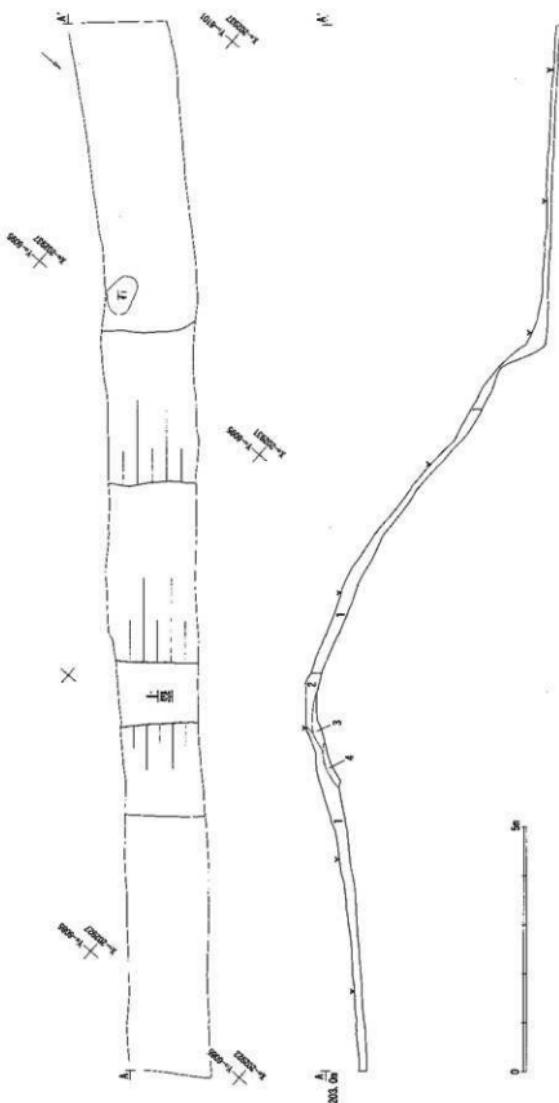
第11トレンチ土層記述表

層位	上色	土質	備考
1層	10YR2/2 黒褐色	シルト	表土
2層	10YR4/4 棕色	シルト	
3層	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	凹表土
4層	10YR6/5 明褐色	シルト	
5層	7.5YR4/4 棕色	シルト	愛島砾石をブロック状に多量に含む
6層	10YR5/6 褐褐色	シルト	

第11トレンチ遺跡記述表

遺跡名	上色	土質	備考
土壤	10YR6/1 海褐色	シルト	炭化物を少量含む
整地層	10YR2/4 暗褐色	粘土質シルト	

第21図 第11トレンチ (縮尺1/80)



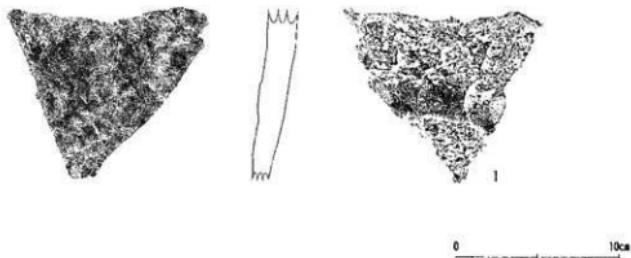
第13トレンチ土質柱状図				
層位	上色	下質	層	序号
1層	7.5m/4.6 緑褐色	シルト	表上	
2層	2.5m/6.6 黄褐色	土質粘土		
3層	NTRI/3 黃褐色	シルト	砂質土	
4層	10m/6.6 黄褐色	シルト	土質砂上	

第22図 第13トレンチ (縮尺1/100)



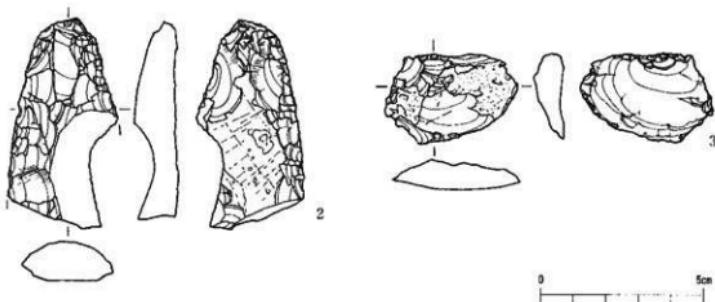
0 10cm

第23図 第13トレンチ出土遺物① (縮尺1/3)



第13トレンチ出土 開拓調査表

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	形種	部位	外 因	内 面	時 期	備 考	写真開版
第23図1	SG123	13トレンチ	1層	陶器	甕	口縁部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地窯、SG132と組合、原縫	第221図6
第23図2	SG129	13トレンチ	1層	陶器	甕	口縁部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地窯	第221図4
第23図3	SG120	13トレンチ	1層	陶器	甕	頭部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地窯	第221図5
第23図4	SG119	13トレンチ	1層	陶器	甕	体部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地窯、内面に縫	第221図7
第23図5	SG118	13トレンチ	1層	陶器	甕	体部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地窯	第221図8
第23図6	SG122	13トレンチ	1層	陶器	甕	体部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地窯	第222図1
第23図7	SG121	13トレンチ	1層	陶器	甕	体部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地窯	第222図2
第23図8	SG124	13トレンチ	1層	陶器	甕	体部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地窯	第222図3
第23図9	SG120	13トレンチ	2層	陶器	甕	体部	ナデ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地窯	第222図4
第23図10	SG131	13トレンチ	2層	陶器	甕	体部	タタキ →ナラ	ナデ	13世紀後半～14世紀前半	在地窯	第222図5



第13トレンチ出土 石器調査表

図版番号	登録番号	出土地点	層位	種別	石 材	長(m)	幅(m)	厚(m)	重(t)	備 考	写真番号
第24図2	SG36	13トレンチ	1層	薄状石片	ディサイト質凝灰岩	64.8	36.3	14.0	25.8	破損	第222図6
第24図3	SG37	13トレンチ	1層	剥片	玉髓	42.1	27.0	10.0	10.4		第222図7

第24図 第13トレンチ出土遺物② (縮尺は1が1/3、2・3は2/3)

築方法は、地山を削り出し、その上に明黄褐色シルトと黄褐色シルトを積んでおり、積み土の下には部分的に黒褐色の旧表土が認められた。南斜面の角度は約35度で、ここには多量の風化した安山岩が見られる。斜面下には、長径82cm、短径54cmの平らな安山岩があったが、人為的に置かれたものなのか、それとも自然にあったもののか判別できなかった。

第2腰郭の平場部分においては、平坦面を6.4m確認したが、ビットなどは認められなかった。この平場の堆積土は、7.7YR4/6褐色粘土質シルトで、粘性が非常に強い。

遺物は、主郭の平場から土壘上にかけての1層から中世陶器の破片8点と（図版第23図1～8：写真図版第21図4～8、第222図1～3）、範状石器、玉髓の剥片が各1点出土した（図版第24図2・3：写真図版第222図6・7）。また、調査区西側の斜面からも、中世陶器の破片2点を表探した（図版第23図9、第24図1：写真図版第222図4・5）。調査区内から出土した中世陶器の口縁部片と、表探した口縁部片は接合した。この口縁部片の断面には、漆が付着しており割れたところを接着したものと思われる。これらの中世陶器は、色調や作りが類似しており、同一の個体と考えられる。

#### ④第14トレーニング（図版第25図：写真図版第163・164図）

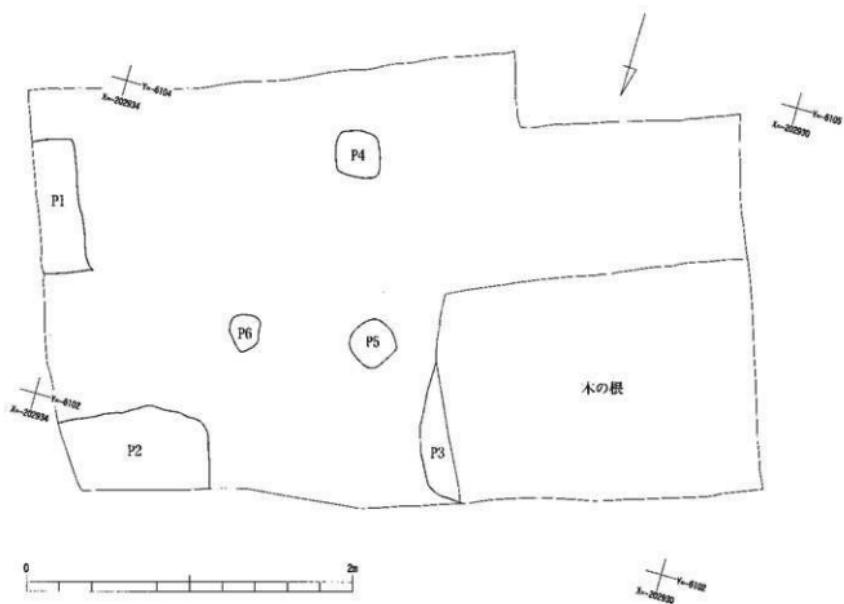
第2腰郭の平場部分に、2.5m×3.0mの調査区を設定した。地表面より約30cm掘り下げた2層上面で、6箇所のビットを確認した。1層は7.5YR4/6褐色粘土質シルト、2層は2.5YR7/8橙色の風化した安山岩層である。ビットは、全てこの風化した安山岩層に掘り込まれていた。ビット1～3は、長径70～90cmと大きく、隅丸方形を呈するものと思われるが、すべて調査区の外に伸びており全形が判るものは無かった。ビット4～6は、直径20～30cmの円形または隅丸方形を呈している。ビットには、柱痕跡が認められるものは無かった。遺物の出土も無かった。

#### ⑤第15トレーニング（写真図版第165・166図）

第2腰郭の平場部分に、2.5m×2.5mの調査区を設定した。地表面から約15cm掘り下げたが遺構は確認されず、遺物の出土も無かった。確認面は、7.5YR4/6褐色粘土質シルトである。

#### ⑥第16トレーニング（図版第26・27図：写真図版第167～177図）

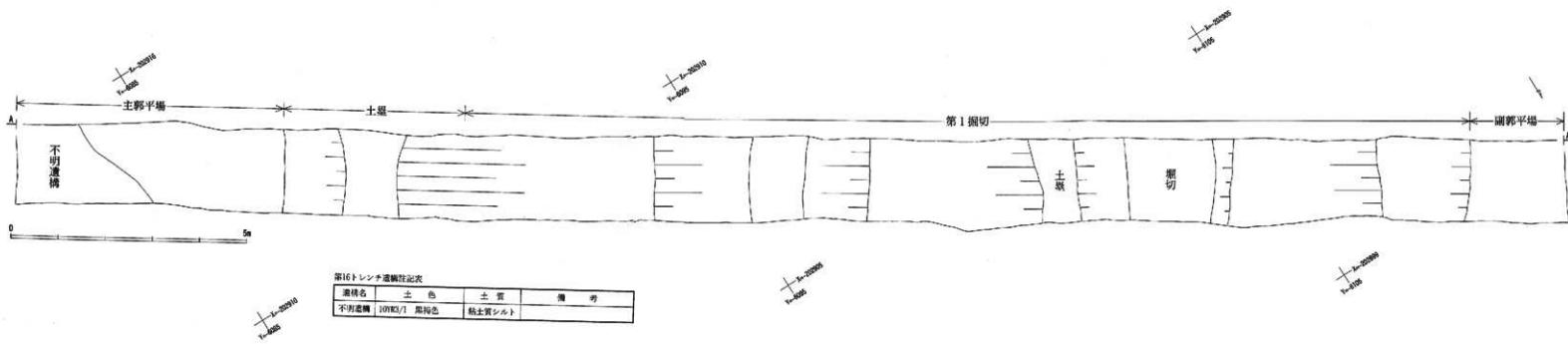
主郭と副郭の間、第1堀切の斜面に、33.2m×1.8mの調査区を設定した。主郭の平場部分は、地表面から約15cmで地山となり、東端において南北方向へ伸びる不明遺構が確認された。不明遺構の内部は、黒褐色粘土質シルトである。主郭西側の土塁は、地山を削り出して構築されている。基底部の幅3.8m、上部の幅1.2m、高さは0.2mある。調査区から西南方へ行くとさらに高くなり、第13トレーニングの土塁と接続するので、この間は地山を削り出した上に土を積んで構築されているものと思われる。土塁からは第1堀切の東斜面となり、上方の角度は40度、中間は25度、下方は50度と非常に急である。堀切の最も深いところは逆台形を呈しており、平底で幅は1.3mである。堆積土の最も厚いところは2.4mあり、10層に分けられたが、すべて自然堆積層である。副郭側の斜面には、小規模な土塁と堀切が見られる。土塁は上幅1.0m、高さ0.15mと低いが、調査区外の西南方へ高くなっている。堀切は上幅3.2m、深さは0.7m、底面はほぼ半らで幅2.7mあり、堆積土は3層である。小規模な堀切から副郭東斜面の角度は、下方が35度、上方が20度である。副郭の平場部分は、地山を削り出した平坦面で、ビットなどの遺構は確認されなかった。調査の結果、第1堀切の幅は21.2mあり、主郭西側の土塁上から底面までの深さは5.7mである。遺物の出土は無かった。



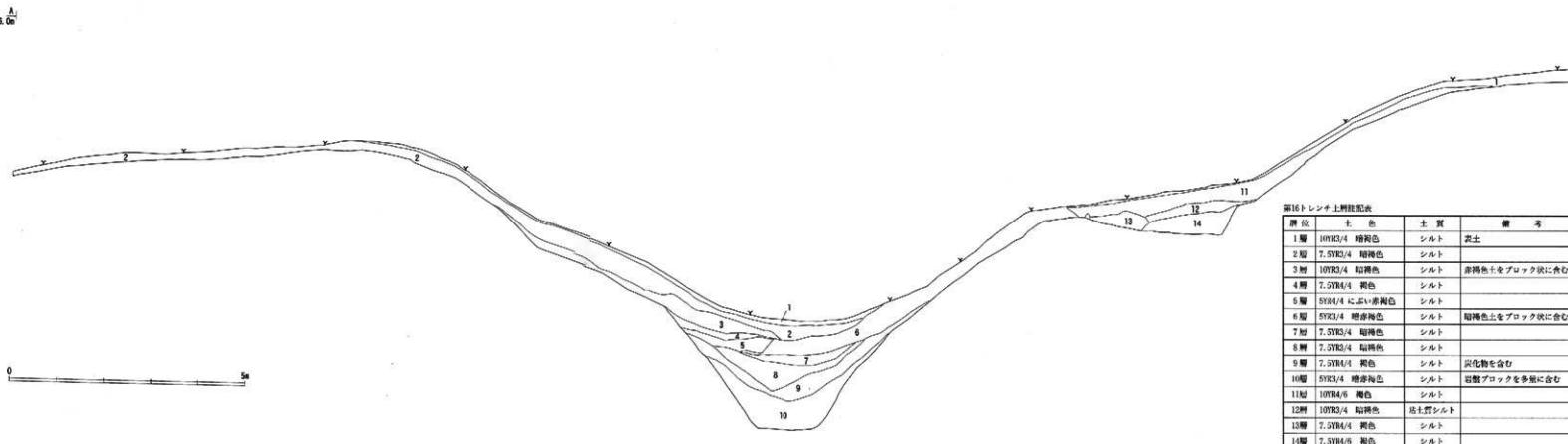
第14トレンチ遺構記述表

遺構名	土色	土質	備考
P1	5YR2/1 墓赤褐色	シルト	黒褐色土をブロック状に含む 風化した安山岩片を含む
P2	7.5YR2/4 暗褐色	粘土質シルト	2cm以下 の風化した安山岩片を含む
P3	7.5YR2/3 濃褐色	シルト	7.5YR3/4暗褐色土を含む
P4	7.5YR4/4 褐色	シルト	
P5	7.5YR4/6 棕色	シルト	2~10cmの風化した安山岩片を含む
P6	5YR2/4 墓赤褐色	シルト	

第25図 第14トレンチ (縮尺1/30)



第26図 第16トレンチ (縮尺1/80)



第27図 第16トレンチ断面 (縮尺1/80)

## ⑩第17トレーニング (写真図版第178・179図)

通路状遺構と第1堀切の中間にある斜面に、 $2.0\text{m} \times 2.5\text{m}$ の調査区を設定した。地表面から40cm掘り下げたが遺構は確認されず、遺物の出土も無かった。確認面は、5YR4/4にぶい赤褐色シルトである。

## ⑪第18トレーニング (写真図版第180・181図)

通路状遺構の東端、副郭の斜面下に、 $2.5\text{m} \times 2.5\text{m}$ の調査区を設定した。地表面から15cm掘り下げたが遺構は確認されず、遺物の出土も無かった。確認面は、10YR7/8黄橙色シルトである。

## ⑫第19トレーニング (図版第28図：写真図版第182・183図)

通路状遺構の副郭斜面下に、 $2.5\text{m} \times 2.5\text{m}$ の調査区を設定した。地表面から20~50cm掘り下げた面で、溝状遺構を確認した。溝状遺構は、通路状遺構と平行で東西方向に伸びており、幅は0.9~1.1mである。遺構確認面は、10YR6/8明黄褐色シルトである。遺物の出土は無かった。

## ⑬第20トレーニング (図版第29図：写真図版第184・185図)

通路状遺構の副郭斜面下に、 $2.0\text{m} \times 2.0\text{m}$ の調査区を設定した。地表面から10~30cm掘り下げた面で溝状遺構を2条確認した。溝状遺構1は副郭の斜面下で、東西方向に伸びておらず、幅は0.6m以上ある。溝状遺構2も、東西方向に伸びておらず、幅は0.2~0.5mである。溝状遺構1は、第19トレーニングで確認された溝状遺構と接続するものと思われる。遺構確認面は、10YR6/8明黄褐色シルトである。遺物の出土は無かった。

## ⑭第21トレーニング (図版第30~37図：写真図版第186~210図)

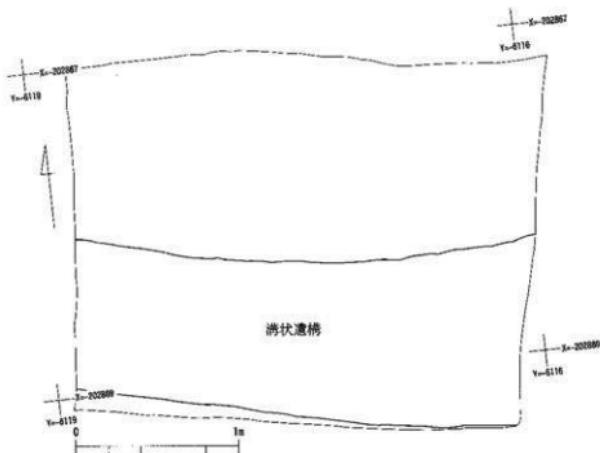
副郭から第2堀切、第1・2土塁、第3堀切の各斜面に、 $32.7\text{m} \times 1.6\text{m}$ の調査区を設定した。副郭の平場および第1・2土塁は、地表面から10~30cm掘り下げた面で遺構を確認した。副郭の平場は、黄褐色の地山を平坦に整地していた。副郭の西側にある土塁は、基底幅6.2m、上幅2.2m、高さ1.1m。構築方法は、第2堀切を掘った際に出たと思われる愛島軽石層を積んで造られていた。この積まれた愛島軽石は、大きく3層に分けられた。愛島軽石の下には、暗褐色の粘土質シルト層が堆積していた。7b層から砾石が1点出土した(図版第35図1：写真図版第223図1)。

第2堀切は、幅6.3m、第1土塁からの深さは2.8m、東斜面の角度は35度、西斜面の角度は30度である。底面はほぼ平らで、幅は60cmである。堆積土は4層、深さは105cmである。第2堀切は、地山の愛島軽石層を掘って造られている。

第1土塁は、基底幅4.6m、上幅1.4m、高さ1.0mである。構築方法は、地山を削り出して造られている。第2土塁は、基底幅4.2m、上幅2.1m、高さ0.9mである。構築方法は、地山を削り出した上に、褐色のシルト層を積んで造られている。表上の下、6層上面から測定(写真図版第224図11)と砂片が各1点出土した。この6層は、副郭西側の土塁下の8層と対応する層である。第2土塁は、愛島軽石層の上面まで掘り下げたが遺物の出土は無かつた。

第3堀切は、幅10.0m、第2土塁からの深さは3.9m、東斜面の角度は35度、西斜面の角度は30度である。底面はほぼ平らで、幅は90cmである。堆積土の最も厚いところは64cm、堆積土は3層あり、すべて自然堆積層である。堀切は、愛島軽石層などの地山を掘り込んで造られている。

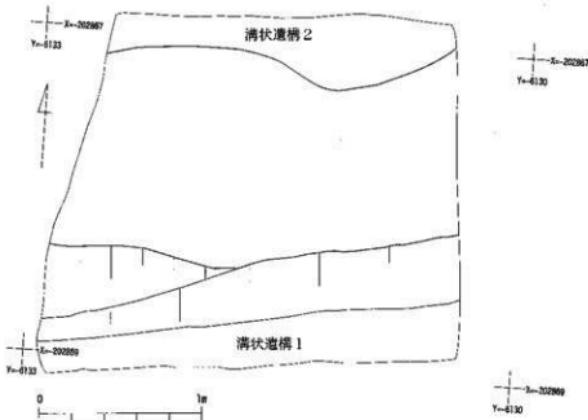
副郭西側にある土塁の、盛土下の7a層および7b層を掘り下げた8層で遺物が多数出土した。8層は褐色シ



第19トレンチ造構註記表

造構名	上色	土質	備考
溝状造構	10783/3 増褐色	粘土質シルト	10783/4 暗褐色土をブロック状に含む 灰化物・鐵土を少混入

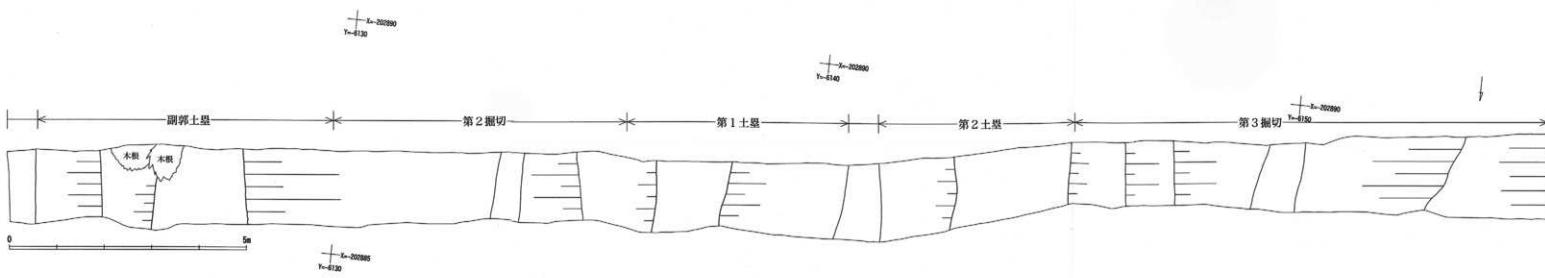
第28図 第19トレンチ (縮尺1/30)



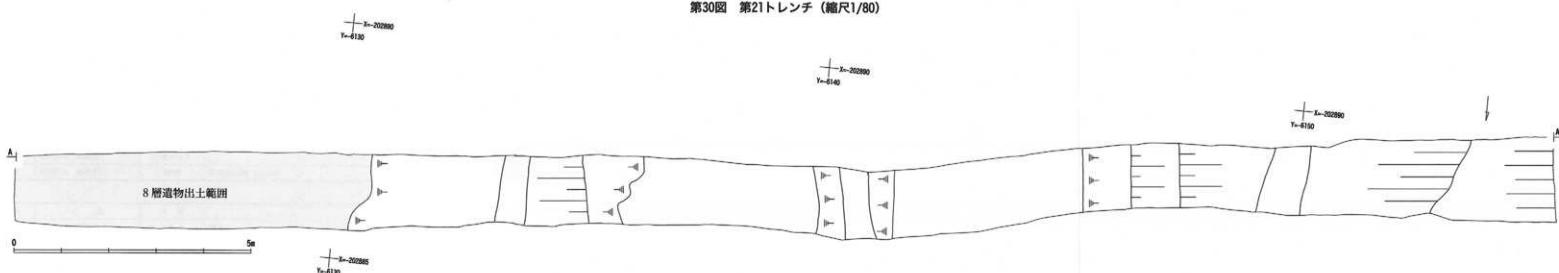
第20トレンチ造構註記表

造構名	上色	土質	備考
溝状造構1	10783/4 増褐色	粘土質シルト	
溝状造構2	10783/4 増褐色	粘土質シルト	

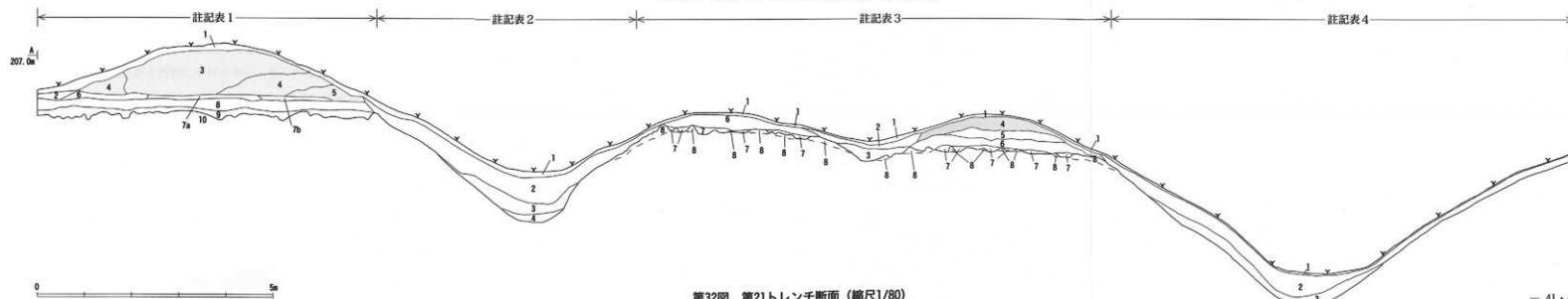
第29図 第20トレンチ (縮尺1/30)



第30図 第21トレンチ (縮尺1/80)



第31図 第21トレンチ愛島輕石層上面 (縮尺1/80)



第32図 第21トレンチ断面 (縮尺1/80)

註記表1

層位	上色	上質	備考
1層	10YR3/4 暗褐色	シルト	表土
2層	10YR4/4 褐色	シルト	
3層	10YR7/8 黄褐色	砂礫	愛島輕石の調和土层積土
4層	10YR4/4 褐色	砂質シルト	愛島輕石をブロック状に含む 調和土层積土
5層	10YR4/6 褐色	シルト	愛島輕石の1cm~2cmの塊を少量含む 調和土层積土
6層	7.5YR4/4 褐色	シルト	5mm前後の小塊を多量含む 10YR4/4褐色シルトをブロック状に含む
7a層	10YR3/4 暗褐色	軽土質シルト	粘性が強い
7b層	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	粘性は7a層より弱い 淡化物を少量含む 5mm前後の小塊を少量含む 砂石出土
8層	7.5YR4/4 褐色	シルト	2mm~5mmの川崎スコリアの細かい塊を少量含む 0.5cm~5cmの青灰色の角礫を含む 石器・縄文土器片・炭化物出土
9層	10YR6/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	0.5cm~5cmの青灰色の角礫を多量に含む 2mm~5mmの經鉄鉱を少量含む
10層	10YR7/8 暗褐色	砂礫	愛島輕石層 (Ac-Nd)

註記表2

層位	土色	土質	備考
1層	10YR3/4 暗褐色	シルト	表土
2層	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	
3層	10YR5/8 黄褐色	砂質シルト	愛島輕石をブロック状に含む
4層	10YR4/6 褐色	砂質シルト	愛島輕石を多量に含む

註記表3

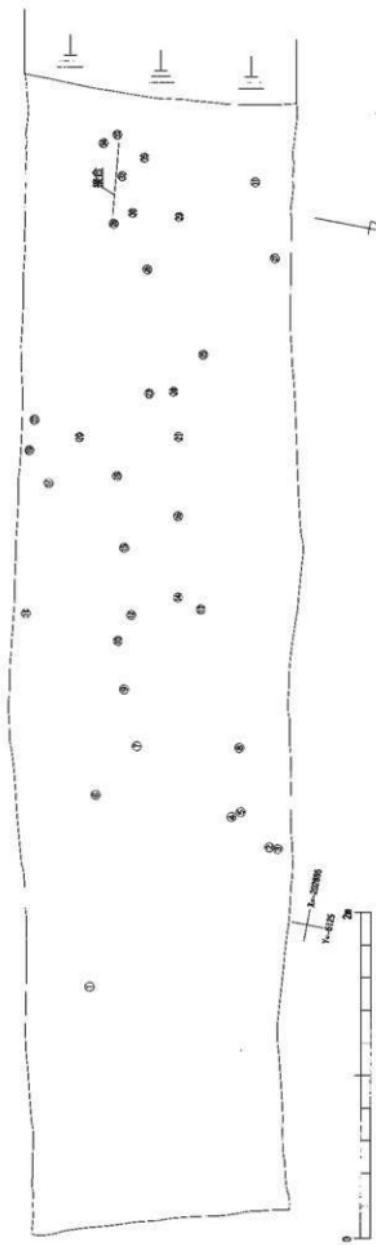
層位	上色	上質	備考
1層	10YR3/4 暗褐色	シルト	表土
2層	10YR4/4 褐色	シルト	
3層	10YR4/6 褐色	シルト	愛島輕石をブロック状に少量含む
4層	10YR4/4 褐色	シルト	愛島輕石をブロック状に少量含む 暗褐色シルトをブロック状に含む 第2上层積土
5層	10YR2/3 黑褐色	シルト	炭化物を少量含む 白褐色シルトをブロック状に多量に含む
6層	7.5YR5/6 明褐色	シルト	愛島輕石をブロック状に少量含む
7層	10YR5/4 黄褐色	砂質シルト	
8層	10YR7/8 黄褐色	砂礫	愛島輕石層 (Ac-Nd)

註記表4

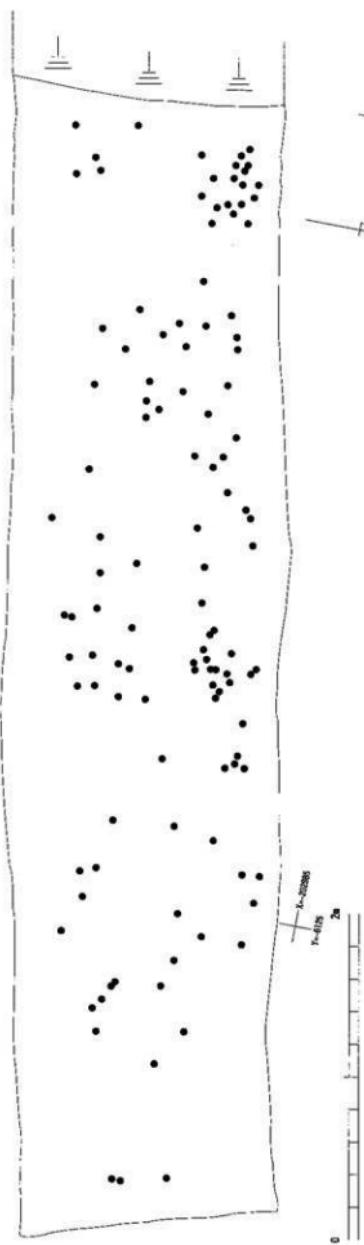
層位	土色	土質	備考
1層	10YR3/4 暗褐色	シルト	表土
2層	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	
3層	10YR4/4 褐色	シルト	

第2表 第21トレーンチ断面土層註記表

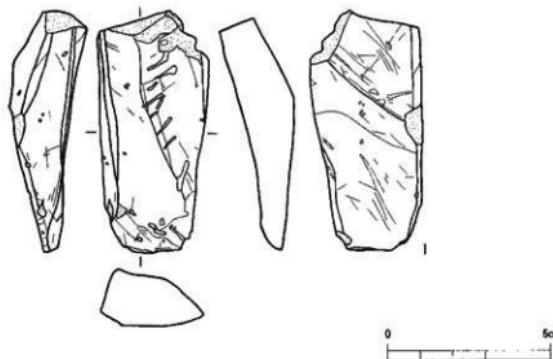
ルトで、川崎スコリアの細粒を僅かに含む層である。出土した遺物は、石器37点と縄文土器片1点である。石器の分布は東西5.2mあるが、特に土壘の真下から西側にかけて多く、縄文土器片は掘切の斜面から東へ40cmのところから出土した。遺物の周囲からは、炭化物も多数認められた(第33・34図参照)。炭化物の分布も、石器などの分布と同様に土壘の真下から西側にかけて多かった。石器は、スクレイバーの剥片2点(図版第35図2・3:写真図版第223図2・3)、二次加工のある剥片1点だけである(図版第35図4:写真図版第223図4)。その他は、石核7点、剥片26点、碎片1点である。石材は、玉髓とデイサイト質珪化凝灰類が多く、中には接合する玉髓の剥片も2点あった(図版第36図1~3:写真図版第223図5~7)。縄文土器片は、暗灰色で纖維を含むが、非常に摩滅しており文様は不明である(図版第35図6:写真図版第224図10)。8層の層厚は、17~24cmである。9層は、にぶい黄褐色砂質シルト層であったが遺物の出土は無かった。10層は愛島輕石層で、その上面にはかなりの凹凸が認められた。



第33圖 副郭土壁下8層遺物出土分布圖 (縮尺1/30)

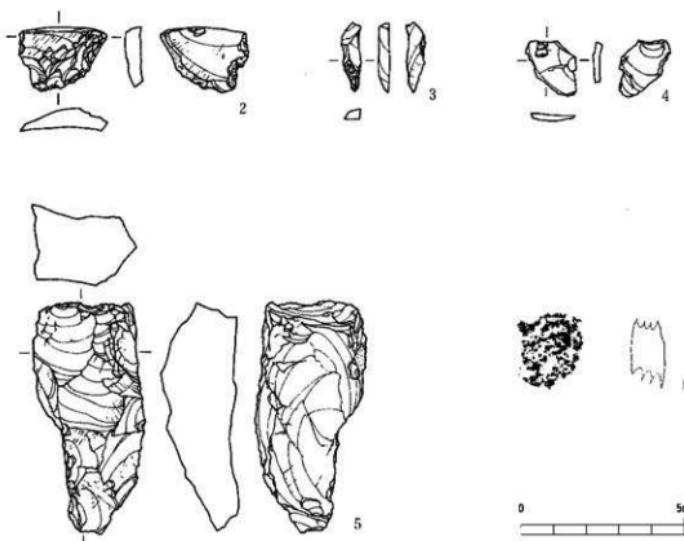


第34圖 副郭土壁下8層炭化物出土分布圖 (縮尺1/30)

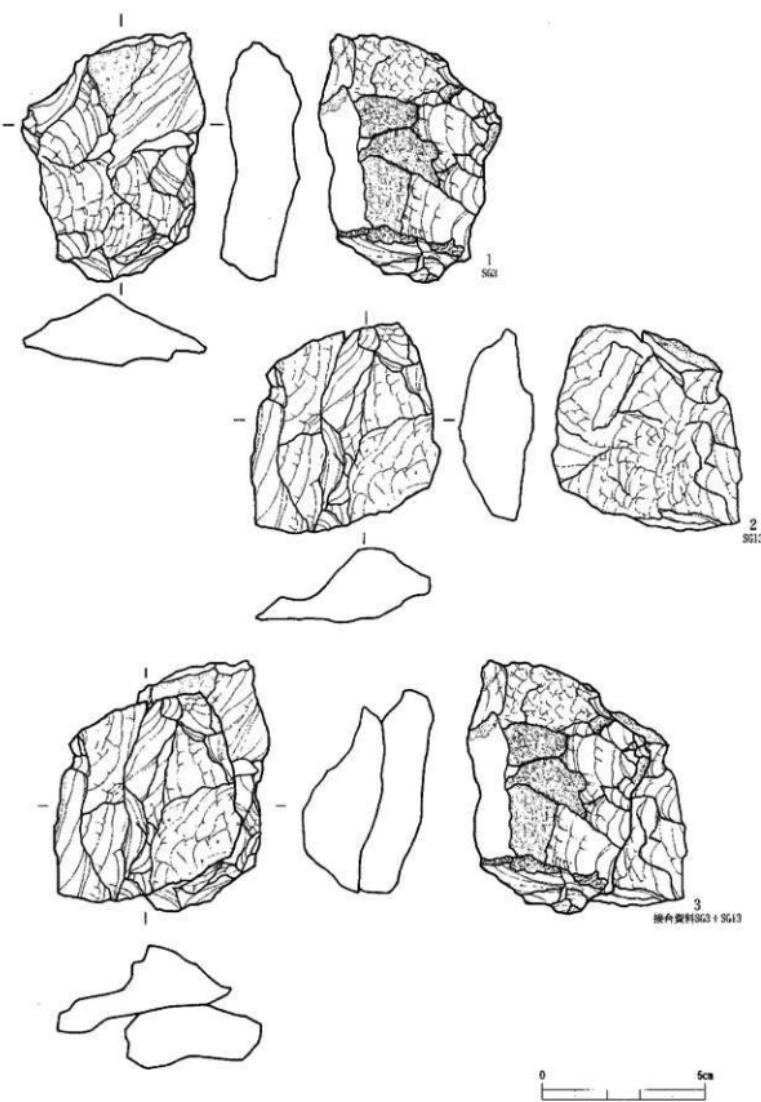


第21トレンチ出土 石削器複数点

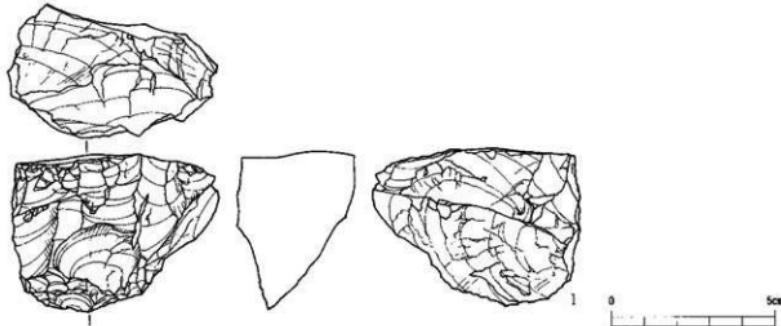
図版番号	登録番号	出土地点	層位	種類	基準	長(m)	深(m)	厚(mm)	重(kg)	石材	備考	参考図版
第35図1	S G135	副郭上段下	7b層	石製品	砾石	76	34	21	51	ダイサイト	鏡張	第229図1



第35図 副郭土塁下出土遺物① (縮尺2/3)



第36図 副郭土壘下出土遺物② (縮尺2/3)



第37図 副郭土壁下出土遺物③ (縮尺2/3)

第21トレンチ調査下8号出土 石器類表

第33回	登録番号	立録番号	種別	石 片	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	備 考	写真枚数
①		SG31	剥片	ダイサイト質珪化凝灰岩	33.7	27.3	11.1	8.3		第223回10
②		SG29	剥片	珪質頁岩	50.3	23.2	17.8	29.7		
③		SG30	剥片	ダイサイト質珪化凝灰岩	14.6	7.2	3.7	0.2		
④		SG31	剥片	ダイサイト質珪化凝灰岩	29.8	21.1	11.8	3.3		
⑤		SG33	剥片	ダイサイト質珪化凝灰岩	8.6	6.8	0.9	0.1		
⑥		SG11	剥片	ダイサイト質珪化凝灰岩	24.7	13.9	2.1	0.6		第223回11
⑦		SG10	剥片	ダイサイト質珪化凝灰岩	72.3	44.2	17.7	46.8		第223回9
⑧		SG34	剥片	ダイサイト質珪化凝灰岩	18.9	10.2	2.1	0.3		
⑨		SG19	二次加工ある剥片	珪化凝灰岩(珪化が悪い)	21.3	12.8	3.0	0.7		第223回4
⑩	第35回3	SG27	スクレーパー	ダイサイト質珪化凝灰岩	21.2	5.9	3.3	0.4	破損	第223回3
⑪		SG28	剥片	ダイサイト質珪化凝灰岩	13.0	11.1	2.1	0.2		
⑫		SG25	剥片	ダイサイト質珪化凝灰岩	11.9	11.9	0.9	0.1		
⑬		SG26	剥片	ダイサイト質珪化凝灰岩	26.9	16.1	1.9	0.3		
⑭		SG8	剥片	ダイサイト質珪化凝灰岩	27.1	24.3	10.2	4.3	加熱痕	第223回12
⑮		SG24	剥片	ダイサイト質珪化凝灰岩	27.0	11.2	9.1	0.7		
⑯		SG22	石核	玉鮫	69.0	43.1	44.0	124.4		第223回14
⑰		SG23	剥片	玉鮫	57.3	50.1	22.2	48.6		第223回6
⑱		SG7	剥片	ダイサイト質珪化凝灰岩	18.9	12.2	7.2	0.9		
⑲		SG35	剥片	ダイサイト質珪化凝灰岩	24.2	20.2	8.9	1.7		
⑳		SG6	剥片	ダイサイト質珪化凝灰岩	25.4	16.1	12.0	2.9		
㉑	第35回5	SG21	石核	玉鮫	72.2	41.3	25.6	65.3		第223回8
㉒		SG20	石核	玉鮫	66.5	52.6	32.1	124.8		第224回1
㉓	第35回2	SG16	スクレーパー	珪質頁岩	27.0	19.3	6.8	3.2	破損	第223回2
㉔		SG18	剥片	玉鮫	36.8	13.2	4.9	1.5		第223回3
㉕		SG5	石核	珪化木(珪化が悪い)	65.8	65.8	26.3	128.6		第223回5
㉖		SG4	剥片	玉鮫(珪化)	75.6	26.8	19.9	18.9		第224回3
㉗		SG17	剥片	玉鮫	25.2	18.1	7.0	2.5		
㉘	第36回1	SG3	剥片	玉鮫	81.9	61.0	24.0	105.6	SG3と接合	第223回5
㉙		SG1	石核	玉鮫	114.6	83.7	76.4	687.0		第224回2
㉚		SG2	剥片	玉鮫	23.0	14.3	0.7	1.1		
㉛		SG16	剥片	玉鮫	15.9	10.8	5.0	0.5		
㉜		SG15	剥片	玉鮫	17.8	11.6	2.9	0.6		
㉝	第36回2	SG13	剥片	玉鮫	69.6	59.1	24.7	70.0	SG3と接合	第223回6
㉞		SG14	石核	玉鮫	98.5	74.1	50.0	296.6		第224回7
㉟		SG40	剥片	玉鮫	72.2	68.2	22.3	102.3	地点不明(⑩の西方・斜切削面)	第224回9
㉟	第37回1	SG41	石核	玉鮫	66.3	54.1	42.2	129.9	地点不明(⑩の西方・斜切削面)	第224回8
		SG42	剥片	頁岩	26.3	23.3	6.5	3.1	地点不明(⑩の西方・斜切削面)	第224回4

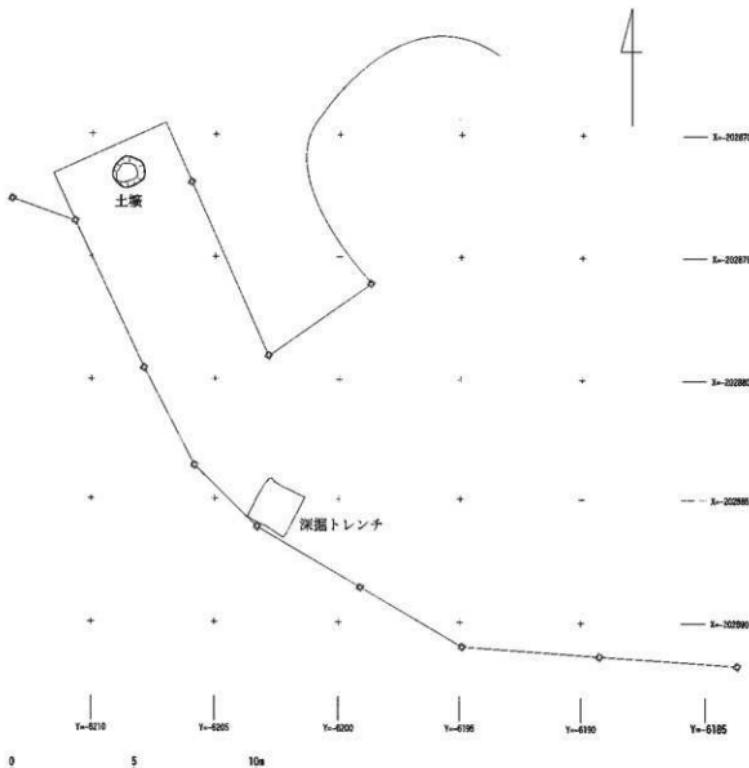
第21トレンチ調査下8号出土 上層觀観表

第33回	登録番号	立録番号	種別	器種	部位	外 容	内 容	時 期	備 考	写真枚数
㉟	第35回6	SG88	鐵文上崩	深鉢	全体	不明	不明	早期末～始動初	鐵鋸鋸入	第224回10

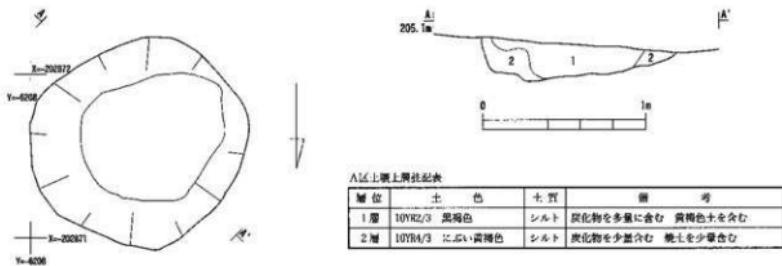
② A区 (図版第38～45図 : 写真図版第211～219図)

館跡西方の緩やかな斜面である。調査区の西端、2層上面で土壌が1基確認された。平面形は円形で、長径1.35m、短径1.2m、深さ0.24m、壁面は緩やかに立ち上がり、底面は窪んでいる。壁面から底面にかけては、先の尖った棒状の道具で掘ったものと思われ、かなりの凹凸がみられる。堆積土は2層あり、1層には炭化物が多量に含まれており、縄文土器片が1点出土した (図版第40図1 : 写真図版第225図1)。

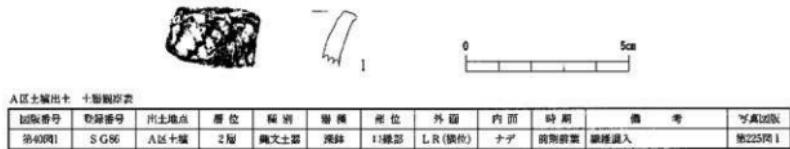
A区の基本層序を観察するため、西南端に1.5m×2mの深掘トレンチを設定し、地表面から2.2mまで掘り下げた。堆積層は全部で20層あり、4層と9層から縄文土器片と石器などが微かに出土した。その中から、縄文土器片5点、スクレイバーと剥片各1点を図示した (図版第43図1～7 : 写真図版第225図2～8)。地表面から約1.2m下で、川崎スコリア層が確認され、層厚は約13cmである。また、A区内の西南部からは、縄文土器・弥生土器・上師器などの小破片や、打製石斧・スクレイバーなどの遺物を表探した (図版第44図1～10、第45図1・2 : 写真図版第225図9・10・第226図1～10)。



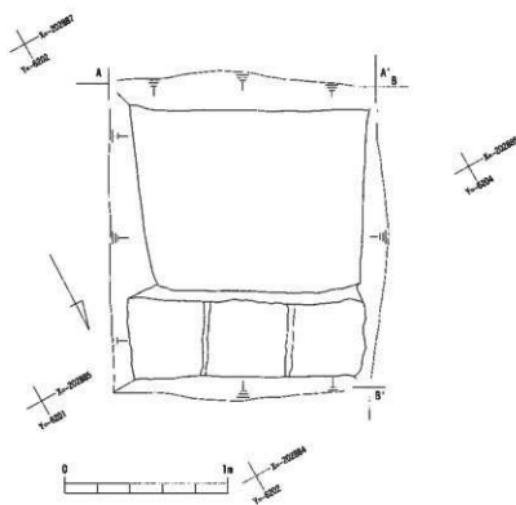
第38図 A区遺構・深掘トレンチ配置図 (縮尺1/200)



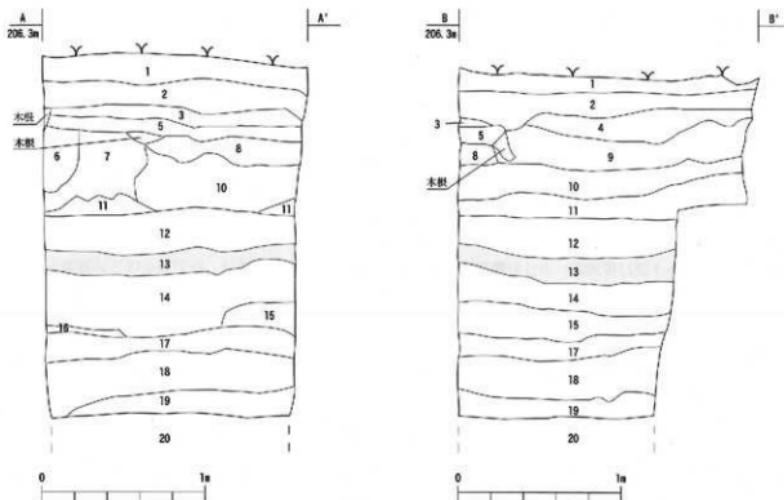
第39図 A区土壤（縮尺1/30）



第40図 A区土壤出土遺物（縮尺2/3）



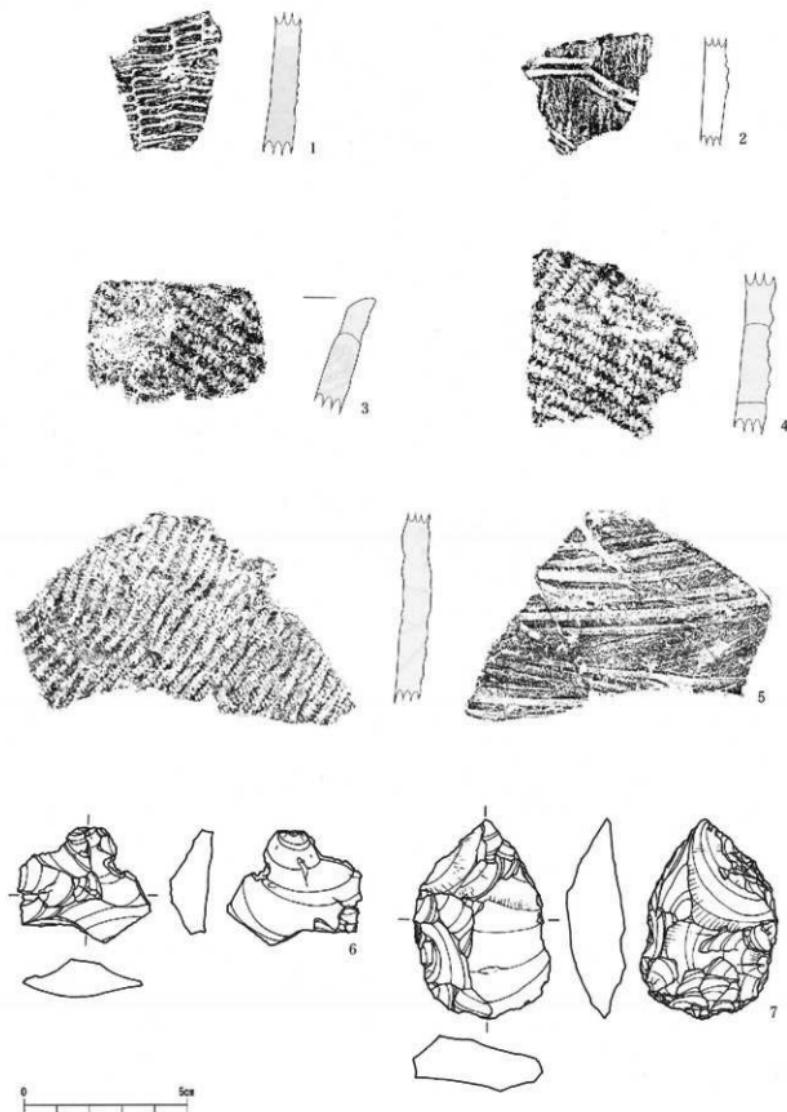
第41図 A区深掘トレンチ（縮尺1/30）



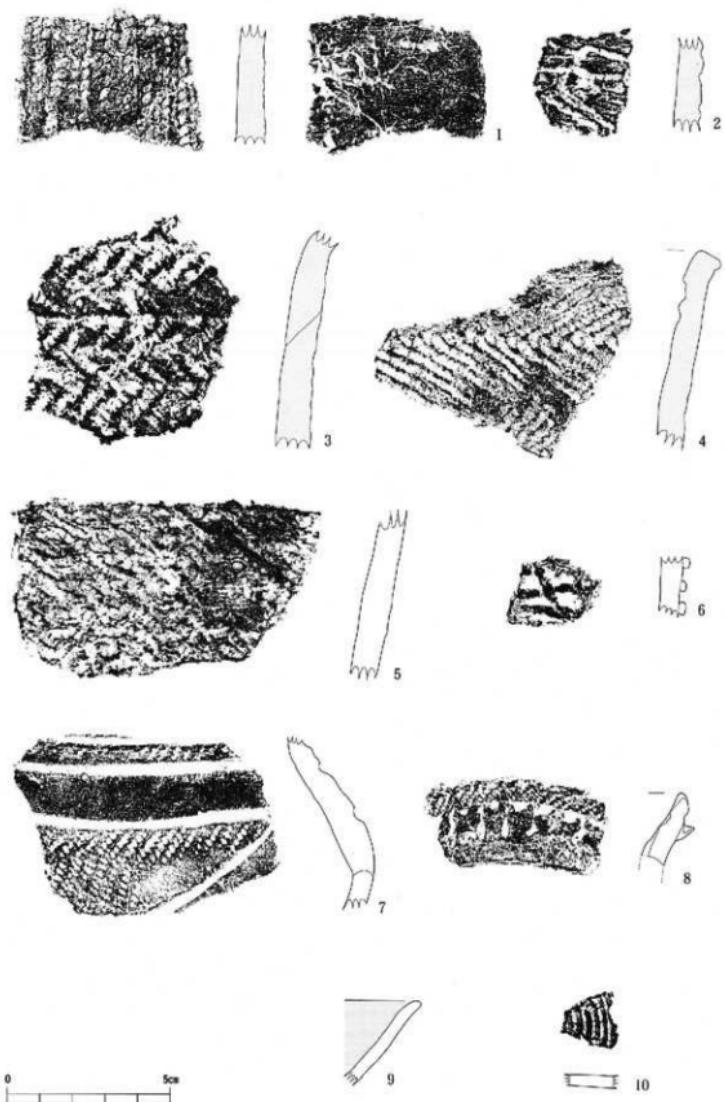
A区深掘トレンチ断面図

層位	上色	土質	備考
1層	10Y3/3/4 暗褐色	シルト	泥土 1cm~3cmの粘土を含む
2層	10Y3/3 黄褐色	シルト	褐色土をブロック状に含む 1cm~3cmの粘土を含む
3層	7.5Y3/4 暗褐色	シルト	1cm~3cmの粘土を含む
4層	7.5Y3/4 浅褐色	シルト	暗褐色土をブロック状に含む 1cm~3cmの粘土を含む 繊文土薄片・薄片・鉢片を含む
5層	7.5Y3/4 暗褐色	シルト	1cm~3cmの粘土を含む 売化物を細胞に少量含む
6層	10Y3/4 浅褐色	シルト	1cm~3cmの粘土を含む
7層	10Y3/4 浅褐色	シルト	1cm~3cmの粘土を含む 売化物を少量含む
8層	7.5Y3/4 浅褐色	粘土質シルト	1cm~3cmの粘土を含む
9層	10Y3/4 浅褐色	粘土質シルト	1cm~3cmの粘土を含む 繊文土薄片・薄片・鉢片を含む
10層	10Y3/4/6 黄褐色	粘土質シルト	9層よりやや黄色 1cm~3cmの粘土を含む
11層	10Y3/4/6 浅褐色	シルト	
12層	10Y3/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	0.5cm~2cmの岩礫(コリケ)の塊を含む
13層	5Y5/5 明赤褐色 10Y3/5/6 明赤褐色	スコリア	川南スコリア層 (Lo-Ko)
14層	10Y3/5/4 にぶい黄褐色	粘土	0.5cmの角石を少量含む 0.2cm~0.5cmのスコリアの塊を少量含む
15層	10Y3/5/6 明赤褐色	粘土	0.5cm~1.5cmの青灰色角礫を少量含む 0.1cm~0.3cmのマンガン結を少量含む
16層	10Y3/5/6 明赤褐色	粘土	15層よりやや黄色 0.2cm前後の青灰色角礫を少量含む 0.1cmのマンガン結を少量含む
17層	10Y3/5/6 黄褐色	粘土質シルト	0.2cm~1.5cmの青灰色角礫を少量含む 0.1cmのマンガン結を多量に含む
18層	10Y3/5/6 明赤褐色	粘土質シルト	0.3cm~1.5cmの青灰色角礫を多量に含む 0.05cmのマンガン結を多量に含む
19層	10Y3/7/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	0.1cm~0.5cmの青灰色角礫を多量に含む 0.05cm以下のマンガン結を多量に含む
20層	10Y3/7/4 にぶい黄褐色	砂	0.2cm~0.5cmの青灰色角礫を多量に含む

第42図 A区深掘トレンチ断面 (縮尺1/30)

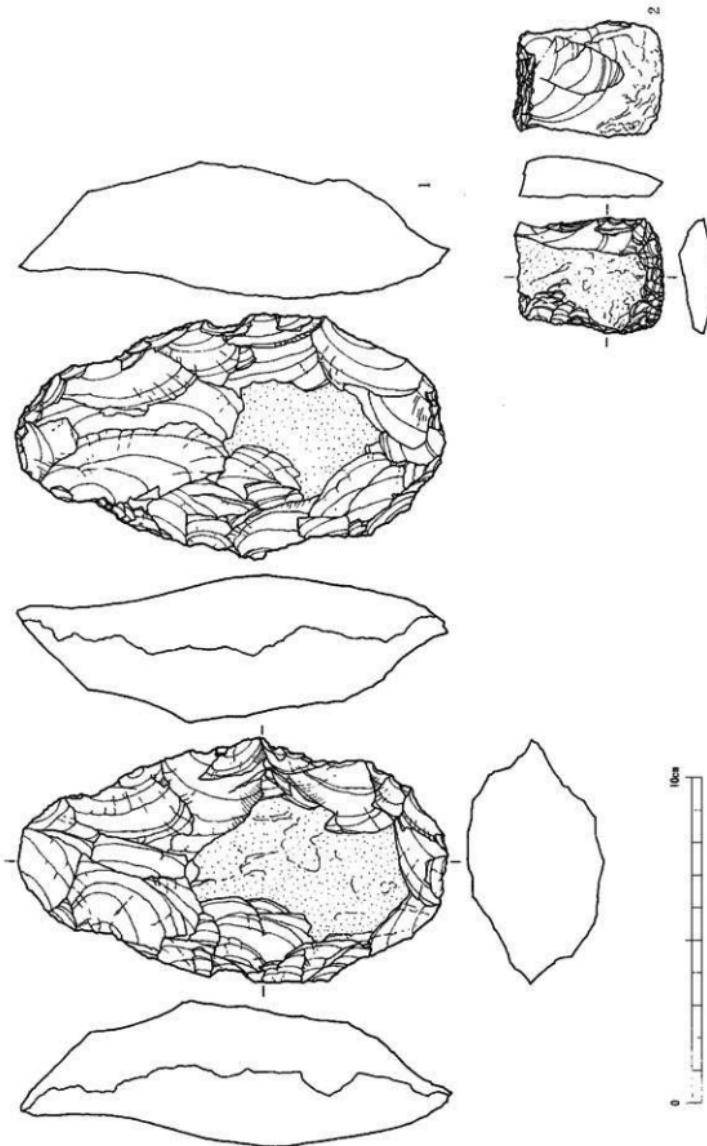


第43図 A区深掘トレンチ出土遺物（縮尺2/3）



第44図 A区表探遺物① (縮尺2/3)

第45图 A区表探遗物2 (缩尺2/3)



## A区深掘トレント出土 土器調査表

回収番号	登録番号	出土地点	層位	種別	種類	部位	外 表	内 面	時 期	備 考	写真図版
第43回 1	S G92	A区深掘	4層	陶文土器	深鉢	体部	縦瓦状捺条文 (R) 横肋	ミガキ	大木2a式	織縫倒入	第225回2
第43回 2	S G94	A区深掘	4層	陶文土器	深鉢	体部	条縞→河井二本跳ね	ミガキ			第225回3
第43回 3	S G93-2	A区深掘	4層	陶文土器	深鉢	口縛部	陶文 (R.L.) 体部	ナデ	早中期～後期初期	織縫倒入	第225回4
第43回 4	S G93-8	A区深掘	4層	陶文土器	深鉢	体部	羽吹模文 (R L-L R)	ナデ	早中期～後期初期	織縫倒入	第225回5
第43回 5	S G91-1	A区深掘	9層	陶文土器	深鉢	体部	L.R (横肋)	黄枝条捺文	早期後期	織縫倒入	第225回5

## A区表探 十字窓発見表

回収番号	登録番号	出土地点	層位	種別	種類	部位	外 表	内 面	時 期	備 考	写真図版
第44回 1	S G98-2	A区	表探	陶文土器	深鉢	体部	陶文 (R.L.) 併生	ナデ	早中期～後期初期	織縫倒入	第225回9
第44回 2	S G85	A区	表探	陶文土器	深鉢	体部	縦瓦状捺条文 (L)	ミガキ	大木2a式	織縫倒入	第225回1
第44回 3	S G98-1	A区	表探	陶文土器	深鉢	体部	浮出水波捺文 (R.L.-L.R)	ナデ	前期後期	織縫倒入	第225回10
第44回 4	S G97-1	A区	表探	陶文土器	深鉢	口縛部	船形状模文 (R.L.-L.R)	ヨコナデ	前期後期 (上川名～大木1式)	織縫倒入	第225回3
第44回 5	S G114	A区	表探	陶文土器	深鉢	体部	舞丸ループ文	ミガキ	大木2a式	織縫倒入	第225回4
第44回 6	S G99	A区	表探	陶文土器	深鉢	体部	秋田絞耐村文	不明(風化)	大木2式		第225回2
第44回 7	S G107	A区	表探	陶土	生土	土器	直立模位→方形土支→ミサギ	ミガキ	前中期～中期後半 (縦式)		第225回3
第44回 8	S G87	A区	表探	陶土	生土	口縛部	陶文 (R.L.)、交叉刻突文	ナデ	天正式		第225回6
第44回 9	S G112	A区	表探	土器	片口縛	口縛部	ロクロ模文	ナデ→ミガキ	表身ノ人式	内面黑色地殻	第225回7
第44回 10	S G105	A区	表探	土器	底部	阿蘇奈切	不明(風化)				第225回8

## A区深掘トレント出土 石器調査表

回収番号	登録番号	出土地点	層位	種別	石 材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	備 考	写真図版
第43回 6	S G54	A区深掘	4層	調片	珪化麻尾岩 (珪化度高)	36.7	34.3	15.8	12.4		第225回7
第43回 7	S G49	A区深掘	9層	スクレイパー	玉髓	61.8	42.1	18.7	50.4		第225回8

## A区表探 右側壁発見表

回収番号	登録番号	出土地点	層位	種別	右 材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	備 考	写真図版
第43回 8	S G63	A区	表探	打削石斧	ダイサイト	132.8	76.0	39.9	405.0		第225回10
第43回 9	S G80	A区	表探	スクレイバー	地質 (映石質)	45.2	37.0	12.1	24.6		第225回9

## (8)まとめ

## ①中世

篠跡内に設けた21箇所の調査区のうち、遺構が確認された調査区は17箇所であった。それらの遺構を、主郭・南郭・腰郭や堀切などの遺構ごとに調査結果をまとめる。

主郭の中央よりやや東方には、南北方向に延びる段状遺構がある。この段の下に設定した第8トレントからは、段状遺構とほぼ平行する溝状遺構と掘立柱建物跡が確認された。掘立柱建物跡は、溝状遺構を切っているので、掘立柱建物跡の方が新しい。この掘立柱建物跡と溝状遺構などのある面は、地山を削平して整地されている。段状遺構は、断面を断ち切って観察した結果、表土を地山面まで削り整地した後、再度積み土をして整地している。主郭の東北端と北端に設定した、第7トレントと第11トレントからは、積み土をした整地層が確認された。東南端に設定した第6トレントからは地山に掘られたビットが、東北端に設定した第7トレントからは、整地層に掘られたビットが確認された。これは、上塙の無いところに建てられた柵か塀の柱穴と思われる。西側から南側にかけての上塙は、地山を削り出して築かれているが、一部は積み土をして高くしている。以上の調査結果からすると、主郭の平場は、ほとんどが地山を削平して整地され、削られた土は段状遺構と平場の縁辺部に積んで整地したものと考えられる。

副郭の東側、平場部分の第16トレントからは、ビットなどは確認できなかったが、地山を削平して整地した平坦面が確認された。西側にある土塙は、第21トレントの断ち切り状況から、第2堀切を造った際に出た地山の愛

島軽石を積んで構築されていた。

副郭の西側には、第2堀切と第3堀切、その間に第1土塁と第2土塁という四重の防衛線があり、西側からの尾根沿いに攻撃してくる敵を意識した防護構造になっている。これは、菅生館跡の南側から東をまわって北側にかけては急斜面であるが、西側には斜面が無くほぼ平坦な面で、攻撃され易いことによるものと考えられる。

第1腰郭の、第1・2・3・4・5トレンチからは、ピット・土壙・溝状遺構などが確認された。特に第1・2トレンチはピットの数が多く、ここには掘立柱建物あるいは柵や塀などの構造物が建てられていたものと考えられる。第5・6トレンチの、主郭の斜面下に当たるところからは溝状遺構が確認されたが、これは排水のために造られたものと考えられる。

第2腰郭の第14トレンチからは、ピットが6個確認されたが、その中の3個は直径が70~90cmと菅生館跡の中でも大きなピットである。このピットは、第2腰郭の縁辺部ではなく、腰郭のほぼ中央部なので、柵や塀ではなく掘立柱建物の掘り方である可能性が高いものと考えられる。

南郭北側の斜面下にある通路状遺構の、第19・20トレンチからは溝状遺構が確認された。これは、東西方向にある通路状遺構と平行し、通路状遺構の中ほどから西側にある溝状遺構と接続するものと思われる。この溝状遺構は、それほど深いとは思えないでの、その機能に関しては排水用であると考えられる。

紫桃正隆氏は、「史料仙台領内古城・館」第4巻の中で菅生館跡の略図を公表されており（文献3）、その図中に大手門と搦手を入れている。大手門とされた地点は、主郭の東南下にある第3腰郭の中ほどである。この場所は、第3腰郭の中央から東北方に約1.4mの段を上ると、主郭と横状遺構との間に出るところで、門跡の遺構は現地表面からは確認できなかった。しかし、この場所以外には、門を造れる適当な場所はみられないでの、ここが門跡の最も有力な地点の一つと思われる。また、紫桃氏は搦手と思われる場所を、第1腰郭から第5腰郭へ一段降りて、さらに第19腰郭へと下る付近としているが、現状の観察では明確に搦手とは確認できなかった。

また、館跡内には井戸跡や豊富に水が湧くような地点は見つからなかったので、常に館内で生活することは難しいと思われる。したがって、菅生館に関係する武士は、平時は水場のある山麓近くの平地に居住し、有事の際に館へと登ったものと考えられる。

遺物は、第8・9・13トレンチから中世陶器と中国製磁器の破片が出土した。中世陶器は、すべて在地産の塊の破片で、年代は13世紀後半から14世紀前半である。中国製磁器は、染付（青花）文様のある楕円皿の小破片で、年代は16世紀である。そのほか、石臼・石鉢・土師質土器・木製椀の破片も各1点出土または表張した。

菅生館跡の年代は、出土した陶磁器から鎌倉時代後期に焼造され、その後戦国時代に再び使用されたものと考えられる。しかし、調査結果からは戦国時代に使用された際に、当初焼造された館の構造がどの程度変更されたかということについては判らなかった。館主については、江戸時代の記録では菅生助八郎と伝えているが、これを裏付けられるような遺物の出土はなかった。『伊達世臣家譜』によると、菅生助八郎は、文禄4年（1595）に伊達政宗から菅生村に100石を給されたが、16世紀の中国製磁器の小破片はそれを裏付ける資料かもしれない。それよりも、新しい時代の遺物の出土は無かったので、菅生助八郎が栗原郡刈穂村に改められた後はすぐに施城になつたものと思われる。その年代は、慶長から元和年間（1596~1624）頃と推定される。刈穂村に移つてからの菅生氏の動向については不明であるが、『維新前本村内在住藩士食糧及人名』には「一、三白石 大藩上 刈穂村 菅生助八郎」と記されている（文献12）。

## ②縄文時代～古代

第8トレンチ・第13トレンチ・第21トレンチからは石器などが出土したので、菅生館跡の主郭から副郭にかけ

ての尾根上には、縄文時代の遺構があったものと推測されるが、築城によって大部分が破壊されたものと思われる。しかし、第21トレンチの郭裏西側は、土壌の積み土によって縄文時代の包含層が残存しており、8層から37点の石器と縄文土器片が1点出土した。この8層の土壌からは、テフラ分析により火山ガラスが僅かに検出され、これは始良Tn火山灰と阿蘇4テフラに山來する可能性が高いという結果が出ている（付録参照）。石器の周辺からは、炭化物も多く検出され、その中から1個を分析した結果、それはクリであった。石器には、スクレーパーの破片2点と二次加工のある剥片が1点だけで、トゥールが非常に少ない傾向にあり、ほとんどが石核や剥片である。また、2点だけであったが接合資料もあり、これは石器の製作をこの場所で行っていたことを示すものである。調査区の幅は1.6mほどであったが、ほぼ全面で石器などが出土したので、この分布は調査区の南側および北側にも延びるものと思われる。また、第1土壌からも剥片などが2点出土しているので、第2堀切を越えた東西14mの範囲まで石器の製作場であった可能性もある。

石器には、時代的な特徴を有するものが無く、石器から年代を特定することは出来なかった。年代を推定できる遺物は、同一の層から1点だけ出土した縄文土器片である。この縄文土器片は繊維を含む土器であるが、風化のために文様がまったく残っていないので、型式名などは判らない。繊維土器は、一般的に縄文時代早期末葉から前期中葉とされているので、石器もこの頃のものと考えられる。しかし、8層中に含まれていた炭化物の放射性炭素年代測定からは、補正年代で $3044 \pm 38$ という縄文時代後期後葉頃という測定結果が出たので、繊維土器の相対的な年代とはかなり離れたものとなった。

出土した石器の石材は、玉髓と玉髓化した珪化木が最も多く16点(43%)、デイサイト質珪化凝灰岩7点(19%)、デイサイト質凝灰岩7点(19%)、デイサイト2点(5%)、珪質頁岩2点(5%)、頁岩1点(3%)、珪化凝灰岩1点(3%)、流紋岩1点(3%)となる。全体的には、玉髓・デイサイト質珪化凝灰岩・デイサイト質凝灰岩の3種が多く用いられている。デイサイト・珪化凝灰岩・流紋岩については、すべて珪化が著しいものである。縄文時代の石器に最も多く用いられた珪質頁岩は、わずかに2点と少ない傾向にある。

デイサイト質珪化凝灰岩類や珪質頁岩・流紋岩などの産出地は不明であるが、玉髓と玉髓化した珪化木については菅生館跡に比較的近いところから産出している。それらは、菅生館跡の東方約2kmの坪沼川上流域から、西南方約7.5kmの新川上流域にかけての地域で、地形的には低い丘陵地帯である。藤原二郎氏や高橋健寿氏の分布調査によると、坪沼川上流域で7箇所、新川上流域で22箇所の計29箇所において玉髓の産出が確認されている。これらの玉髓は、珪化木が何らかの作用によって玉髓に変化するものとされ、これは上部中新統白沢層の経質質凝灰岩層中に埋没していたものが、表層崩壊や地滑りなどによって地表に露出したものであるという（文献13）。

玉髓製の石器は、村田町大字小泉の賀笠瀬遺跡に代表される新川流域遺跡群において多数出土している。この遺跡群は旧石器時代後期で、玉髓を原石として石器の製作を行った原産地遺跡である（文献14）。縄文時代における玉髓の使用については、菅生館跡周辺での発掘調査例が少ないのでよく判っていないが、菅生地区の西南方に隣接する、足立字乗越にある縄文時代後期の東足立遺跡では、珪質頁岩を主要な石材としているが、石鐵や不定形石器の一部に玉髓が用いられている。石鐵では、22%が玉髓、65%は珪質頁岩で、石錐・石匙・範状石器などには玉髓製のものが無く、3cm以下の小型の石器のみに玉髓が用いられている（文献15）。これは、東足立遺跡においては石器の大きさによって、石材の使い分けがあったことを示すものである。また、村田町大字足立寺人にある寺人B遺跡においても玉髓製の鉛垂線石器が出土している（文献16）。仙台市太白区坪沼字相ノ原にある相ノ原遺跡では、縄文時代後期初頭の層から玉髓製の石器が僅かに出土している（文献17）。さらに、村田町大字村田字追にある村田城跡でも、弥生時代の遺物包含層から玉髓の剥片や碎片を採集したことがある。

のことから、村田町の北部地域において、在地の石材である玉髓は旧石器時代後期には主要な石材として用

いられていた。縄文時代早期末葉から前期中葉においても、原石の大半は玉髓であったが珪質頁岩が少量用いられるようになり、縄文時代前期後葉から縄文時代後期の間のいずれかの時期に玉髓と珪質頁岩の逆転が起こり、それ以降は珪質頁岩が主流になるようである。しかし、まったく玉髓が使われなくなるのではなく、弥生時代に入っても石器の一部に玉髓が用いられたものと推測される。これは、今後の考古学的調査例の増加と、その玉髓が新川流域か坪沼川上流域から供給されたものなのかという化学的分析を含めた検討が必要と思われる。

A区からは、土壙1基と遺物包含層が確認された。土壙の年代は、織維土器片から縄文時代前期前葉である。深掘トレンチの遺物包含層からは、縄文時代早期後葉から前期初頭にかけての土器と石器が出土した。また、A区内の西南部からは縄文時代早期から前期の土器、弥生土器、平安時代の土師器片なども表探したので、A区の西南方に続く平坦面には、これらの時期の遺構が存在する可能性が高いものと考えられる。

#### 引用・参考文献

1. 弥生地区農林業等活性化推進連絡会議(編)『青生ふるさと探訪—青生地区農林業等活性化推進連絡会議活動記録集—』  
村田町 平成11年3月31日
2. 「柴田郡誌」 柴田郡教育会 大正14年10月15日
3. 紫桃正蔵『史料仙台領内古城・館』第4巻 宝文堂 昭和49年7月20日
4. 「仙台領古城書上」 延宝年間(『仙台叢書』第4巻 107~143頁 仙台叢書刊行会 大正12年9月10日)
5. 「仙台領古城書立之覚」(『宮城県史』第32巻 108~160頁 宮城県史刊行会 昭和45年3月31日)
6. 「柴田郡青生村風上記御用書出」 安永6年(『宮城県史』第28巻 391~397頁 宮城県史刊行会 昭和36年9月10日)
7. 「伊達世臣家譜卷之十二 平七之部(『伊達世臣家譜』第2巻 仙台叢書刊行会 昭和12年3月27日)
8. 宮城県姓氏家系大辞典編纂委員会『宮城県姓氏家系大辞典』角川書店 平成6年7月8日
9. 「大崎義宣起居文」(『宮城県史』第30巻史料集I 350頁 宮城県史刊行会 昭和40年3月31日)
10. 「伊達政宗山道人歎書」(『大日本古文書家わけ第三』伊達家文書之二 451~466頁 東京大学出版会 昭和57年5月25日)
11. 村田町史編纂委員会『村田町史』 村田町 昭和52年3月
12. 志波姫町史編纂委員会『志波姫町史』 志波姫町 昭和51年10月
13. 大場正善「宮城県柴田郡村田町新川流域道路群について—東北地方南部太平洋側にある後期旧石器時代の主軸原産地遺跡からの手跡—」『宮城考古学』第6号 1~34頁 宮城県考古学会 平成16年5月15日
14. 東北学院大学佐川ゼミナール「賀電沢遺跡2005年度発掘調査の成果」『平成17年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』1~6頁 宮城県考古学会 平成17年12月18日
15. 黒川利司「東足立遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集東北自動車道遺跡調査報告書V 185~280頁 宮城県教育委員会 昭和56年9月25日
16. 手塚均「寺入B遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第120集東北横断自動車道遺跡調査報告書I 107~112頁 宮城県教育委員会 昭和61年3月31日
17. 宮沢光郎・佐藤淳「相ノ原遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第217集相ノ原・大貝中・川添東遺跡一国道286号線(赤石工区)改良工事関係発掘調査報告書— 20~163頁 仙台市教育委員会 平成9年3月

## 付編 菅生館跡副郭土塁下出土遺物の年代に関する自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

村田町に所在する菅生館跡は、仙台平野南西方に分布する高額丘陵の尾根上に位置する。発掘調査では、戦国時代の菅生館を構成していたと考えられる整地層や堀切、土塁などの遺構が確認されているが、土塁の下位の褐色土層からは、スクレイパー、コア、フレイク、チップなどの石器および鐵雜土器の小片が多数の炭化物を伴って出土している。

本報告では、上述した石器および土器に関する年代資料を得ることを目的として、伴出した炭化物の放射性炭素年代の測定および包含層中に含まれる指標テフラの検出を行う。

### 1. 試料

放射性炭素年代測定の対象とした試料は、第21トレンチの副郭土塁下から出土した石器に伴う炭化材1点であり、テフラ分析の対象とした試料は、同地点から採取された石器、土器および炭化物を含む褐色の土壤1点である。炭化材の注記等については、測定結果を示した表1に併記する。

発掘調査所見では、試料が採取された地点の順序を、表土を1層、表土下の自然土壤を2層、その下位の土塁を構成する盛土を3～5層に分層し、盛土の下位に認められた褐色土を6層、暗褐色土を7層、その下位の褐色土を8層、その下位の角礫を多量に含む黄褐色の砂質土壤を9層、最下位の愛島輕石層を10層としている。年代測定試料およびテフラ分析試料の採取された遺物包含層は8層に相当し、8層中には川崎スコリアの細粒を僅かに含んでいるとされている。なお、愛島輕石の噴出年代は9～10万年前、川崎スコリアの噴出年代は3万年前以前とされている（町山・新井、2003）から、9層の形成年代は愛島輕石噴出以降、8層の形成年代は川崎スコリア噴出以降と考えられる。

### 2. 分析方法

#### (1) 放射性炭素年代測定

試料は、土壤や根などをビンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去し、その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空中にして封じきり、500°C (30分) 850°C (2時間) で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3 MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も行うため、この値を用いてδ<sup>13</sup>Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。曆年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

## (2) テフラ分析

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

## 3. 結果

### (1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。試料は $3,040 \pm 40$ BPを示す。表2には曆年較正結果を示す。曆年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、及び半減期の違い( $^{14}\text{C}$ の半減期5730±40年)を較正すること

表1 放射性炭素年代測定結果

試料名	注記など	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.	Measurement No.
炭化物 SG5の10cm北 H.17.9.29	副部土壌下石器	炭化材(クリ)	$3,040 \pm 40$	-25.80±0.72	$3,060 \pm 40$	9106-1	IAAA-51799

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2 曆年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	曆年較正年代(cal)						相対比	Code No.
		$\sigma$	cal BC 1,383	—	cal BC 1,333	cal BP 3,333	—	3,283	
炭化物 3,044±38	$3,044 \pm 38$	cal BC 1,324	—	cal BC 1,266	cal BP 3,274	—	3,216	0.531	9106-1
		cal BC 1,413	—	cal BC 1,208	cal BP 3,363	—	3,158	0.992	
		cal BC 1,201	—	cal BC 1,196	cal BP 3,151	—	3,146	0.005	
		cal BC 1,138	—	cal BC 1,135	cal BP 3,088	—	3,085	0.003	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、曆年較正曲線や曆年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が扱いやすいように、1桁目を丸めていない。

4) 計算的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68%、 $2\sigma$ は95%である

5) 相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

とである。曆年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に曆年較正プログラムや曆年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。今回の試料には、北半球の大気中炭素由来する較正曲線を用いる。

曆年較正は、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ 双方の値を計算する。 $\sigma$ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差を $\sigma$ として計算させた結果、試料の曆年代はcalBCI, 383–1,266となる。

## (2) テフラ分析

処理後に得られた砂分は、石英や長石粒が主体をなし、また斜方輝石や角閃石などの重鉱物粒や安山岩、凝灰岩などの岩石片も少量混在する。テフラの本質物と考えられる碎屑物は、無色透明または淡褐色を呈するバブル型火山ガラスが、極めて微量認められた。

なお、極めて微量認められた火山ガラスを抽出し、その屈折率を測定したところ、n1.499–1.500のレンジとn1.507–1.510のレンジの2つの屈折率のレンジが得られた。

## 4. 考察

放射性炭素年代と考古学における時期区分との詳細な対応については、現在様々なデータが取られており、検討の途上にあることから、ここでは詳細な議論は行わない。一般的な年代観からいえば、今回の炭化物試料から得られた放射性炭素年代は概ね縄文時代後期の終わり頃に相当すると言って良い。

一方、8層（遺物包含層）中から極めて微量ながらもバブル型火山ガラスが検出されたことから、8層の形成以前あるいは形成途上でガラス質テフラの降灰があり、その碎屑物である火山ガラスが、8層を構成している褐色土壤の母材の一部として混入し、8層中に拡散していると考えられる。したがって、8層中に包含される遺物の年代は、ガラス質テフラの降灰年代より以降であるといえる。

試料中より検出された火山ガラスの形態および屈折率、さらには八木・早田（1989）に記載されている高館丘陵周辺のテフラの座標と8層が愛島軽石の上位であるという層位関係を合わせて考えると、屈折率の低い火山ガラスは姶良Tn火山灰（AT：町田・新井、1976）、屈折率の高い火山ガラスは阿蘇4テフラ（Aso-4：町田ほか、1985）に由来する可能性が高い。

ATの噴出年代については、80年代後半から90年代にかけて行われた放射性炭素年代測定（例えば松本ほか（1987）、村山ほか（1993）、池田ほか（1995）、宮入ほか（2001）など）から、放射性炭素年代ではおよそ2.5万年前頃にまとまる傾向にある。一方、最近の海底コアにおけるATの発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ2と3との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は2.5~3.2万年前におよぶとされている（町田・新井、2003）。町田・新井（2003）は、ATの放射性炭素年代を曆年に換算することがまだ困難であると述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、曆年ではおそらく2.6~2.9万年前頃になるであろうとしている。一方、Aso-4の噴出年代については、南関東など他のテフラとの層位関係や深海

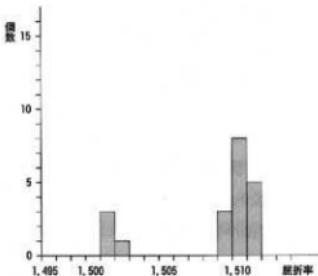


図1 火山ガラスの屈折率測定結果

底堆積物の酸素同位体比層序などから、8.5～9万年前頃とされている（町田・新井、2003）。

以上述べた放射性炭素年代測定結果およびテフラの産状から、8層中の遺物の年代は、古くともAT降灰以降であり、かつ繩文時代後期頃まで新しくなる可能性がある。ただし、年代の確定には、今後の周辺地域における類例の調査分析による検討が望まれる。

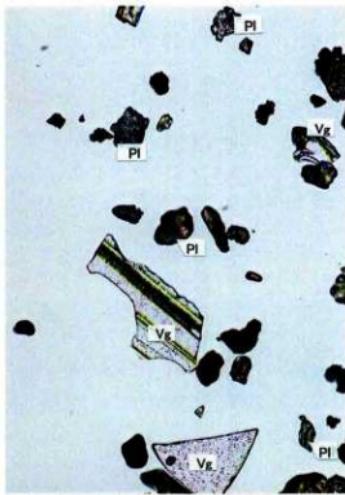
## 引用文献

- 古澤 明、1995、火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別。地質学雑誌、101、123-133。
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫、1995、南九州・姶良カルデラ起源の大崩降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代。第四紀研究、34、377-379。
- 町田 洋・新井房夫、1976、広域に分布する火山灰一姶良Tn火山灰の発見とその意義一。科学、46、339-347。
- 町田 洋・新井房夫、2003、新編 火山灰アトラス。東京大学出版会、336p。
- 町田 洋・新井房夫・百瀬 貢、1985、阿蘇4火山灰一分布の広域性と後期更新世示標層としての意義一。火山、30、49-70。
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗、1987、姶良Tn火山灰の14C年代。第四紀研究、26、79-83。
- 宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎、2001、姶良Tn火山灰のC-14年代のクロスチェック（演旨）。地球惑星科学連合学会合同大会予稿集（CD-ROM）、2001、Qm-010。
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦、1993、四国沖ビストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討—タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代一。地質学雑誌、99、787-798。
- 八木浩司・早田 勉、1989、宮城県中部および北部に分布する後期更新世広域テフラとその層位。地学雑誌、98、39-53。

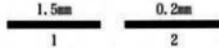
図版1 テフラ



1. 砂分の状況（第21トレンチ・副郭土壁下8層）



2. 火山ガラス（第21トレンチ・副郭土壁下8層）  
PL：斜長石 Vg：火山ガラス





# 写 真 図 版





第46図 菩生館跡遠景（西南から）



第47図 菩生館跡遠景（東から）



第48図 主郭（西北から）



第49図 主郭（東南から）



第50図 主郭西側の土壘（東南から）



第51図 主郭西側の土壘（東北から）



第52図 主郭南側の土壘（東北から）



第53図 主郭南側の土壘（西北から）



第54図 主郭東南角の土壘（北から）



第55図 主郭の段状遺構（東北から）



第56図 主郭の段状遺構（南から）



第57図 副郭（西から）



第58図 副郭（東から）



第59図 副郭の土壘（東から）



第60図 副郭の土壘（南から）



第61図 棚状遺構（西南から）



第62図 檜状遺構（東南から）



第63図 檜状遺構（北から）



第64図 檜状遺構の土壘（南から）



第65図 第1堀切（南から）



第66図 第1堀切（東北から）



第67図 第1堀切（東から）



第68図 第1堀切の西斜面（東北から）



第69図 第2堀切（南から）



第70図 第2堀切（北から）



第71図 第2堀切の北端（南から）



第72図 第2堀切（東から）



第73図 第3堀切（北から）



第74図 第3堀切北部・南側の土塁（西南から）



第75図 第3堀切（東南から）



第76図 第4堀切（東から）



第77図 第4堀切（西から）



第78図 第1土壠（北から）



第79図 第2土壠（北から）



第80図 通路状遺構（西南から）



第81図 溝状遺構（東から）



第82図 第1腰郭北部（東南から）



第83図 第1腰郭中部（北から）



第84図 第1腰郭東部・角柱は三角点（西北から）



第85図 第2腰郭西部（東南から）



第86図 第2腰郭東部（西北から）



第87図 第3腰郭西端（西から）



第88図 第3腰郭中央部（西北から）



第89図 第3腰郭南端（南から）



第90図 第4腰郭（西南から）



第91図 第5腰郭（北から）



第92図 第5腰郭（南から）



第93図 第6腰郭（東南から）



第94図 第7腰郭（西北から）



第95図 第8腰郭北端（西北から）



第96図 第8腰郭中央部（西から）



第97図 第9腰郭（西北から）



第98図 第10腰郭北端（北から）



第99図 第10腰郭東部（南から）



第100図 第10腰郭中部（東南から）



第101図 第10腰郭西部（西北から）



第102図 第10腰郭西部（西から）



第103図 第10腰郭西端（西北から）



第104図 第11腰郭（西南から）



第105図 第11腰郭（東北から）



第106図 第12腰郭（東南から）



第107図 第12腰郭（南から）



第108図 第13・14腰郭（東から）



第109図 第13・14腰郭（西から）



第110図 第15腰郭（西北から）



第111図 第16腰郭（東南から）



第112図 第17腰郭（南から）



第113図 第18腰郭（東南から）



第114図 第19腰郭（南から）



第115図 第20腰郭（南から）



第116図 第21腰郭（西南から）



第117図 第22腰郭（西南から）



第118図 第1トレンチ調査前状況  
(東南から)



第119図 第1トレンチ透構確認状況  
(西南から)



第120図 第2トレンチ調査前状況  
(南から)



第121図 第2トレンチ遺構確認状況  
(西北から)



第122図 第2トレンチ西南壁断面  
(東北から)



第123図 第3トレンチ調査前状況  
(東南から)



第124図 第3トレンチ遺構確認状況（西北から）



第125図 第4トレンチ調査前状況（西北から）



第126図 第4トレンチ遺構確認状況（東南から）



第127図 第5トレンチ調査前状況  
(東南から)



第128図 第5トレンチ遺構確認状況  
(北から)



第129図 第5トレンチ北壁断面  
(南から)



第130図 第6トレンチ調査前状況  
(東南から)



第131図 第6トレンチ調査前状況  
(東北から)



第132図 第6トレンチ遺構確認状況  
(東北から)



第133図 第6トレンチ遺構確認状況（西北から）



第134図 第6トレンチ・溝状遺構確認状況（西北から）



第135図 第7トレンチ調査前状況（東から）



第136図 第7トレンチ遺構確認状況（東北から）



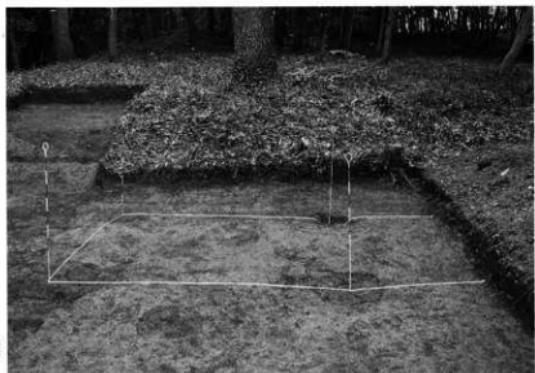
第137図 第7トレンチ・ピット確認状況（西南から）



第138図 第8トレンチ調査前状況（東南から）



第139図 第8トレンチ遺構確認状況（東南から）



第140図 第8トレンチ・掘立柱建物跡確認状況（東から）



第141図 第8トレンチ・整地層確認状況（東から）



第142図 第8トレンチ・整地層断ち割り部分断面(北から)



第143図 第8トレンチ・石核  
SG44出土状況（南から）



第144図 第9トレンチ調査前状況  
(南から)



第145図 第9トレンチ遺構確認状況（東から）



第146図 第9トレンチ・中世陶器SG128出土状況（北から）



第147図 第10トレンチ調査前状況（東南から）



第148図 第10トレンチ確認状況  
(東南から)



第149図 第11トレンチ調査前状況  
(東北から)



第150図 第11トレンチ遺構確認状況  
況 (東北から)



第151図 第11トレンチ遺構確認状況  
(西南から)



第152図 第12トレンチ調査前状況  
(東から)



第153図 第12トレンチ確認状況  
(西北から)



第154図 第13トレーナー調査前状況  
(東北から)



第155図 第13トレーナー調査前状況  
(南西から)



第156図 第13トレーナー遺構確認状況・土壠部分 (北から)



第157図 第13トレンチ遺構確認状況（西南から）



第158図 第13トレンチ・土壠部分断面（西北から）



第159図 第13トレンチ・中世陶器SG120・SG121出土状況（東北から）



第160図 第13トレンチ・中世陶器  
SG118出土状況  
(東北から)



第161図 第13トレンチ・中世陶器  
SG129出土状況 (東から)



第162図 第13トレンチ・剥片  
SG37出土状況 (東から)



第163図 第14トレンチ調査前状況  
(北西から)



第164図 第14トレンチ遺構確認状況  
(東南から)



第165図 第15トレンチ調査前状況  
(北から)



第166図 第15トレーニング確認状況  
(北東から)



第167図 第16トレーニング調査前状況・主郭西側土塁  
(東南から)



第168図 第16トレーニング調査前状況・第1堀切部分  
(東南から)



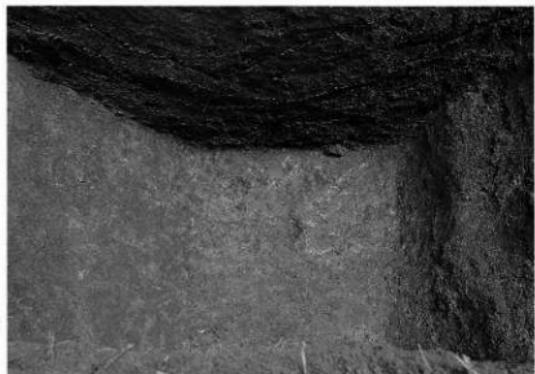
第169図 第16トレンチ調査前状況・第1堀切部分  
(西北から)



第170図 第16トレンチ遺構確認状況・主郭部分（東南から）



第171図 第16トレンチ遺構確認状況・第1堀切東斜面  
(西北から)



第172図 第16トレンチ遺構確認状況・第1堀切底部  
(東北から)



第173図 第16トレンチ遺構確認状況・第1堀切西斜面  
(東南から)



第174図 第16トレンチ遺構確認状況・第1堀切西斜面の土畠  
(東北から)



第175図 第16トレンチ遺構確認状況・副郭部分（西北から）



第176図 第16トレンチ・第1堀切底部断面（東北から）



第177図 第16トレンチ・第1堀切西斜面中間部断面（東北から）



第178図 第17トレンチ調査前状況  
(北から)



第179図 第17トレンチ確認状況  
(北西から)



第180図 第18トレンチ調査前状況  
(東南から)



第181図 第18トレンチ確認状況  
(東北から)



第182図 第19トレンチ調査前状況  
(西から)



第183図 第19トレンチ遺構確認状況  
(東から)



第184図 第20トレンチ調査前状況  
(東から)



第185図 第20トレンチ遺構確認状況  
(東から)



第186図 第21トレンチ調査前状況・第2堀切東斜面  
(西から)



第187図 第21トレンチ調査前状況・第3堰切西斜面  
(西から)



第188図 第21トレンチ造構確認状況・副郭土壁部分  
(東から)



第189図 第21トレンチ造構確認状況・第2堰切西斜面  
(西から)



第190図 第21トレンチ遺構確認状況・第1土壠部分  
(北から)



第191図 第21トレンチ遺構確認状況・第2土壠部分  
(北から)



第192図 第21トレンチ遺構確認状況・第3堀切東斜面  
(西から)



第193図 第21トレンチ遺構確認状況・第3堀切西斜面  
(東から)



第194図 第21トレンチ・第2堀切断面(西北から)



第195図 第21トレンチ・第2堀切底部断面(北から)



第196図 第21トレンチ・第3堀切  
底部断面（北から）



第197図 第21トレンチ・副郭土塁  
断ち割り状況（東から）



第198図 第21トレンチ・副郭土塁  
下の砥石SG135出土状況  
(東から)



第199図 第21トレンチ・第1土壁  
と第2土壁の断ち割り状  
況（西から）



第200図 第21トレンチ・副郭土壁  
下の炭化物出土状況  
(西から)



第201図 第21トレンチ・副郭土壁  
下の石器出土状況  
(東から)



第202図 第21トレンチ・副郭土塁  
下の石器出土状況  
(西から)



第203図 第21トレンチ・副郭土塁  
下の石器出土状況  
(南から)



第204図 第21トレンチ・副郭土塁  
下のスクレイバーSG19  
出土状況 (西南から)



第205図 第21トレンチ・副郭土塁  
下のスクレイパー SG27  
出土状況（西から）



第206図 第21トレンチ・副郭土塁  
の断ち割り断面  
(西北から)



第207図 第21トレンチ・第1土塁  
の断ち割り断面(北から)



第208図 第21トレンチ・第2土壌  
の断ち割り断面(北から)



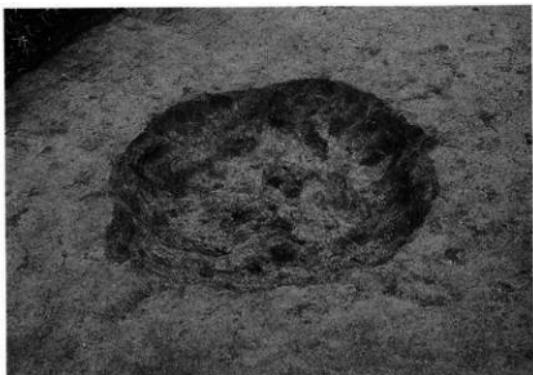
第209図 第21トレンチ・副郭土壌  
下の愛島軽石層上面  
(東から)



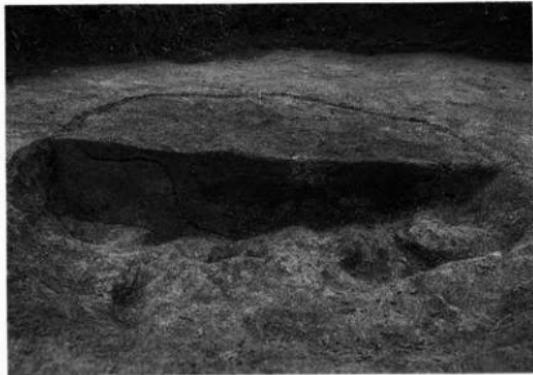
第210図 第21トレンチ・第1土壌  
と第2土壌下の愛島軽石  
層上面 (西から)



第211図 A区の調査前状況  
(西北から)



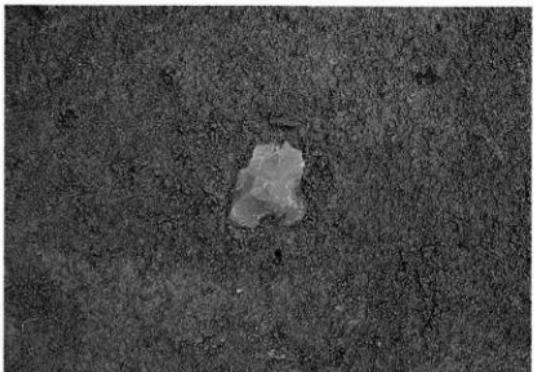
第212図 A区・土壤  
(東北から)



第213図 A区・土壤断面  
(東北から)



第214図 A区深掘トレンチ・4層  
からの縄文土器SG91-1出  
土状況（南から）



第215図 A区深掘トレンチ・4層  
からの剥片SG54出土状況  
(東南から)



第216図 A区深掘トレンチ・川崎  
スコリア層上面  
(東南から)



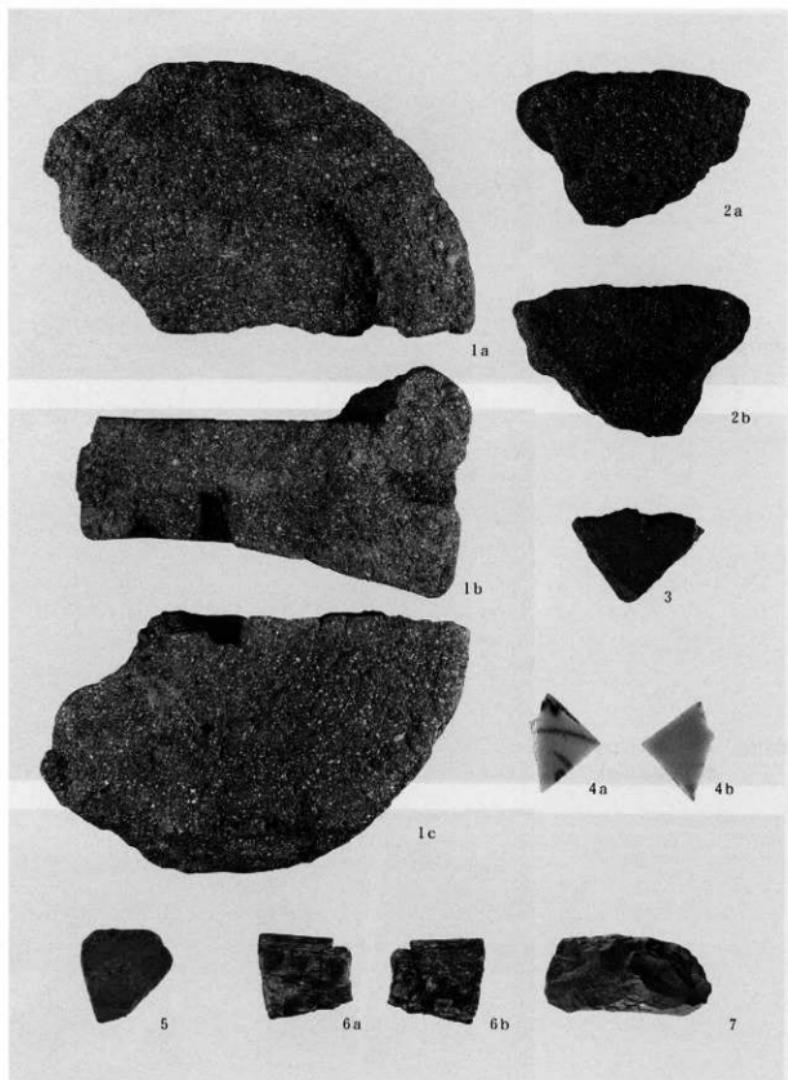
第217図 A区深掘トレンチの最終  
状況（東北から）



第218図 A区深掘トレンチ・南壁  
断面（東北から）

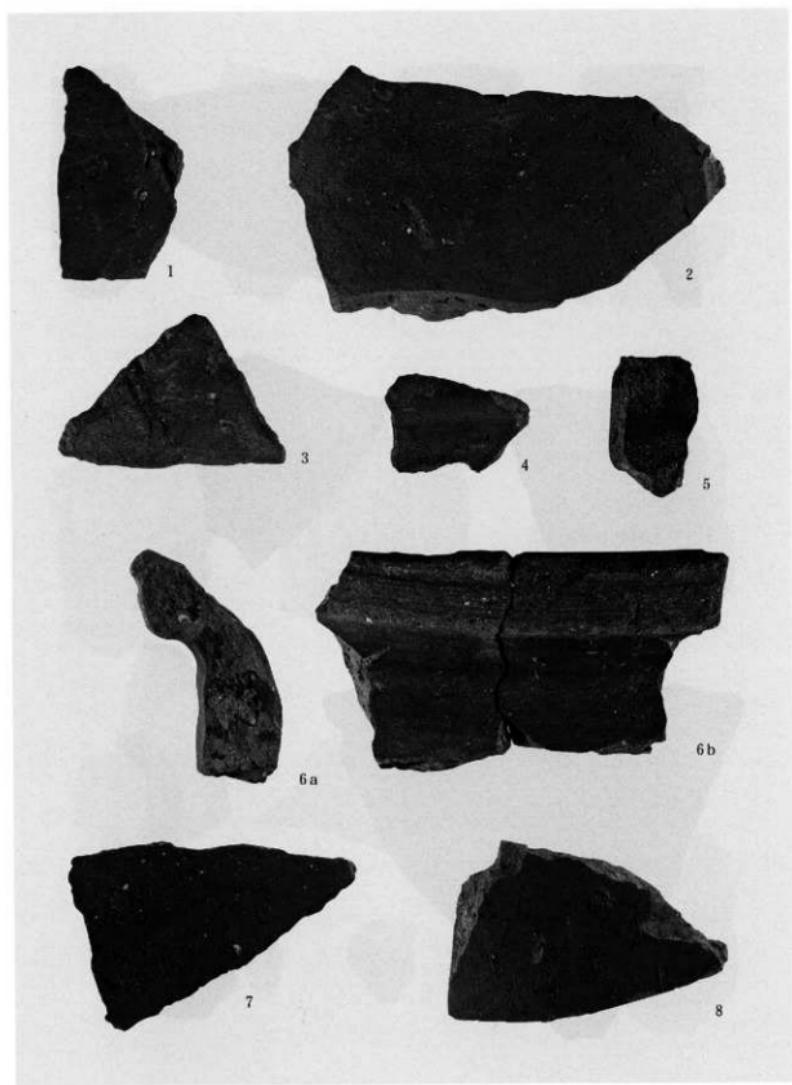


第219図 A区深掘トレンチ・西壁  
断面（東南から）



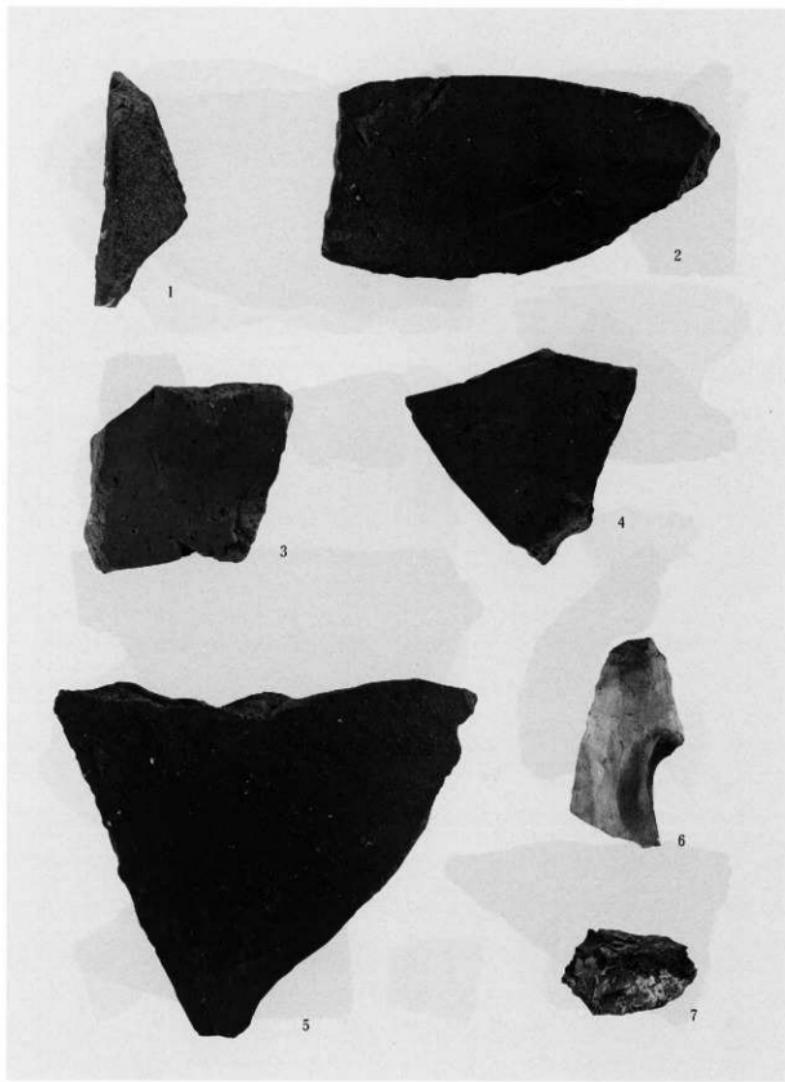
1. 石臼 (第6トレンチ・SG137) 2. 石鉢 (棒状遺構・SG136) 3. 陶器 (第8トレンチ・SG125) 4. 中国製磁器  
(第8トレンチ・SG133) 5. 土師質土器 (第8トレンチ・SG117) 6. 槌 (第8トレンチ・SG134) 7. 石核 (第8  
トレンチ・SG44)

第220図 第6トレンチ・第8トレンチ・棒状遺構遺物 (縮尺は1・2が1/3、4～6は1/1、3・7は2/3)



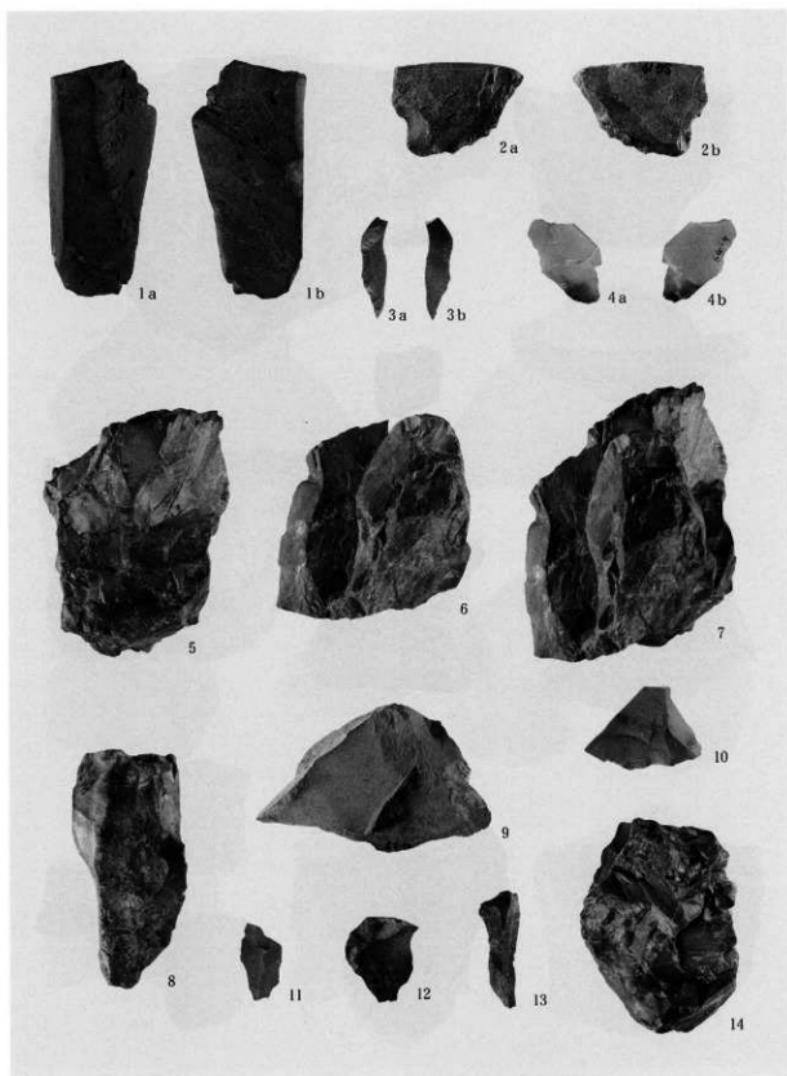
1. 陶器（第9トレンチ・SG126） 2. 陶器（第9トレンチ・SG128） 3. 陶器（第9トレンチ・SG127） 4. 陶器  
(第13トレンチ・SG129) 5. 陶器（第13トレンチ・SG120） 6a. 陶器断面の漆付着状況（第13トレンチ・SG123）  
6b. 陶器（第13トレンチ・SG123+SG132） 7. 陶器（第13トレンチ・SG119） 8. 陶器（第13トレンチ・SG118）

第221図 第9トレンチ・第13トレンチ遺物（縮尺は2/3）



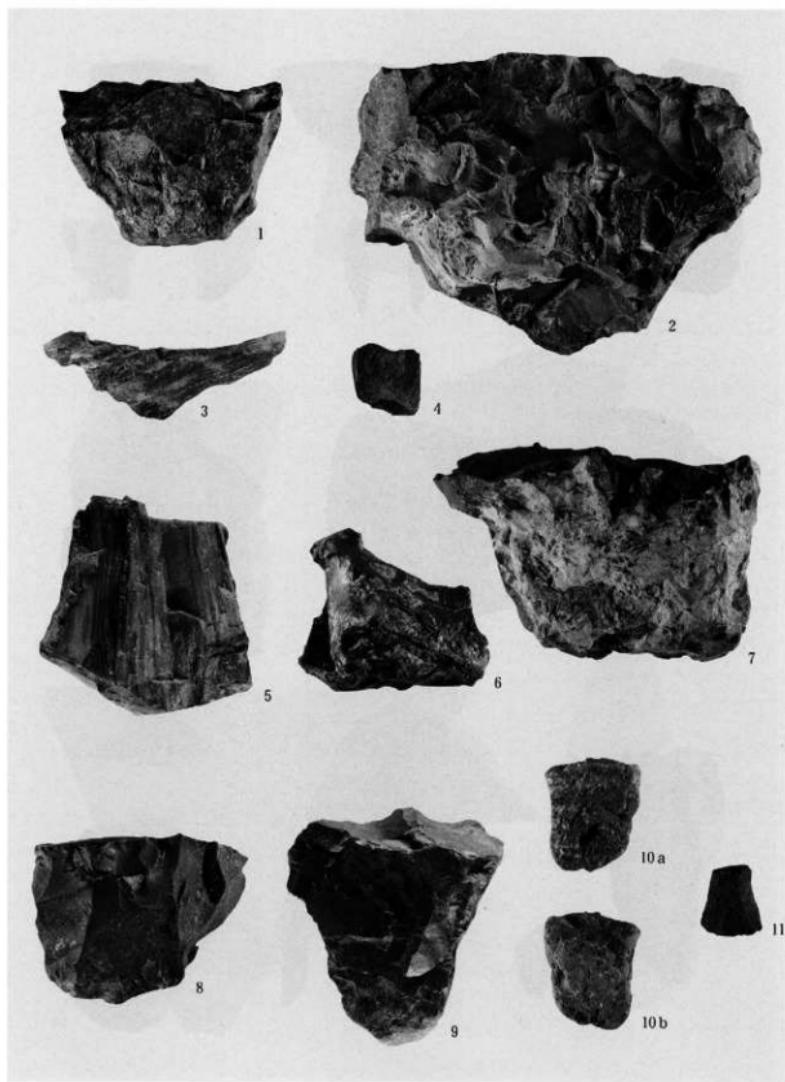
1. 陶器 (SG122) 2. 陶器 (SG121) 3. 陶器 (SG124) 4. 陶器 (SG130) 5. 陶器 (SG131)  
6. 瓶状石器 (SG36) 7. 刻片 (SG37)

第222図 第13トレンチ遺物 (縮尺は2/3)



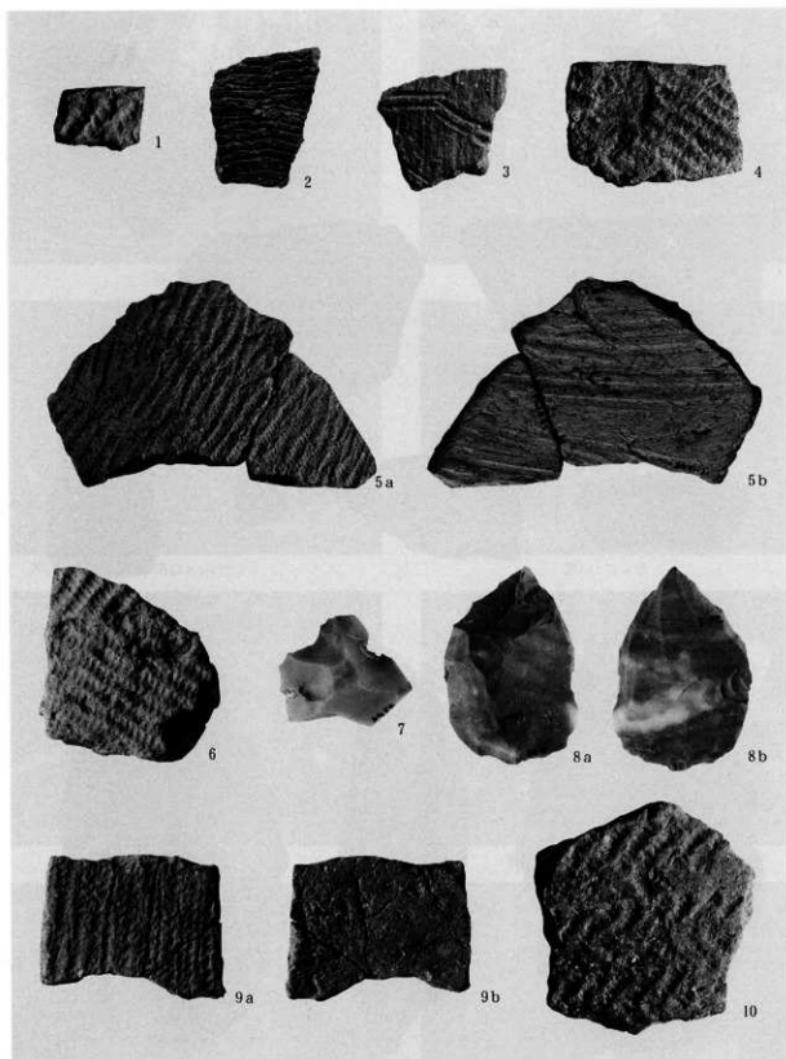
1. 紙石 (SG135) 2. スクレイバー (SG19) 3. スクレイバー (SG27) 4. 二次加工ある剥片 (SG9) 5. 剥片 (SG3) 6. 剥片 (SG13) 7. 剥片の接合資料 (SG3+SG13) 8. 石核 (SG21) 9. 剥片 (SG10) 10. 剥片 (SG31) 11. 剥片 (SG11) 12. 剥片 (SG8) 13. 剥片 (SG18) 14. 石核 (SG22)

第223図 第21トレンチの副郭土塁下遺物 (縮尺は1・5~14が2/3、2~4は1/1)



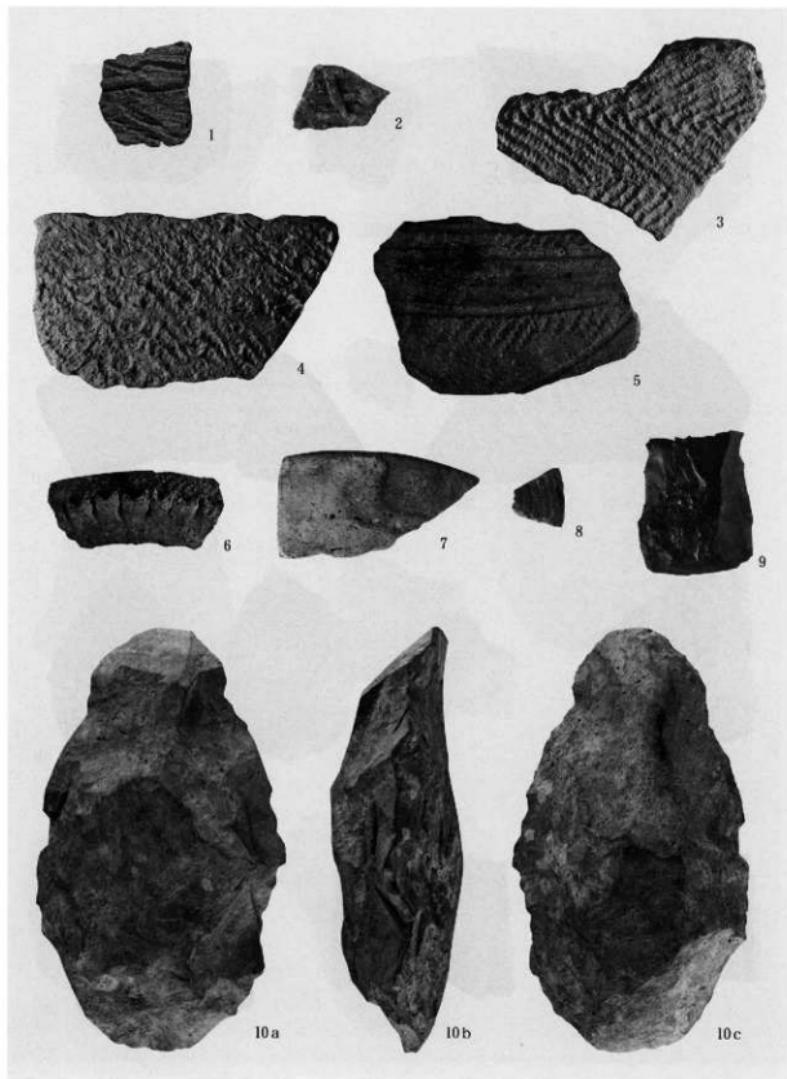
1. 石核 (SG20) 2. 石核 (SG1) 3. 剥片 (SG4) 4. 剥片 (SG42) 5. 石核 (SG5) 6. 剥片 (SG23)  
7. 石核 (SG14) 8. 石核 (SG41) 9. 剥片 (SG40) 10. 繪文土器 (SG88) 11. 剥片 (SG46)

第224図 第21トレンチの副郭土壁下・第1土壁遺物 (11のみ第1土壁: 縮尺は10のみ1/1、他は2/3)



1. 繩文土器（土壤・SG86） 2. 繩文土器（深掘トレンチ・SG92） 3. 繩文土器（深掘トレンチ・SG94） 4. 繩文  
土器（深掘トレンチ・SG93-2） 5. 繩文土器（深掘トレンチ・SG91-1） 6. 繩文土器（深掘トレンチ・SG93-8）  
7. 刃片（深掘トレンチ・SG54） 8. スクレイバー（深掘トレンチ・SG49） 9. 繩文土器（表採・SG98-2） 10. 繩  
文土器（表採・SG98-1）

第225図 A区遺物（縮尺は2/3）



1. 繩文土器 (SG85) 2. 繩文土器 (SG92) 3. 繩文土器 (SG97-1) 4. 繩文土器 (SG114) 5. 弥生土器 (SG107)  
6. 胎生土器 (SG87) 7. 土師器 (SG112) 8. 土師器 (SG105) 9. スクレイパー (SG80) 10. 打製石斧 (SG63)

第226図 A区表探遺物 (縮尺は2/3)



第3トレンチ



第8トレンチ



第13トレンチ



第13トレンチ



第16トレンチ（第1堀切底部）



第16トレンチ（第1堀切西斜面）



第21トレンチ（第1土壌・第2土壌）



第21トレンチ（第3堀切東斜面）

第227図 発掘調査風景

## 報告書抄録

ふりがな	すごうたてあと							
書名	菅生館跡							
副書名								
巻・次								
シリーズ名	村田町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	石黒伸一朗							
編集機関	村田町教育委員会							
所在地	〒989-1305 宮城県柴田郡村田町大字村田字追6 TEL 0224-83-2037 FAX 0224-83-2487							
発行年月日	西暦 2006年3月24日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
菅生館跡	宮城県柴田郡 村田町大字 菅生字館	04322	07025	38° 10' 15"	140° 45' 00"	2005.08.08 2005.10.21	445m <sup>2</sup>	県菅中山間 地域総合整備事業ほ場 整備事業菅生地区交流 施設菅生館 整備工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
菅生館跡	城館跡	中世	削切、土塁、掘立柱建物 跡、溝状遺構、土壙、 ピット、整地柵、	中世陶器、中国製磁器、石臼、 砾石、石跡、鐵文瓦、石器、				

---

村田町文化財調査報告書第22集

菅生館跡

発行日 平成18(2006)年3月24日

発行 村田町教育委員会

宮城県柴田郡村田町大字村田字追6

印刷 今野印刷株式会社

宮城県仙台市若林区六丁の目西町2-10

---

**付図 菅生館跡中央部測量図**

# 菅生館跡中央部測量図

N

0m  
50m  
100m

縮尺500分の1

